

堆積土(カマド・煙道部)

層	土色	土性	備考
1	10YR 3/4 暗褐色	少粘土	
2	10YR 3/3 暗褐色	少粘土	炭化物を含む
3	10YR 2/2 黒褐色	少粘土	炭化物を含む
4	10YR 2/2 黑褐色	少粘土	炭化物を含む。粘性なし
5	10YR 2/2 黑褐色	少粘土	炭化物を含む
6	10YR 3/2 黑褐色	少粘土	燒土若干。炭化物を含む
7	10YR 2/1 黑色	少粘土	燒土。炭化物を含む
8	5YR 3/4 暗赤褐色	燒土	炭化物を含む
9	10YR 4/4 楠色	燒土	炭化物を多く含む

第85-2図 BF21竪穴住居跡

びている。煙道底面は、中央に向って極く緩かに下がり、中央部分が最も深くなり、そこから煙出部へ緩かに上って行く。煙出部にピットは認められない。なお、煙道部分は砂礫層をくりぬいているため周壁をシルトで固めていたことが特徴である。カマドの軸方向はN-4°-Wで南北壁中点の軸線と一致する。

〔その他の施設〕 貯蔵穴状ピット、周溝は認められない。柱穴以外のピットとしてはP₃～P₆のピットが存在する。P₃は径50×35cm、深さ約20cm、P₆は径約70×60cm、深さ9cm、P₅は径約90×60cm、深さ約20cm、P₄は径約90×90cm、深さ約35cmの規模をもつ深皿状、半円状の断面形を呈するピットである。これらのうち、P₃とP₄は埋土中に焼土と炭化物を多く含んでいるものである。又、P₅のすぐ脇、住居の南東隅には南北約1.10cm、東西約80cmで、厚いところで10cm内外の堆積を示す焼土があり、その広がりは壁外にも及ぶ。しかしその下には、特に遺構は認められない。ただ、この焼土堆積の西及び北西にあたる床面に良質と思われる青白色の粘土塊が2ヵ所に存在した。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、北壁沿い、及びカマド周辺の床面や、南壁沿い中央よりの床面等から出土した土師器、須恵器、手捏ね土器、紡錘車等がある。実測したものは、土師器壺8点、高环1点、盤5点、手捏ね土器4点、須恵器大盤1点、紡錘車3点、鉄製品1点である。

土師器 製作に際しロクロ未使用のものである。

坏 (第86図1～8) (1)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る丸底で、底部との境界に形式的になった軽い段を有するものである。(2・4)は、底部から口縁部にかけて内湾直立気味に立ち上がるもので平底に近い丸底である。底部との境界に形式的になった軽い段を有する。(3)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段の丸底である。(5～7)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段平底に近い丸底で、(5)は、口径に比べて器高の深いものである。(8)は、底部よりや、外傾気味に立ち上り体部上半がわずかに内湾する平底である。調整技法をみると外面は、(1)は口縁～底部ヘラミガキ、一部ヘラケズリ(2・4)は、ヘラミガキ、ヘラケズリ、(5)はヨコナデ、ヘラミガキ、(6)はヨコナデ、底部にハケメ痕、(7)は、ヘラミガキ、ヘラケズリ、(8)はヘラミガキ、ヘラケズリと多様である。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。

小甕 (第86図10・11) (10)は、口縁部が外反し肩部に軽い段を巡るもので、体部最大径が上半に位置するもの、(11)は、口縁部が外反し体部最大径が肩部に位置する無段のものである。調整技法は、いずれも口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケメ後ケズリ、内面は、(10)はナデ一部ケズリ、(11・12)はナデである。

中甕 (第86図12) 口縁部が外反し肩部に軽い段を有する。体部最大径は上半にあるものである。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はケズリ、内面はナデである。

大甕 (第86図13) 口縁部がくの字状に外反し肩部に軽い段の巡る長胴である。体部最大径は上半にあり、底部は、体部から外へ張り出す。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は、ハケメである。

手捏ね土器 (第86図15～18) 径が5cm前後の底の丸い小型の環状のものである。指痕やナデがみられる。

須恵器

大甕 (第86図19) 口縁部が外反し、口縁上端がわずかに上方へつまみ出されている肩の張ると思われる甕の上半部分である。体部内外面ともに叩き目が施されている。

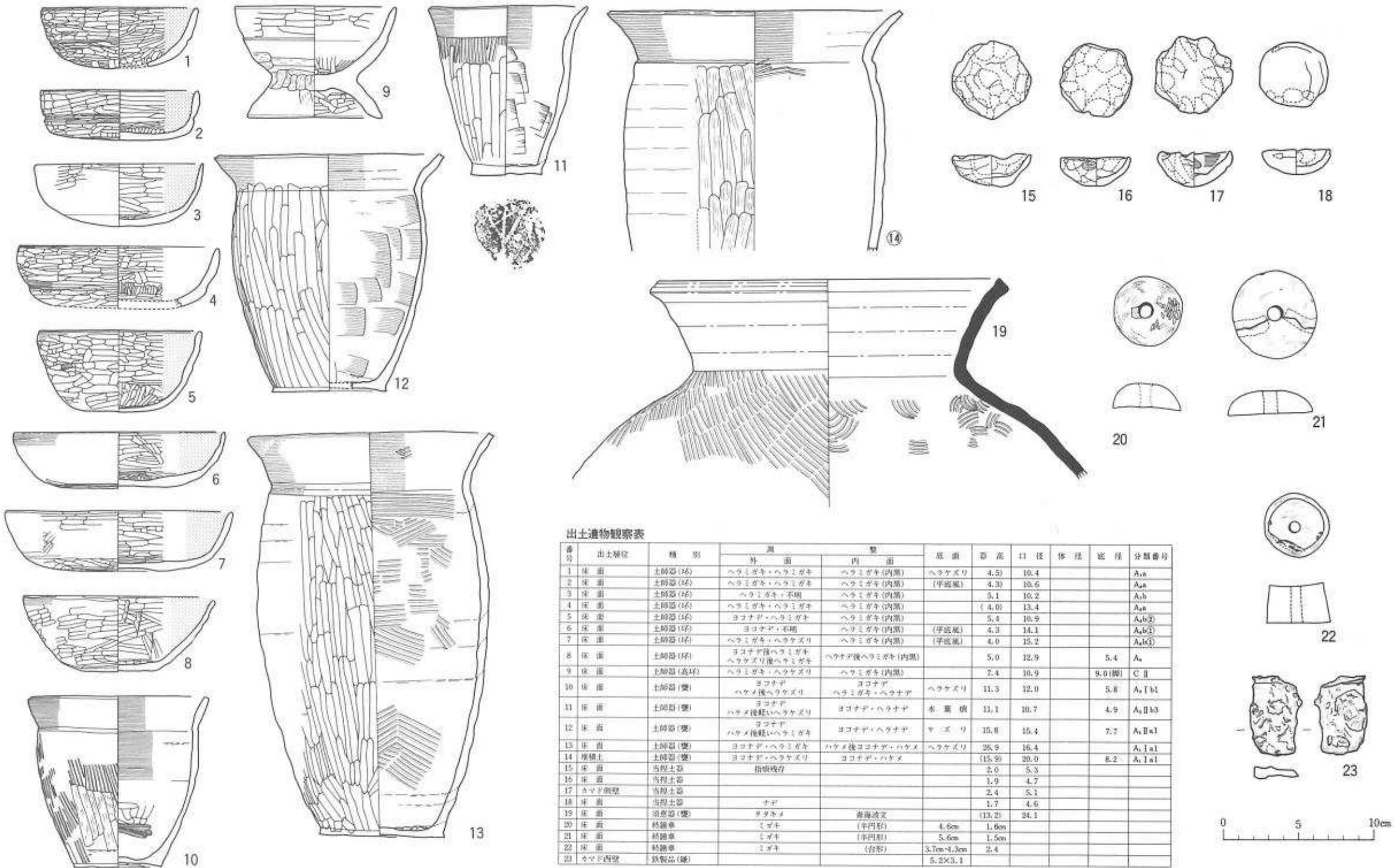
土製品

紡錘車 (第86図20～22) 平面形は径が約3.7cm～5.6cmの円形を呈し、断面形は、高さ約1.5cm～2.4cmの半円形、台形を呈しているもので、表面はミガキが施されている。

鉄製品 長さ5.2cm、幅3.1cmの板状の破片である。鎌の一部とも推定されるものである。その他、鉄滓が20数個出土している。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く土師器、須恵器、縄文土器の破片が出土している。

土師器 製作に際しロクロ未使用のものである。



第86図 BF21竪穴住居跡出土遺物

大甕 (第86図14) 口縁部が長く「くの字」状に外反する肩部に軽い段の巡る長胴の上半部分である。調整技法、口縁部外面はヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はハケメである。

その他、土師器坏は内黒の破片、須恵器は、タタキメのある大甕の破片がある。

⑩C E 68豊穴住居跡 (第87図-1・2)

〔遺構の確認〕 C調査区の東端附近、C H 74豊穴住居跡の北約8mの地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 南壁の一部がC E 71ピットを切って構築されている。

〔平面形・規模〕 平面形は方形であり、規模は長軸(東西)約3.5m、短軸(南北)約3.2mである。又、床面積は約11.2m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線は、N-0°-E Wで磁北とほぼ一致する。

〔壁〕 地山を掘り込んで壁としているもので、立ち上りも垂直に近くしっかりしている。残存状態の最も良好な北、西壁で約30cmを計る。

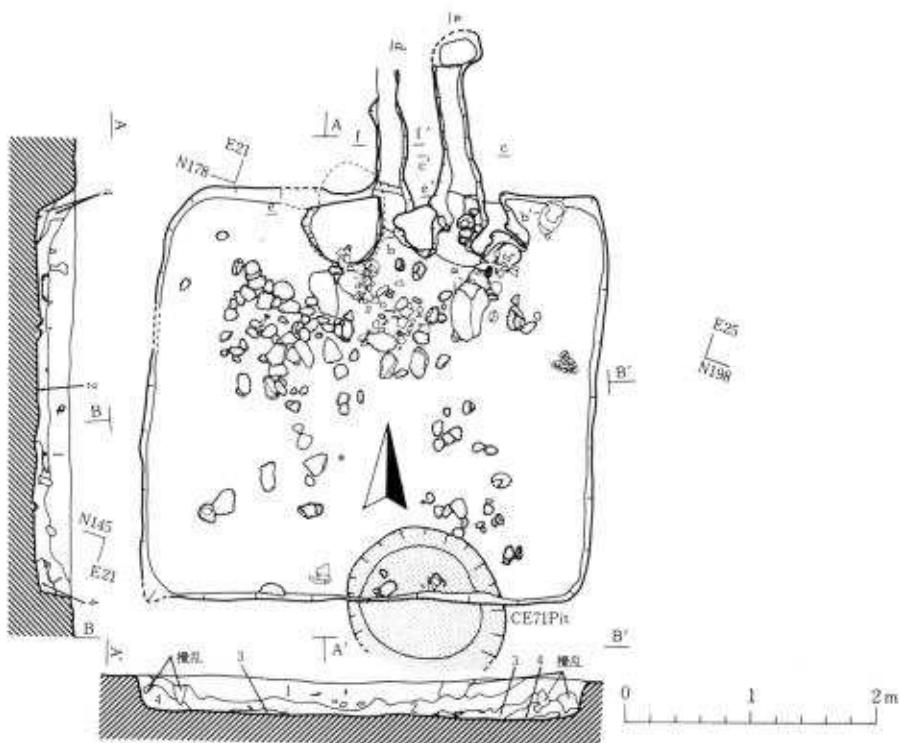
〔床〕 地山をそのまま、床面としており平坦で固い。床面直上には径10~50cmほどの川原石が存在し、特に北半に多く、これらは、円形又は、コの字状に配石されているようにみられるが意図的なのかどうか不明である。

〔堆積土〕 4層に分けることができる。1層は、黒褐色腐植土で住居の全体に堆積しているが床面には達していない。2層は、黒褐色腐植土で、土師器片を含み、壁際を除き主に床面に堆積している。3層は、暗褐色シルトで床面に部分的に堆積している。4層は、黄褐色シルトで、主として壁際に堆積している。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 北壁中央(I)と、や・東寄り(II)の2ヶ所に付設されている。(I)は、煙道のみが残存していたもので、規模は長さ約100cm、径約20cmで煙出部分は既に破壊されて検出できなかった。煙道部底面は(II)に比べて深い位置にあったものである。一方(II)は、燃焼部と煙道より成るもので、両側壁はシルトで構築されている。右側壁の南東隅には、側壁のシルトを押さえような形で底のない甕が伏せた状態で検出されている。燃焼部内は、熱を受けてレンガ状に固く、煙道口には、カマド本体のシルトを支えるために使用したとみられる川原石が、西側に2個東側に1個、それぞれ据えられていた。煙道部へは、壁近くで約30cm上り、それから壁外へと約100cm延びている。煙出部は半壊されて上部は明かでないが、煙道底面より約20cm下ったピットが存在した。カマドの軸方向はN-7°-Wである。

〔その他の施設〕 カマド(I)の燃焼部のあったと思われるところに、北壁を掘り抜いた形で、径約65cm、深さ約65cmのフラスコ状に近い断面形を有するピットが存在した。中より土師器の



堆積土

層	土色	性状	備	名
1	10YR 2/3 黒褐色	高 硬 土	焼付物、小礫、土師片含む	
2	10YR 2/2 黒褐色	高 硬 土	焼化物、小礫、土師片含む、少し軟かい	
3	10YR 3/3 黑褐色	中 硬 土	クロボタとシラリの混土、土師片	
4	10YR 4/5 深い黄褐色	シ ド ド		

第87-1図 CE68竪穴住居跡

破片が出土しており、貯蔵穴状ピットといわれるものと思われる。

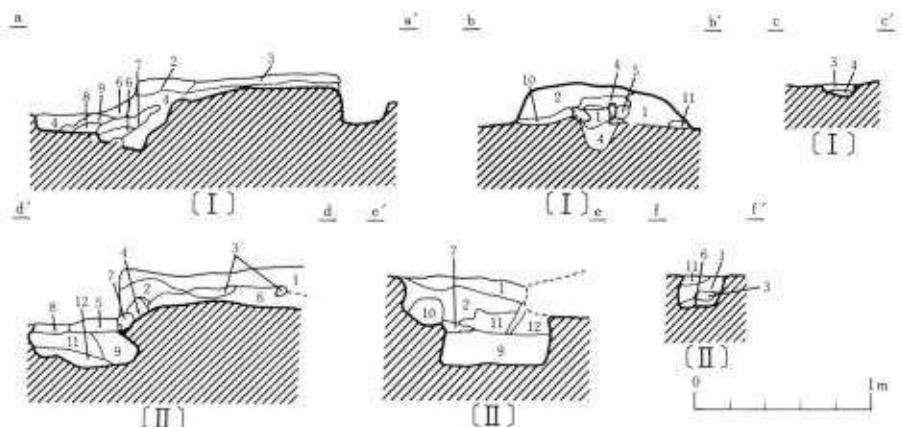
〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、ピット、床面上から出土の土師器、須恵器及び、床面上から出土した和同開称（銅錢）がある。実測したものは、土師器壺2点、高壺1点、甕6点、櫃1点、須恵器壺2点である。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

壺（第88図1・2） 底部より口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段丸底である。調整技法は、口縁部、体部はヨコナデ、ヘラミガキ、底部はヘラケズリ、一部ハケメである。内面はヘラミガキされ黒色処理されている。

高壺（第88図5） 壺部は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段のもので脚部に比べて器高の深いものである。脚部は、「八の字」に開き極端に短いものである。

甕（第88図7） 口縁部が外傾し、肩部に段を有する無底式のものである。体部の最大径が肩部にあり、底部に比べて器高が低い長胴である。器面調整は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は、ヘラケズリ、内面はヨコナデ、ケズリが一部みられる。



カマド(旧)煙道部堆積土〔I〕

層	土色	土性	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	腐植土	炭化物を若干含む
2	10YR 2/3 黒褐色	腐植土	シルトブロック状、炭化物を含む
3	10YR 4/6 灰色	シルト	炭化物を若干含む
4	10YR 4/5 棕褐色	シルト	
5	10YR 5/6 黄褐色	シルト	焼土プロック状、炭化物若干含む
6	10YR 2/3 黑褐色	腐植土	焼土・炭化物を含む
7	10YR 2/1 黑色	腐植土	炭化物を含む
8	10YR 2/2 黑褐色	腐植土	焼土・炭化物・シルト粒状を含む
9	10YR 2/3 黑褐色	腐植土	焼土・炭化物・シルトブロック状含む
10	10YR 2/3 黑褐色	腐植土	口部に比して焼土・炭化物を含む
11	10YR 3/3 暗褐色	シルト	黒土とシルトの混土、炭化物若干
12	10YR 4/4 灰色	シルト	焼土・炭化物を含む
13	10YR 4/4 灰色	シルト	

カマド(新)煙道部堆積土〔II〕

層	土色	土性	備考
1	10 YR 5/4 にじく黒褐色	シルト	
2	10 YR 5/3 にじく黒褐色	シルト	焼土・炭化物を若干含む
3	10 YR 3/4 暗褐色	腐植土	焼土を含み、シルトブロック状に入る
4	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土・炭化物を微量に含む
5	10 YR 3/4 暗褐色	腐植土	炭化物、焼土を微量に含む
6	7.5YR 5/8 明褐色	焼土	
7	7.5YR 5/6 明褐色	焼土	6層より黄味強く炭化物を含む
8	7.5YR 6/6 棕色	焼土	
9	10 YR 5/4 淡い黒褐色	焼土	炭化物を含む
10	10 YR 2/2 黑褐色	腐植土	
11	5 YR 4/6 赤褐色	焼土	炭化物を多く含む

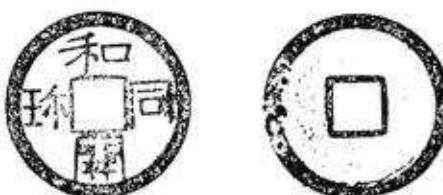
第87—2図 CE68竪穴住居跡

大甕（第88・89図8～12） いずれも口縁部が「ぐの字」に長く外反し、肩部に軽い段が巡り体部最大径が胴部上半に位置する長胴（8～12）である。口唇部を上方へつまみ出し内側に稜をもつもの（8～9）・（11～12）と、単純に上方へつまみ出しているもの（10）とがある。底部は木葉底が多く口径に比べて底径の大きいものが多い。器面調整は、口縁部内外面は、ヨコナデ、体部外面はハケメのものがあり、内面はハケメが主である。

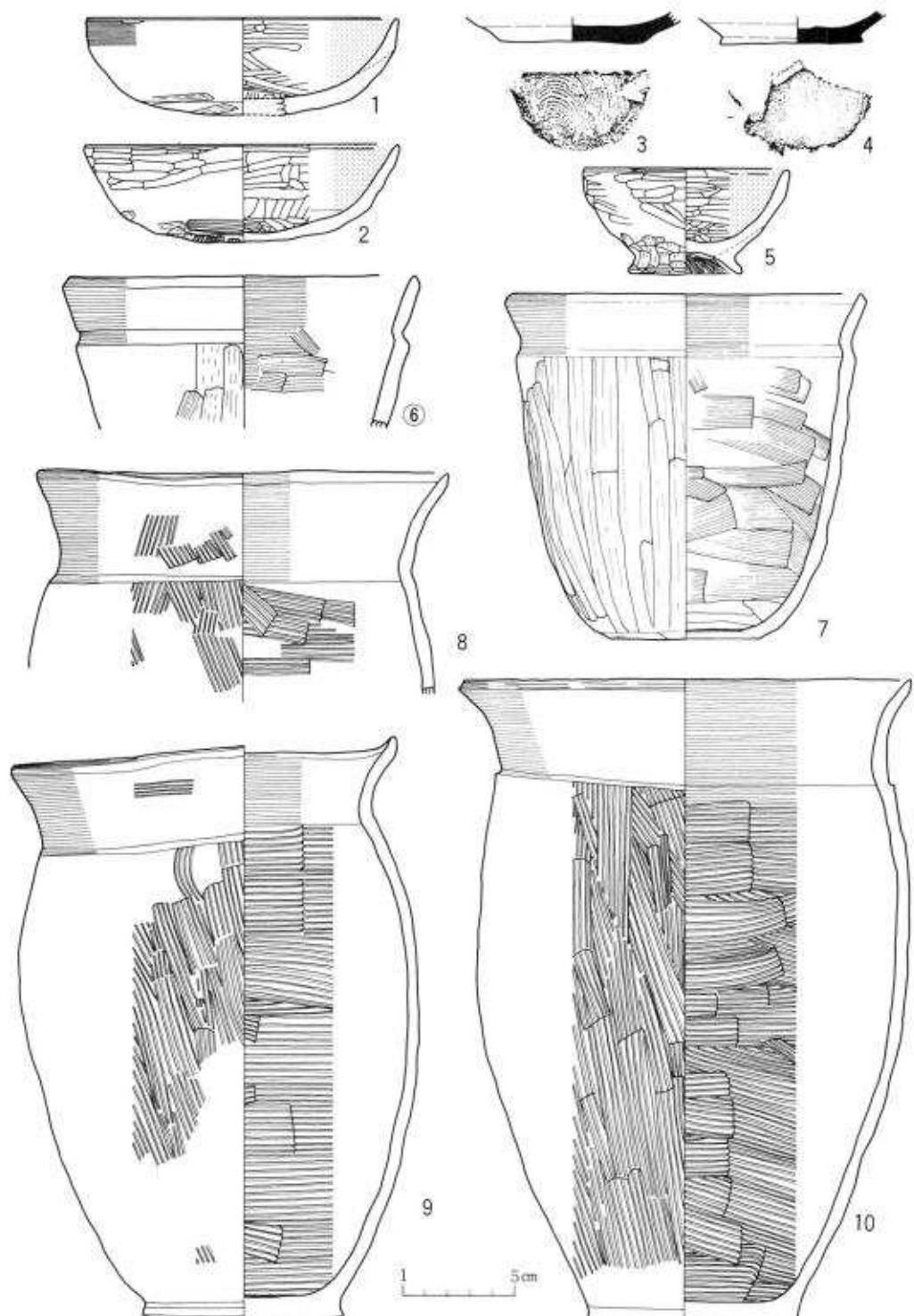
須恵器

坏（第88図3・4） いずれも底部の破片で、切り離し技法は、回転糸切無調整のものである。

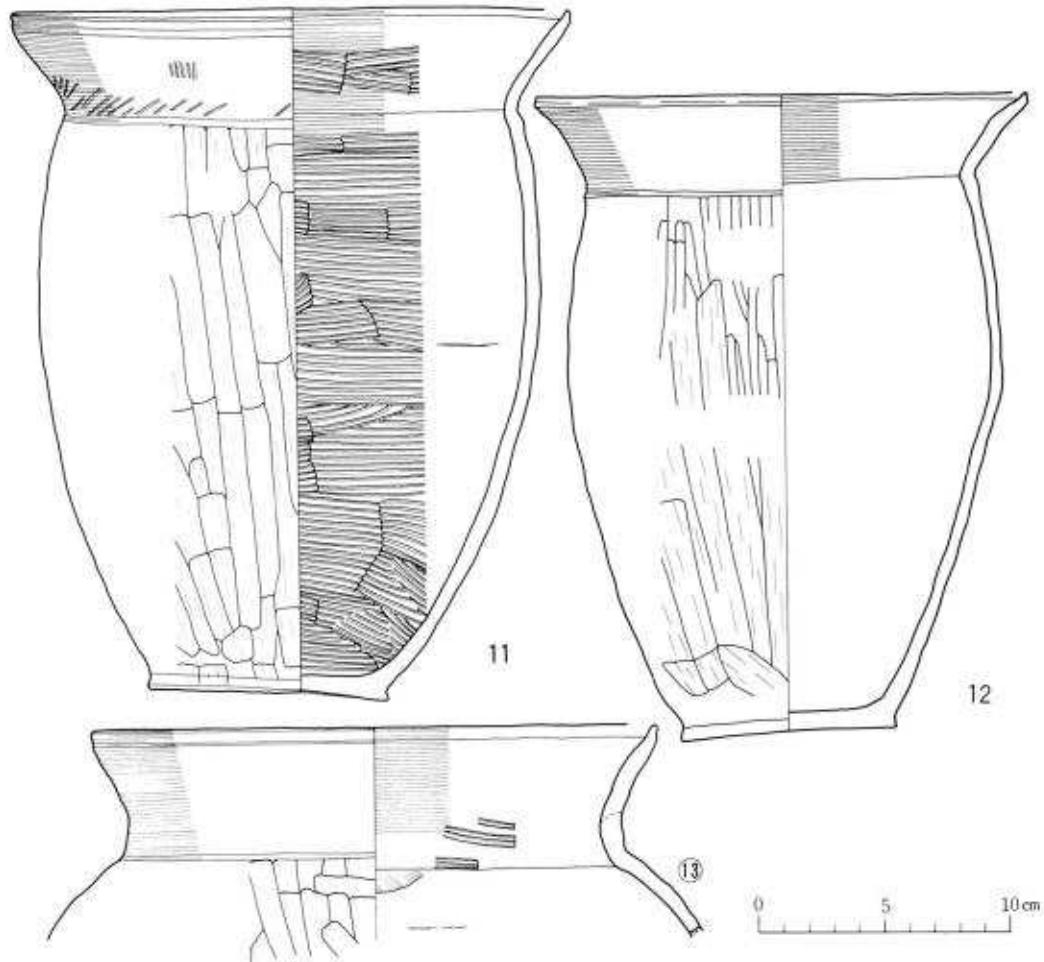
古銭（第90図） 図版-47-11和銅開
珍（銅錢）（初錢年代708年 次期720年）が4枚竪
穴住居内南西床面より出土している。うち完形品及
び完全なるものは各1枚で他は破片である。完形品
は径2.5cm重さ2.2gである。



第90図 古銭拓影図



第88図 CE68竪穴住居跡出土遺物(1)



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調査		底面	高さ	口径	体径	式様	立替番号
			外底	内底						
1.	ビット内	土師器(焼)	ヨコナギ	ヘラニガキ(内側)	ヘラケヌリ	4.3	14.4		A,b	
2.	床・面	土師器(焼)	ヘラニガキ	ヘラニガキ(内側)	ヘラケヌリ	4.3	14.1		A,b	
3.	床・面	須恵器(焼)	ヨコロ模	ヨコロ模	圓輪形切り				(5.2)	C,1
4.	床・面	須恵器(焼)	ヨコロ模	ヨコロ模	圓輪形切り				(5.8)	C,1
5.	ビット内	土師器(高杯)	ペリ土ガキ・ヘラケヌリ	ペリ土ガキ(内側)		4.2	9.2		C,1	
6.	埴植土	土師器(壺)	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・セド		16.20	15.80		A,41	
7.	床・面	土師器(壺)	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヘラケヌリ	15.3	16.1		B,B	
8.	床・面	土師器(壺)	ハナメ後ろヨコナギ ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ		19.8	18.4		A,43	
9.	床・面	土師器(壺)	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ		25.5	17.2		A,42	
10.	床・面	土師器(壺)	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ	木葉紋	28.6	20.1		A,43	
11.	床・面	土師器(壺)	ハナメ後ヨコナギ ヘラケヌリ	ハナメ後ヨコナギ・ヘラケヌリ	木葉紋	27.2	22.4		A,42	
12.	床・面	土師器(壺)	ヨコナギ ヨコナギに混入ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ(崩滅)	木葉紋	25.3	19.6		A,42	
13.	埴植土	土師器(壺)	ヨコナギ・ヘラケヌリ	ヨコナギ・ヘラケヌリ		18.3	22.5		A,43	

第89図 CE68竪穴住居跡出土遺物(2)

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、土師器、須恵器、赤焼の土器の破片が出土している。実測したものは甕の口縁部上半のもの2点である。

中甕（第88図6） 口縁部が外傾し肩部に段の巡るものである。口縁部の形態からみると(7)の甕と類似しており、或はそれと同様のものと考えられる。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ケズリ、内面はナデである。

大甕（第89図13） 口縁部が長く「くの字」に外反し、口唇部分が上方につまみ出され内側に稜をもつ球胴形の甕と思われるもの、上半である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は一部にハケメ、ナデ痕がみられる。

その他、环の破片は内外面ミガキ黒色処理された口縁部の破片、甕は、外反する口縁部及び長脚とみられるもの、破片でハケメ、ケズリのものが主である。須恵器は、环の口縁部、赤焼き土器は环の小破片である。

⑪C F 24豊穴住居跡（第91図）

〔遺構の確認〕 C調査区の西端近くC H 30豊穴状遺構の北東約5.4m、C G 12豊穴状遺構の北西約6.4mの地点の地山面で検出されたものである。

〔重複〕 C F 24ピットが北西床面下に存在し、北側の溝状の張り出し部分の先端にC F 21ピットがある。又、南東隅はC G 21ピットと接している。

〔平面形・規模〕 平面形は、北壁中央に溝状の張り出し部分が存在するかそれを除けばほぼ方形である。規模は、長軸（南北）約3.2m、短軸（東西）約3.1mであり、床面積は約9.6m²である。なお南北壁の中点を結ぶ軸線はN-4°-Wである。

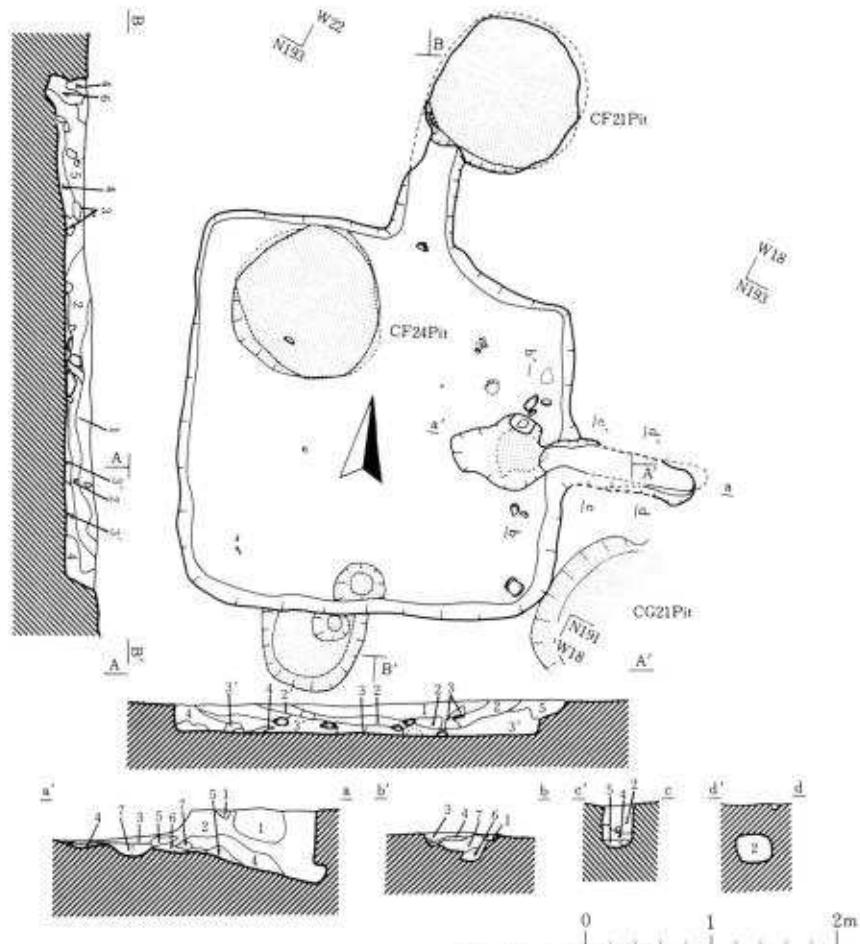
〔壁〕 地山をそのまま、壁としているもので、垂直に近い立ち上りを呈している。北壁中央には、北に走る幅約55cm、長さ75cmの溝が外方のC F 21ピットに続いているため切れている。

〔床〕 地山を床面とし平坦で固い。床面ほぼ中央には径約90×90cmの範囲に入頭大の川原石が存在した。特に、埋設されているものではない。

〔堆積土〕 細かく分けると8層に分けられるがIV層に大別できる。I層は、黒褐色の腐植土で、住居のほぼ中央にレンズ状に堆積し、床面には達していない。II層も、やはり黒褐色の腐植土で、I層より壁に近いところより中央に向ってレンズ状に堆積し床面には達していない。III層は、黒色のシルトで主に床面に薄く堆積している。IV層は、黒褐色のシルトで壁際より中央に向って床面に堆積している。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁中央に付設されている。燃焼部と長さ約120cmの煙道部より成る。両側壁は既になく、皿状に落ちこみ熱で固くなった底面と焼土の堆積が認められたのみである。煙道は東壁がトンネル状に住居の床面と同じレベルで少し壁外にのび、その後、緩い傾斜をもって煙



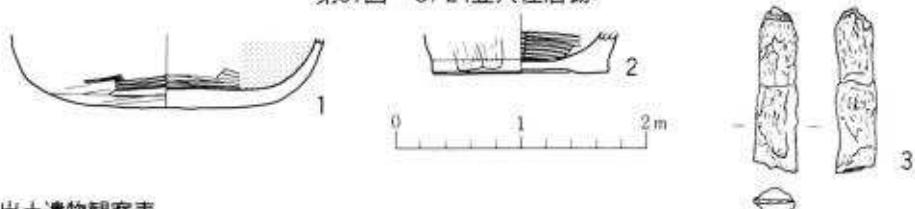
堆積土

大別	層	土色	土性	備考
I	1	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	炭化物、礫文土器片、木根を含む
II	2	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	炭化物、礫文土器片、機土を若干含む
	2'	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	炭化物を含む
III	3	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物、機土を若干含む
	3'	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物、地山の上がブロックである
IV	4	10YR 2/2 黒色	シルト	
	5	10YR 2/1 黒色	シルト	
	6	10YR 2/2 黒褐色	シルト	

堆積土(カマド・煙道部)

層	土色	土性	備考
1	10YR 3/4 にじ黒褐色	シルト	
2	2.5YR 2/1 黒色	腐植土	
3	10YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物若干含む
4	10YR 3/3 喧褐色	シルト	炭化物若干含む
5	10YR 2/2 黒褐色	シルト	
6	10YR 4/4 橙色	シルト	比4の多く炭化物を含む
7	3 YR 3/6 暗赤褐色	シルト	機土

第91図 CF24豎穴住居跡



出土遺物観察表

番号	出土部位	種類	調査		底面	高さ	II径	体径	底径	分類番号
			外表面	内面						
1	床面	土師器(环)	ハケメ後ヘラミガキ	ヘラミガキ(内側)	ヘラケズリ	(2.8)				A, b
2	床面	土師器(甕)	ヘラケズリ	ヘラス	ヘラケズリ	(1.8)				7.0
3	床面	鉄製品	(好下)5.5×1.6×0.2(cm)							

第92図 CF24豎穴住居跡出土遺物

出部へ下り煙出部分が一番深くなっている。煙出部奥壁に抉れが認められるが特にピットは存在しないほぼ垂直に地上へ出る。

〔その他の施設〕 床面南壁際にはP₁が存在するが皿状の浅いものである。その他貯蔵穴状ピット、周溝等は存在しない。なお、既述した北壁中央より外方に延びる溝は、緩い傾斜でC F21ピットへと落ちこんでおり、排水のための施設として使用されたことも考えられる。

〔年代決定資料〕 住居の使用及び構築の年代等を決定する資料としては、床面出土の土師器や鉄製品の一部があるが、完形品等もなく、いずれも破片のみで、しかも個体数が非常に少ない。土師器環1点、小型甕の底部1点、鉄製品1点が実測できたすべてである。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

环（第92図1） 口縁部が欠失しているが底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段丸底と思われるものである。調整技法は、外面は、ハケメ後ヘラミガキ、内面は、ヘラミガキ、黒色処理されている。

小甕（第92図2） 底部のみのものであるが残存破片や底径から小型甕の底部とみられるものである。外面は、ヘラケズリ、内面は、ハケメであり、底面はヘラケズリされている。

鉄製品（第92図3） 刀子の一部と思われるもので長さ5.5cm、幅1.6cm、厚さ0.2cmの鉄片である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、土師器（环、甕）、縄文土器の破片が出土しているが実測できるものはない。环は、内黒の破片で内外ミガキ、無段丸底のものと思われるものである。甕、縄文土器片は摩滅の著しいものである。

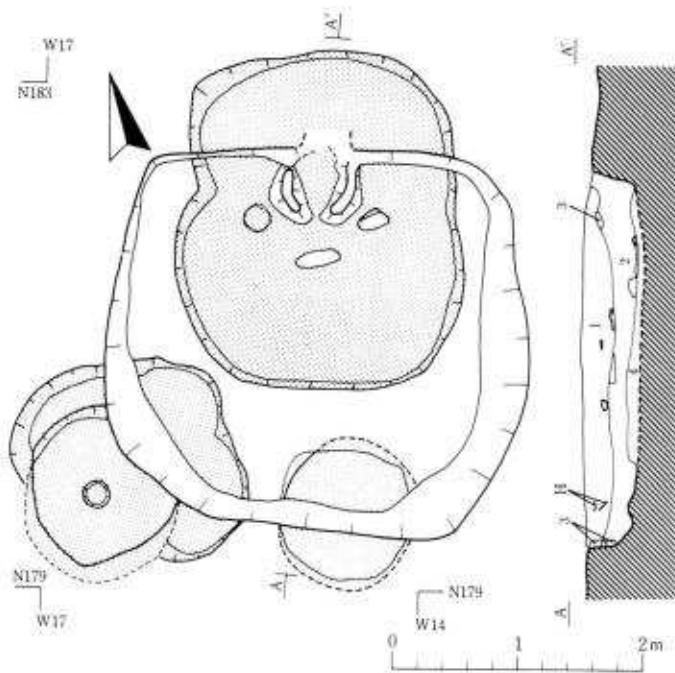
⑫C J 18竪穴住居跡（第93図）

〔遺構の確認〕 C調査区の南西附近D A 24竪穴住居跡の北東約3mの地山面で検出したものであるが煙道部分は縄文時代とみられるピットを既に精査していたために確認できなかったものである。

〔重複〕 この住居跡はC J 18ピット、C J 18複合ピット、C J 15ピットと多数の縄文時代に属するとみられるピット群上に構築されているので、北壁、南壁は、それぞれのピットをわずかに切っている。

〔堆積土〕 2層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で、壁際を除き中央附近を中心にして皿状に堆積し床面には達していない。2層は、やはり黒褐色腐植土で壁際より中央にかけて住居全域に堆積し床面にも達している。その下に貼床した層3層が認められる。

〔平面形・規模〕 平面形は隅の丸味が強く中央部分もや・胴張りの隅丸方形である。規模は長軸（東西）約3.4m、短軸（南北）約3.0mであり床面積は10.1m²である。南北壁を結ぶ中軸線はN-10°-Eである。



堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	腐殖土	上部器片を含む
2	10YR 2/2 黒褐色	腐殖土	焼土、炭化物を含む
3	10YR 2/6 明黄褐色	シルト	粘土部分

第93図 CJ18竪穴住居跡

〔カマド〕 北壁中央に付設されていたものである。両側壁はシルトで構築され、左側壁には芯材として土師器の甕が伏せた形で使用されていた。燃焼部は、焚口部分が狭く、中央部分が広いきんちゃく状を呈している。煙道部は、北壁をくりぬいて住居外へ延びていることは確認されたが、大部分は、既述の如く確認できなかったものである。カマドの軸線に対する方向はN-20°-Eである。

〔その他の施設〕 認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、煙道部より出土の土師器がある。

土師器 製作に際しいずれもロクロ未使用のものである。

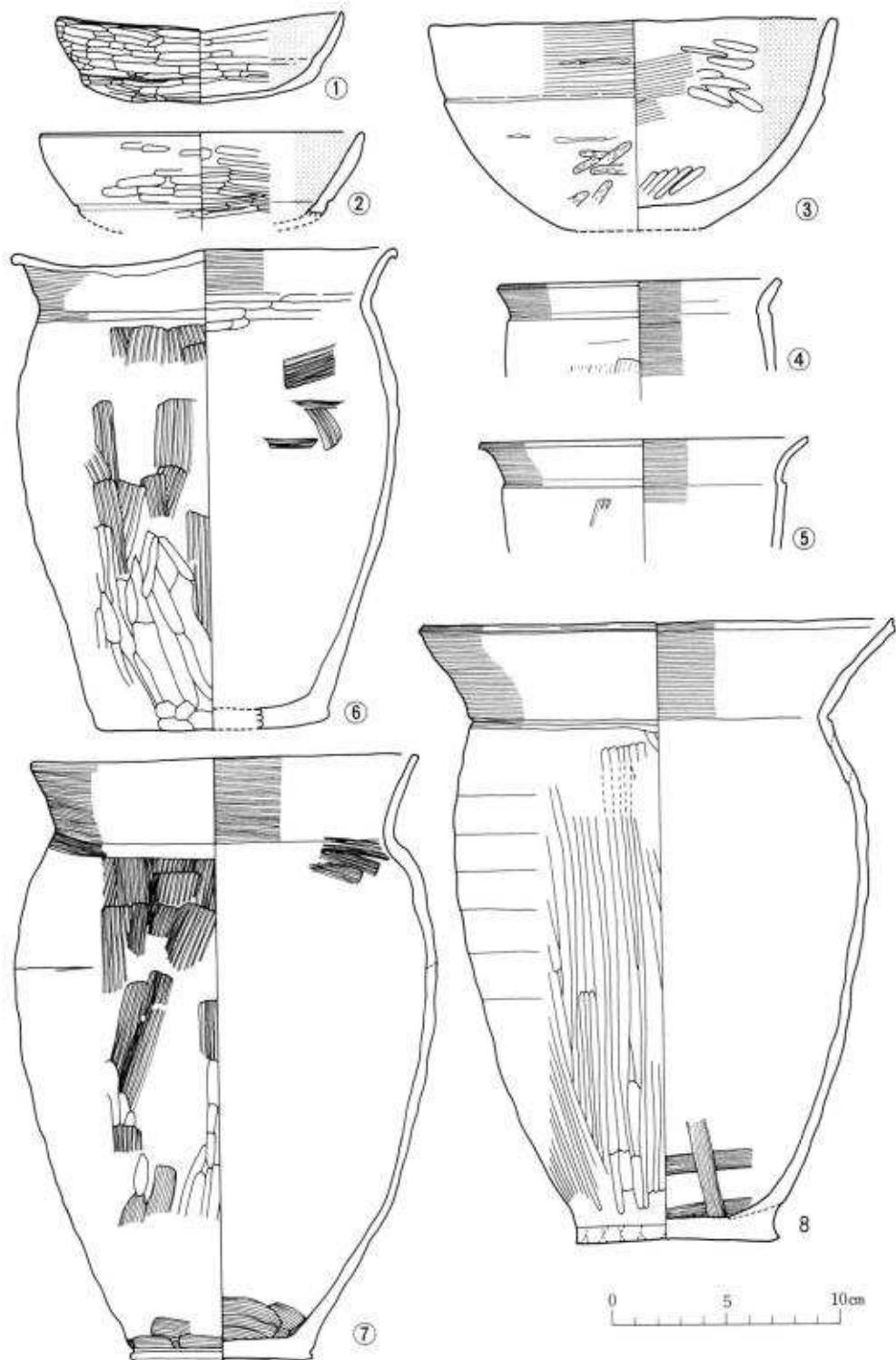
大甕（第94図8・9） (8)は口縁部が外反し、口唇部がわずかに上方に引き出され内側に稜を有するもので、体部最大径が肩部近くにある長胴である。(9)は、長胴の下半部である。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は(8)はヘラケズリ、(9)はハケメ後ヘラケズリ、内面は、(8)はナデ、(9)はハケメである。

小甕（第95図14） 口径が器高より大きくしかも口径に比べて底径の大きいもので底部より

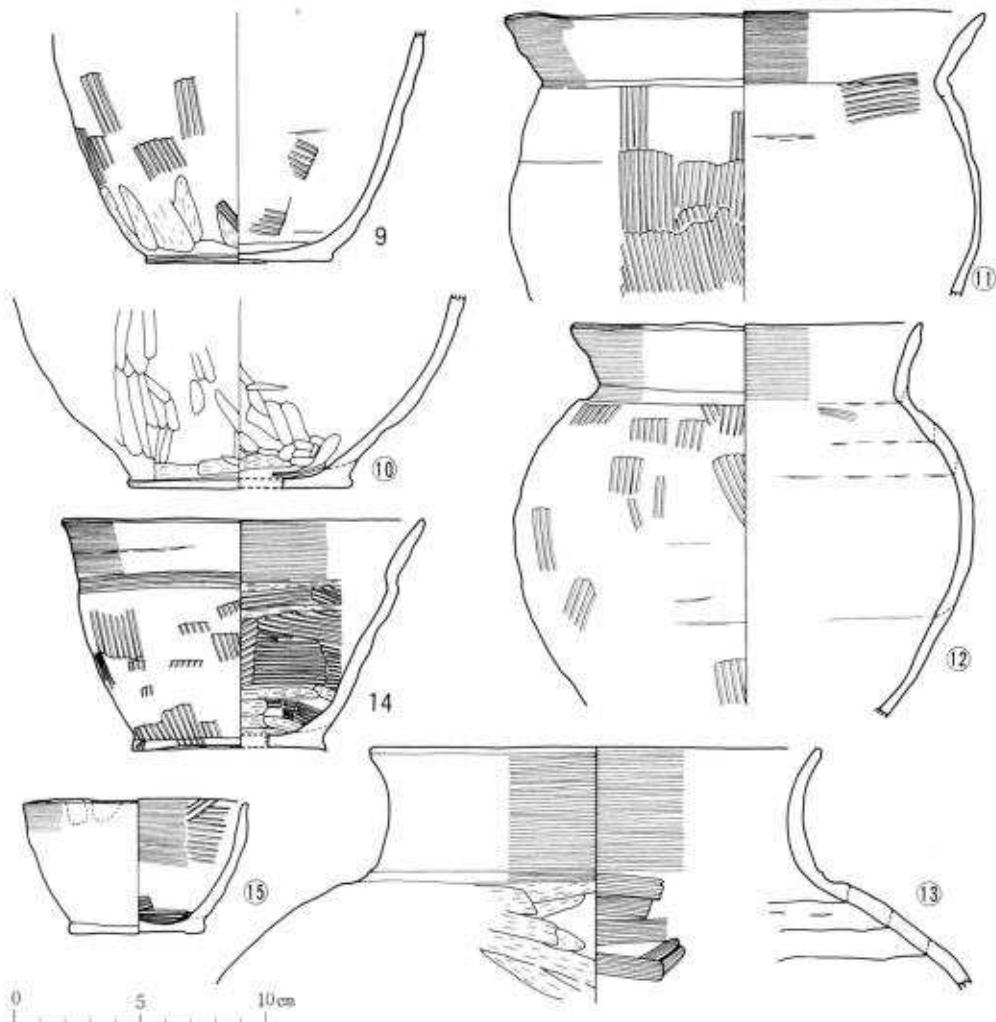
〔壁〕 地山面をそのまま壁としているもので立ち上がりは比較的鋭いものであり、壁面も保存状況が良好である。最も良好な北壁で約40cmを計る。

〔床〕 床面は地山の上にシルトを貼った貼床である。一面に焼土の散布が認められ、特に、北西隅には焼土が厚く堆積しており、その中より多くの土師器片が出土している。

〔柱穴〕 床面より柱穴とみられるピットは確認されなかった。



第94図 CJ18竪穴住居跡出土遺物(1)



出土遺物観察表

番号	出土場所	種別	調 整		底面	底高	口径	壁厚	高さ	分類番号
			外面	内面						
1	堆積土	土師器(口)	ヨコナギ・縫いヘラガキ	ヘラガキ(内側)	ヘラガキ	3.2	12.6			A, 1
2	堆積土	土師器(口)	ヘラガキ	ヘラガキ(内側)		(3.8)	(14.4)			A, 1
3	堆積土	土師器(口)	ヨコナギ・縫いヘラガキ	ナギ・ヘラガキ(内側)		(3.0)	(18.0)			A, 2
4	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・ヘラガキ	ヨコナギ		21.0	17.0		(10.2)	A, b1
5	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・磨滅	ヨコナギ・磨滅		(4.0)	(12.4)			A, b2
6	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ	ヨコナギ・ヘラガキ		(4.8)	(14.6)			A, II b1
7	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギハタメ	ヨコナギ・ハタメ・ナギ		26.5	17.1			A, II b1
8	埋道跡	土師器(縁)	ヨコナギ・縫いヘラガキ	ヨコナギ・ナギ	木葉痕	27.0	21.0			A, I a3
9	カマド内	土師器(縁)	ヘラガキ・ヘラガズリ	ヘラガキ		(8.2)			7.5	A, 1
10	堆積土	土師器(縁)	ヘラガキ	ヘラガキ		(7.6)			(4.0)	A, 1
11	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・ハタメ	ヨコナギ・ハタメ(部分)		(10.5)	19.2			A, II b3
12	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・ハタメ	ヨコナギ・ナギ(?)		(15.2)	14.0			A, II b3
13	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・ナズリ	ヨコナギ・ナギ		(9.5)	(18.0)			A, II a1
14	カマド内	土師器(縁)	ヨコナギ・ハタメ	ヨコナギ・ハタメ・縫いヘラガキ	ヘラガキ	9.0	14.5		7.8	A, I b1
15	堆積土	土師器(縁)	ヨコナギ・ナギ	ヨコナギ・ナギ		9.3	9.0		5.5	

第95図 CJ18竪穴住居跡出土遺物(2)

外傾気味に開く小型の甕である。調整技法は、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ、一部ケズリである。器形的には鉢としてもいいものかもしれない。

〔堆積土出土遺物〕 堆積土中より壺をはじめとして多数の土師器が出土している。実測したものは、壺2点、甕7点、鉢1点である。

土師器 製作に際し、いずれもロクロ未使用のものである。

壺（第94図1～3） いずれも体部外面に段を有するものであるが、(1)は、対応する内面にもくびれが認められ、段から上はや、内湾気味に立ち上る丸底である。(2)は、底部は不明であるが外傾気味に立ち上るもの、(3)は、段より上は直立気味に立ち上る器高の高い平底風の底部を有するものと推定される。調整技法は、(1・2)は外面をみると段より上はヘラミガキされ、(1)の底部は部分的にヘラケズリが認められる。(3)は、段より上はヨコナデ、一部ミガキ、下はヘラケズリである。内面は、いずれもがヘラミガキされ黒色処理されている。

大甕（第94・95図6～7・10～13） (6・7)は、口縁部が単純に長く「くの字」状に外反し体部最大径が肩部近くにある長胴である。(10～13)は、口縁部が「くの字」状に外反し、最大径が中央附近に位置すると思われる球胴である。(12・13)は、肩部に段を有する。調整技法は、いずれも口縁部内外面はヨコナデであるのに対し、体部外面は、ハケメ一部ケズリ、ハケメだけのもの、ヘラケズリされたものと多様である。内面は、ナデが大部分で一部ハケメのものもある。

中甕（第94図4・5） 肩部に段を有し口縁部が短く外反する(4)、長く「くの字」状に外反する(5)口縁部の破片で、口径より中型甕と推定されるものである。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、外面は磨滅しているが、一部にハケメ、ヘラケズリ痕が認められる。

鉢（第95図15） 底部より口縁部にかけて内湾気味に立ち上る小鉢状のものである。底部は中央部がや、くぼみわずかに上底状を呈している。調整技法は、外面は、ヨコナデ、ナデ、内面は、ヨコナデ、が主で一部ハケメが施されている。

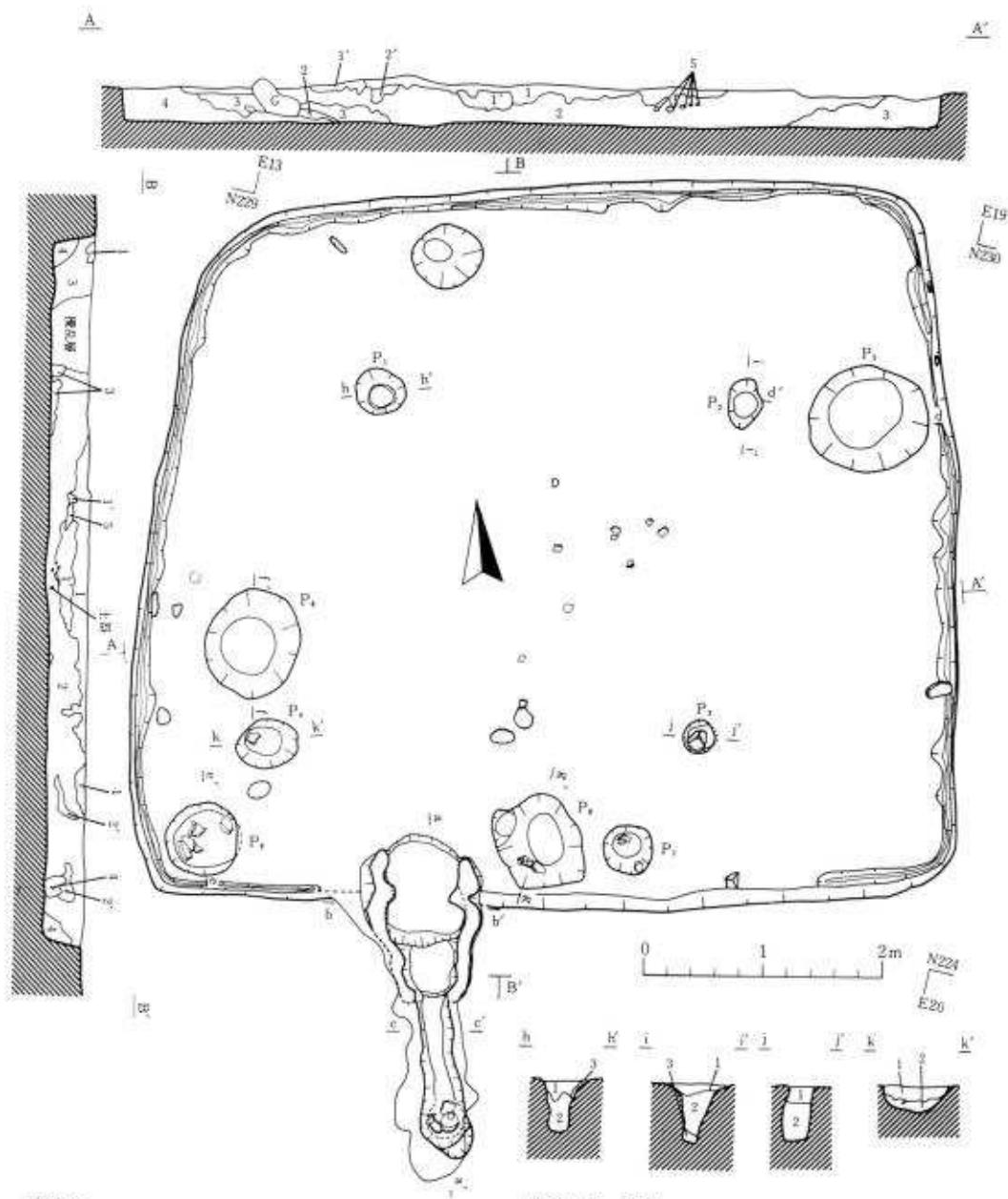
⑬B D 62竪穴住居跡（第96図-1・2）

〔遺構の確認〕 B調査区の北西側、B G 59竪穴住居跡の北1mの地山面で検出したもので、発見された住居跡としては最も北に位置するものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 調がや、丸味をおびた方形で、南壁に比べて北壁がや、短く、そのため、少しゆがみのある方形である。規模は、長軸（東西）約6.8m 短軸（南北）約6.0mであり、床面積は約3.7m²である。南、北壁の中点を結ぶ軸線はN-5°-Eである。

〔堆積土〕 細かく観察すると7層に分けられるが、IV層に大別できる。I層は黒褐色の腐植土が主で、主として、住居内の中央附近に堆積し、床面には達していない。II層は、暗褐色の



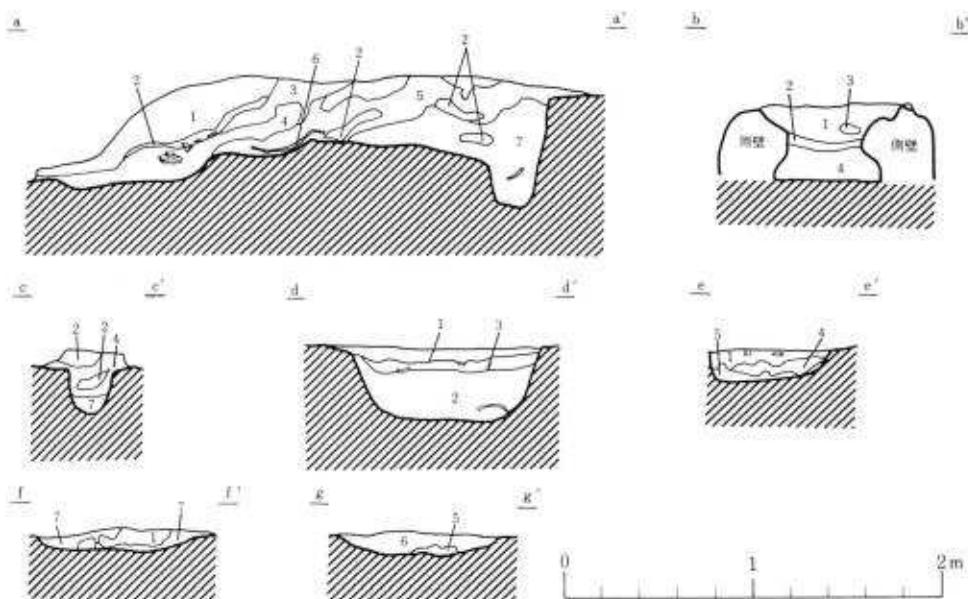
堆積土

大別	層	土色	土性	備考
I	1	7.5YR 2/1 黒褐色	粘土土	
	1'	10YR 4/4 暗褐色	壤土土	燒土を微量含む
II	2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	燒土、炭化物を若干含む
	2'	7.5YR 4/4 暗褐色	シルト	2層より燒土、炭化物が多い
III	3	2.5YR 3/3 ブラック 褐色	シルト	
	4	2.5YR 4/4 オリーブ 褐色	シルト	燒土を多量に含む
IV	5	2.5YR 6/4 橙紅 黄色	PEIM	鉢下表山灰

堆積土(P₁~P₄)

層	土色	土性	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物若干
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土の土が多く混じる
3	10YR 4/4 褐色	シルト	

第96-1図 BD62竪穴住居跡



第96-2図 BD62竪穴住居跡

シルトで、壁際を除き、ほぼ床面全域に堆積している。Ⅲ層は、焼土を多量に含む褐色のシルトで壁際に堆積している。Ⅳ層は、所々にブロック状に含まれている粉状バミス（火山灰）である。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているもので、残存状態も良好であり、いずれも30cm以上の壁高を示し、床面よりの立ち上りも、ほぼ垂直に近いものである。

〔床〕 床面は、ほぼ平坦で固くしまり貼り床はみられない。

〔柱穴〕 床面上より9個のビットが検出されている。そのうちP₁～P₄のビットについてみると位置的には、壁より等間隔に対角線上に位置するものではなく、南壁に平行するP₅～P₇は、やや西に寄り、北壁に平行するP₁～P₄は逆にわずかに東寄りと、それぞれ菱形の頂点に位置するような配列をなしている。床面からの深さは、P₄は約20cmと浅く多少無理とも思われるが、他は50cm前後であり、径は、約30～50cmで、柱痕は認められないが、配置からみてそれに該当するものと思われる。

〔カマド〕 南壁中央よりやや西寄りに付設されており燃焼部と煙道部よりなるものである。燃焼部は、壁を掘り抜き舌状に壁外に出ており、従って、壁の一部をも側壁としているもので他に比べて長い側壁を構築している。側壁は、シルトのみで構築されており、特に芯材として土器、川原石等は使用していない。燃焼部の形態は、他のカマドのそれと異なり、カマド本体の燃焼部の後方に更に南に傾斜した掘り込みを入れてその上をシルトでおおって煙道としている。従って煙道へは、燃焼部より二段の段差をもって上っているもので、これは炎の溜めとして熱効率を考えたものと考えられる。

煙道の規模は、長さ150cm、幅45cmの溝状を呈している。煙出部には、径約25cm、深さ約20cmのピットが存在する。カマドの軸方向はN-180°-Eである。

〔その他の施設〕 $P_1 \sim P_{10}$ の6個のピットが床面より検出されている。 P_1 は、径約100cm深さ約40cmで、断面形は深鉢状を呈している。

堆積土は、3層よりなり、最下層より土師器の壊（第97図2）が出土している。このピットの堆積土は、ほとんど焼土よりなり、カマド内の不用物を廃棄し、その後、その上を意図的にシルトで覆ったものと考えられるものである。

P_1 もピットの上面に焼土が小高く残っていたものである。規模は、径が約70cm、深さ約20cmの深皿状を呈している。

堆積土は、3層よりなり、1層中および底面からロクロ使用の土師器の甕の破片が出土している。なお、2層中には炭化物と焼土が若干混入しているが P_1 ピットのように特に多くない。 P_1, P_2 のいずれのピットも底面には熱を受けた様子が認められない。

その他、 $P_1 \sim P_8, P_{10}$ のピットは、いずれも深さが10~20cm内外の断面形が深皿状のピットである。

堆積土は、ほとんど黒褐色のシルト一層で、炭化物がわずかに混じっている程度である。これらのピットは、いずれも、何か貯蔵していたという形跡が認められないものであるが P_8 ピットは、位置的にみた場合カマド脇にあり、貯蔵穴状ピットといわれるものに該当するものとも考えられる。

周溝は、南壁に付設されているカマドの東側、約3mの範囲には認められないが、その他の壁面下には、床面より約10cm内外掘り下げた幅10~20cmの周溝がめぐっている。

〔炭化材〕 床面に少量の炭化材が散乱していたが、これらの一部を年代測定の資料として日本アイソトープ協会に依頼した。その結果、後葉にある如く、 1140 ± 55 Y.B.P. (1110 ± 50 Y.B.P.) の資料を得た。これは、当住居の年代を推定する上で一つの資料として有効なものとなり得るだろう。

〔炭化米出土状況〕 カマドの煙出中より伏せた形で出土した小型の土師器甕（第98図21）の中より出土したもので、炭化米は、主として、底面より出土し、体部中半までは土がつまっていたものである。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用の年代を決定する資料としては、カマド内、煙道部煙出内、床面、ピット等より出土した土師器、須恵器等がある。

土師器

壺（第97図1～4） (1)は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾し器高の割に底径の大きいもの、(2)は、体部は丸味をもち口縁部にかけて直線的に外傾するもの(3)(4)は、体部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外傾し、(3)は、口縁部がわずかに外反するものである。いずれも器高の高いものである。調整技法は、(1)・(3)は底部周辺、底面は手持ちヘラケズリされているもの、(2)・(4)は一部回転ヘラケズリされている。内面はいずれもヘラミガキ黒色処理されている。製作に際しロクロ使用のものである。

中甕（第98図20・21・30） 20は口縁部が外反し、体部最大径が肩部にある無段の甕である。調整技法は、外面、口縁部はハケメ後ヨコナデ、内面ヨコナデ、体部内外面はハケメである。底面は、ヘラケズリされている。製作に際しロクロ未使用のものである。
21は、製作に際しロクロ使用のもので口縁部が短かく「くの字」に外反し、口縁部と、位の体部最大径がほぼ中央に位置あるものである。体部外面にタタキメ痕、下半はヘラケズリ、内面は、底部近くにヘラケズリが施されている。底面はヘラケズリされている。

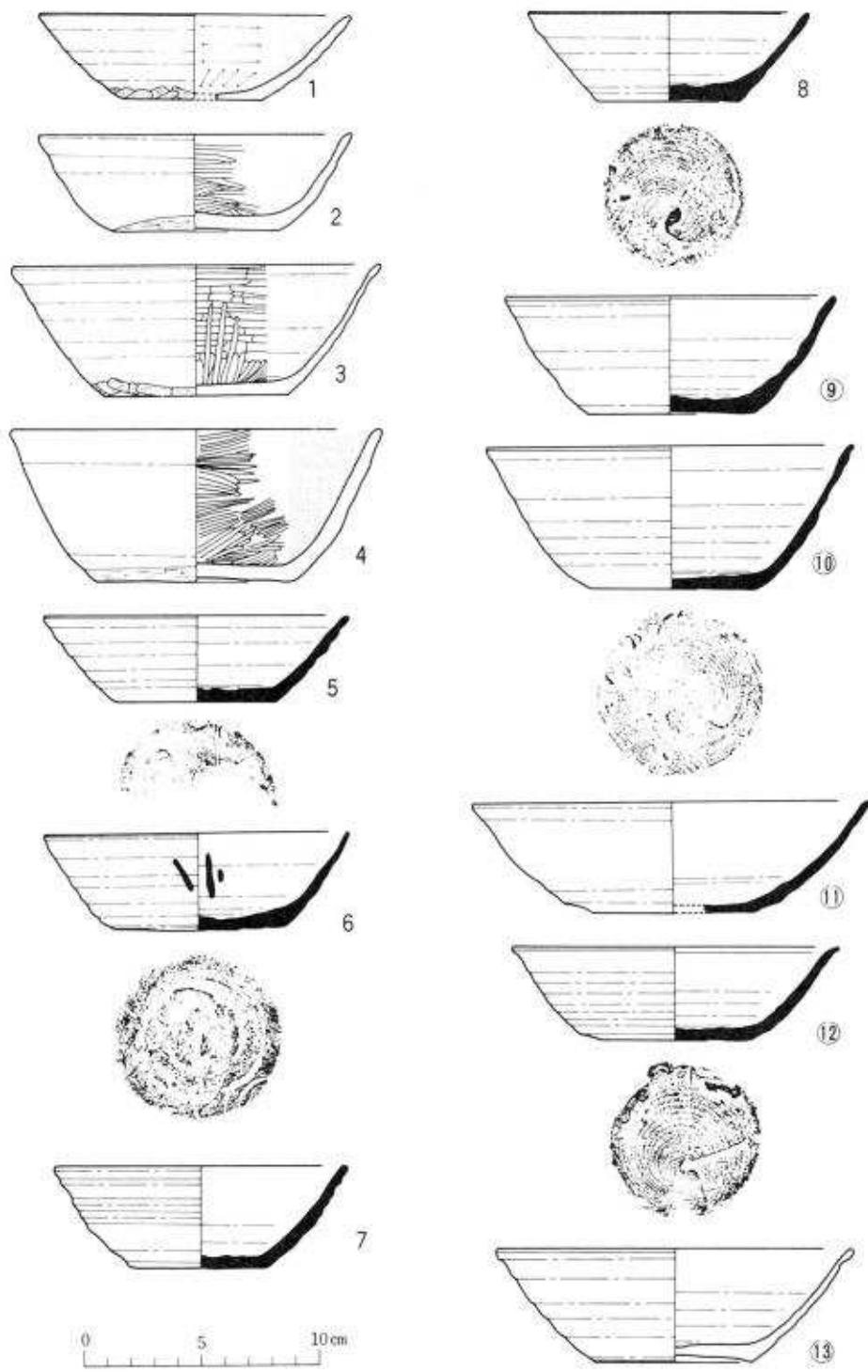
大甕（第98・99図22・26） 22口縁部が単純に「くの字」状に外反し下半がや・ふくれると推定されるもの、26は、「くの字」状に外傾するものである。調整技法は22は口縁部内外面、ロクロナデ、体部外面下半はヘラケズリ、内面はハケメ状ナデである。26は内外面ともにロクロナデのみである。

鉢（第99図32） 製作に際しロクロを使用し、口縁部が「くの字」状に外反し、口唇部がわずかに上方へ引き上げられているものである。

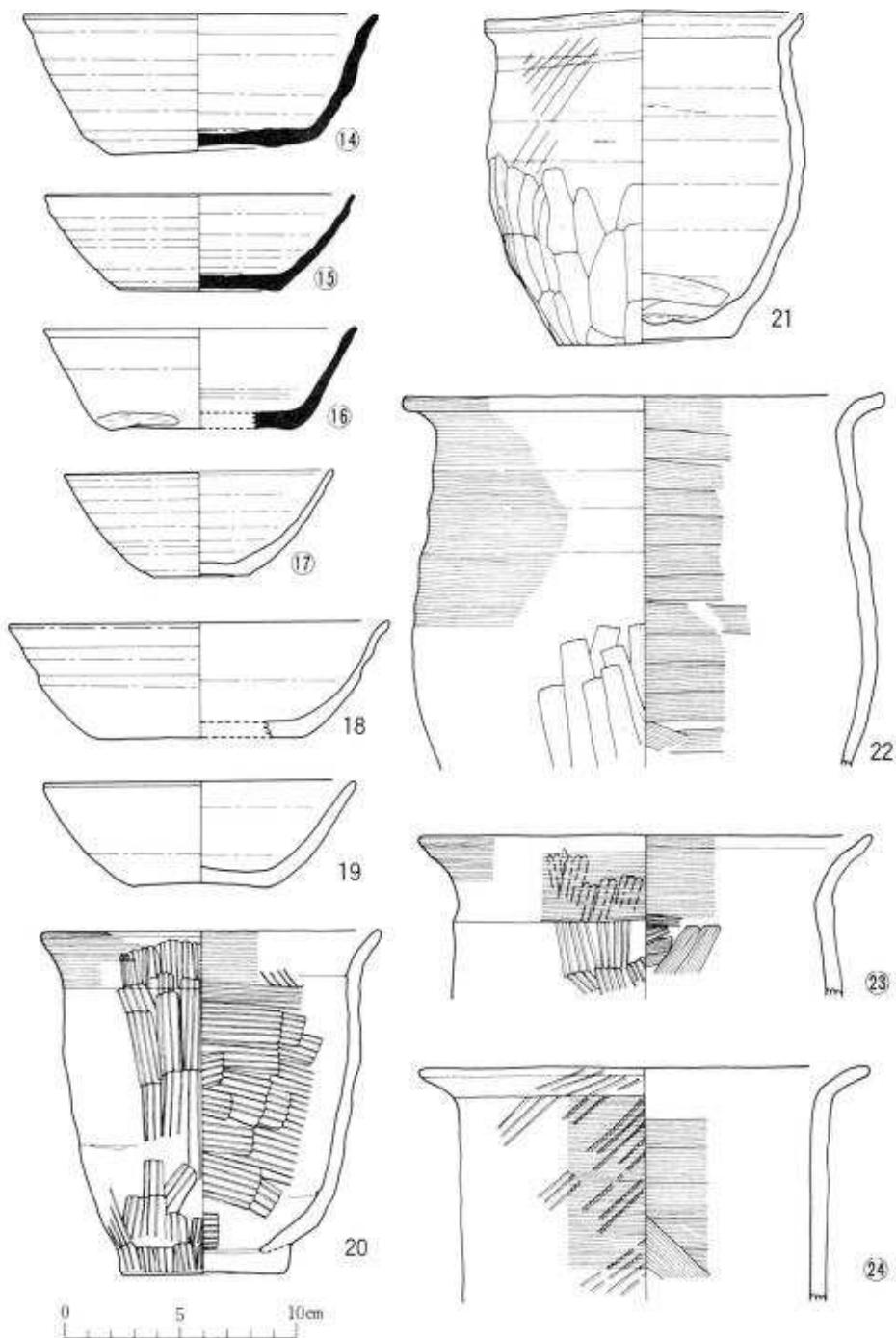
須恵器

壺（第97図5～8） (7)はや・内湾気味であるが他はいずれも体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもので器高に比べて底径の大きいものである。(6)は、体部に字体は不明であるが墨書き痕が認められる。底部の切り離しは、(5～7)は回転ヘラケズリ、(5)はその後手持ちヘラケズリ、(8)は、回転糸切り無調整である。

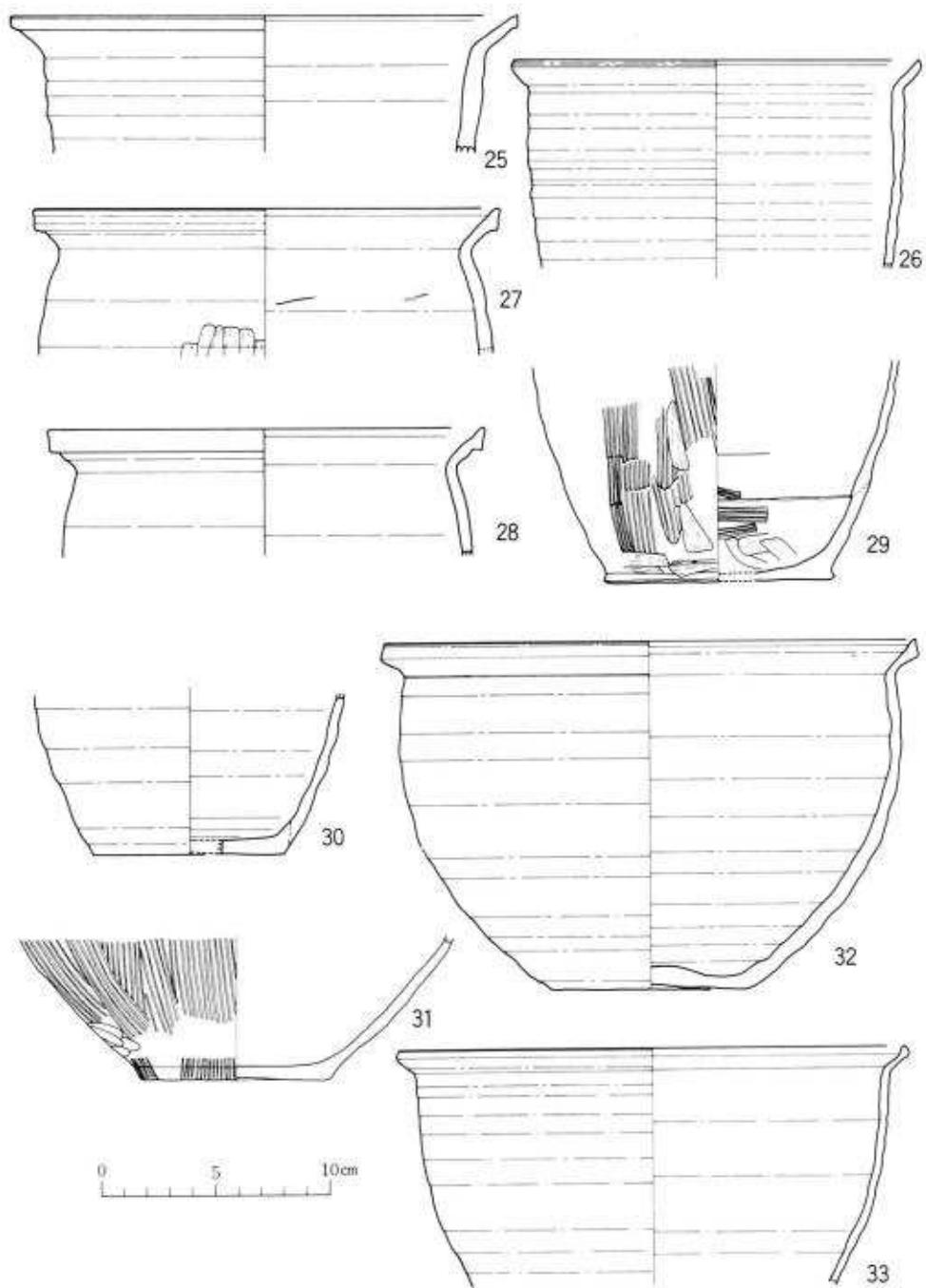
甕（第100図34） 口縁部がや・長く外反し、口唇部が上下に引き出されているもので、最大径が体部のほぼ中央に位置するものである。調整技法は、体部外面は、タタキメで下半部はその後ヘラケズリされている。内面は、底面近くがナデによって調整されている。



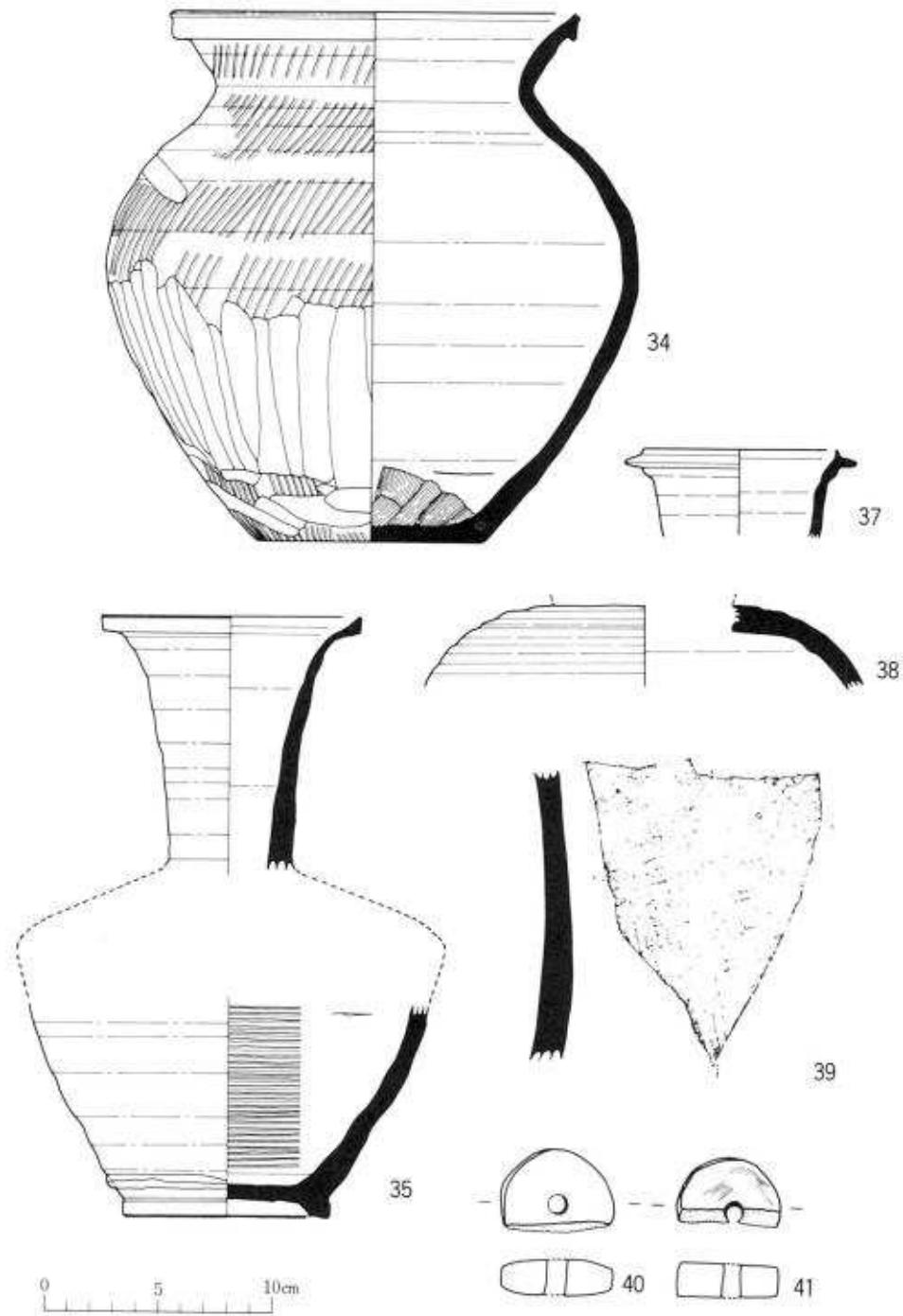
第97図 BD62竪穴住居跡出土遺物(1)



第98図 BD62竪穴住居跡出土遺物(2)



第99図 BD62竪穴住居跡出土遺物(3)



第100図 BD62竪穴住居跡出土遺物(4)

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調 整		底 面	基 高	口 径	体 構	底 径	分類番号
			外 面	内 面						
1	カマド内	土師器(环)	ロクロナギ・手持ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	手持ヘラケズリ	3.6	13.3		(5.9)	B, Ia
2	P ₁ ピット	土師器(环)	ロクロナギ・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	回転先端 部分ヘラケズリ	4.1	(13.2)		7.0	B, Ia
3	床 面	土師器(环)	ロクロナギ・手持ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	回転先端 部分ヘラケズリ	5.5	15.7		7.8	B, IIIa
4	P ₁ ピット	土師器(环)	ロクロナギ・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	回転ヘラケズリ	6.5	(15.8)		8.2	B, IIIa
5	カマド内	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	手持ヘラケズリ	3.6	12.9		6.8	C, Ia
6	床 面	須恵器(环)	ロクロ瓶(千)墨書き	ロクロ瓶	回転ヘラ切り	4.1	12.9		7.1	C, IIa
7	カマド内	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転ヘラ切り	4.3	(12.5)		(6.5)	C, Ia
8	床 直上	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	左回転糸切り	4.8	12.0		6.0	C, Ia
9	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	左回転糸切り	5.0	13.9		7.1	C, IIb
10	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	左回転糸切り	6.0	15.7		7.0	C, Ia
11	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	4.7	(16.2)		(6.7)	C, IIb
12	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	4.5	13.9		6.2	C, Ia
13	堆積土	赤焼(?)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	左回転糸切り	4.8	15.1		6.7	B,
14	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	5.9	15.3		8.4	C, IIc
15	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	4.1	13.4		7.0	C, IIa
16	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	3.3	(13.4)		8.2	C, Ia
17	堆積土	赤焼(?)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	4.5	11.7		4.0	B,
18	カマド・ピット	赤焼(?)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	不 明	5.0	(16.0)		(9.0)	B,
19	P ₁ ピット	赤焼(?)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	不 明	5.0	13.7		6.0	B,
20	煙出中	土師器(甕)	ヘラケズリ後ココナギ ハゲメ	ヨコナギ・ハゲメ	ヘラケズリ	14.9	14.6		7.2	A, IIIa
21	煙出中	土師器(甕)	タタキメ後ロクロ+ ヘラケズリ	ロクロナギ・ハラケズリ	ヘラケズリ	14.4	13.9		7.5	B, IIa
22	ピット中	土師器(甕)	ナギ・ヘラケズリ	ナギ		16.5	(20.8)			B, IId
23	堆積土	土師器(甕)	ハゲメ後ヨコナギ+ ハゲメ	ヨコナギ・ハゲメ後ナギ		(7.5)	(19.6)			B, IId
24	堆積土	土師器(甕)	タタキメ後ナギ	ナギ		(8.0)	(19.2)			B, IIId
25	堆積土	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(5.8)	(22.6)			B, IIId
26	カマド中	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(9.2)	17.4			B, IIId
27	堆積土	土師器(甕)	ロクロ瓶+ヘラケズリ	ロクロ瓶		(6.4)	20.3			I
28	堆積土	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(5.5)	(19.2)			
29	煙出中	土師器(甕)	ハゲメ	ハゲメ・ヘラケズリ	ヘラケズリ	(9.5)			(10.0)	
30	ピット中	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転糸切り	(7.0)			(8.4)	B,
31	堆積土	土師器(甕)	ハゲメ後ヘラミガキ	廢 瓶	ヘラケズリ	(6.2)			8.3	
32	ピット中	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ヘラケズリ	15.2	23.3		8.5	
33	堆積土	土師器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(10.4)	18.0			
34	ピット中	須恵器(甕)	タタキメ後ロクロナギ +ヘラケズリ	ロクロナギ・ナギ		(23.2)	18.0	23.3	9.8	C,
35	堆積土	須恵器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶						
36	堆積土	須恵器(甕)	ロクロ瓶	ロクロナギ						
37	堆積土	須恵器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(4.8)	(10.2)			
38	堆積土	須恵器(甕)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(4.8)	(8.0)			
39	堆積土	須恵器(甕)	タタキメ	拓 本						
40	堆積土	絆錠車(石)	径 4.9cm	厚さ 1.6cm				淡褐色颗粒状灰岩		
41	堆積土	柄錠車(石)	径 4.6cm	厚さ 1.5cm			*			

赤焼き土器

壺（第98図19） 体部がやや丸味をもち口縁にかけて外傾気味に立ち上るものである。調整技法は、回転糸切り無調整で内外ともに摩滅が著しい。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、土師器、須恵器とともに多量の破片が出土している。そのうち実測したものは、須恵器壺7点、長頸壺3点、赤焼き土器2点、土師器甕5点、鉢1点である。

須恵器

壺（第97・98図9～12・14～16） (9・10・15)は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもの、(11)は、内湾気味に外傾するもの、(12)は、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上り、口唇部分がわずかに外傾するもの、(14・16)は、体部がわずかに丸味をもち口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものである。(16)の底部附近にケズリがみられる他は、いずれも回転糸切り無調整である。

壺（第100図35～38） (35・36)は、口縁部が強く外反し、口唇部が上方に引き出されている。長頸壺の口縁から頸部であり外面に自然釉が認められる。(36)は、その体部の下半部と推定される高台付の体部である。内面にハケメ状ロクロナデが施されている。(37)は、口唇部が外方及び上方へ引き出されている長頸壺の口縁と推定されるもの、又、(38)は、その肩部部分と推定される破片である。

甕（第100図39） (39)は、外面にタタキメ文のみられる大甕の破片である。

土師器

大甕（第99図23～28・31） (33)は、口縁部が長く「くの字」状に外反するロクロ未使用のもので調整技法は口縁部外面はヨコナデ体部外面はハケメ、ナデである。

鉢（第99図33） 口縁部が短く「くの字」状に外反し、口唇部が斜め上方へ引き出され、内側に棱のあるものである。調整技法はロクロナデのみである。

赤焼き土器（第97・98図13・19） (13)は体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外傾するもの(19)は、内湾気味に外傾する底径の非常に小さいものである。

石製品

紡錘車（第100図40・41） 石材は淡緑色細粒凝灰岩で径が約4.9cm、4.6cm、厚さ1.6cm、1.5cmの表面が研磨されたもので、いずれも約1/2が欠失している。

その他、他の住居跡に比べて非常に多量の土師器片・須恵器片が出土しているのが特色である。そのうち須恵器の破片は大甕の破片が多い。

⑭B H 56竪穴住居跡（第101図）

〔遺構の確認〕 B調査区の中央付近、B F 50竪穴住居跡の南東約4mの地点の地山面でB G 59竪穴住居跡と北東隅で切り合う形で検出したものである。

〔重複〕 北壁にあるカマドの東側がB G 59竪穴住居跡によって切られ、西壁中央部分は焼土状造構を切って構築している。又、東壁中央寄りから南壁中央寄りにかけての部分は縄文の切り合い遺構の上に構築されている。

〔平面形・規模〕 北壁の中央付近がや・北に張り出しているがほぼ方形といつてもよいのである。規模は、一辺が約5.2mである。床面積は約27m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-20°-Eである。

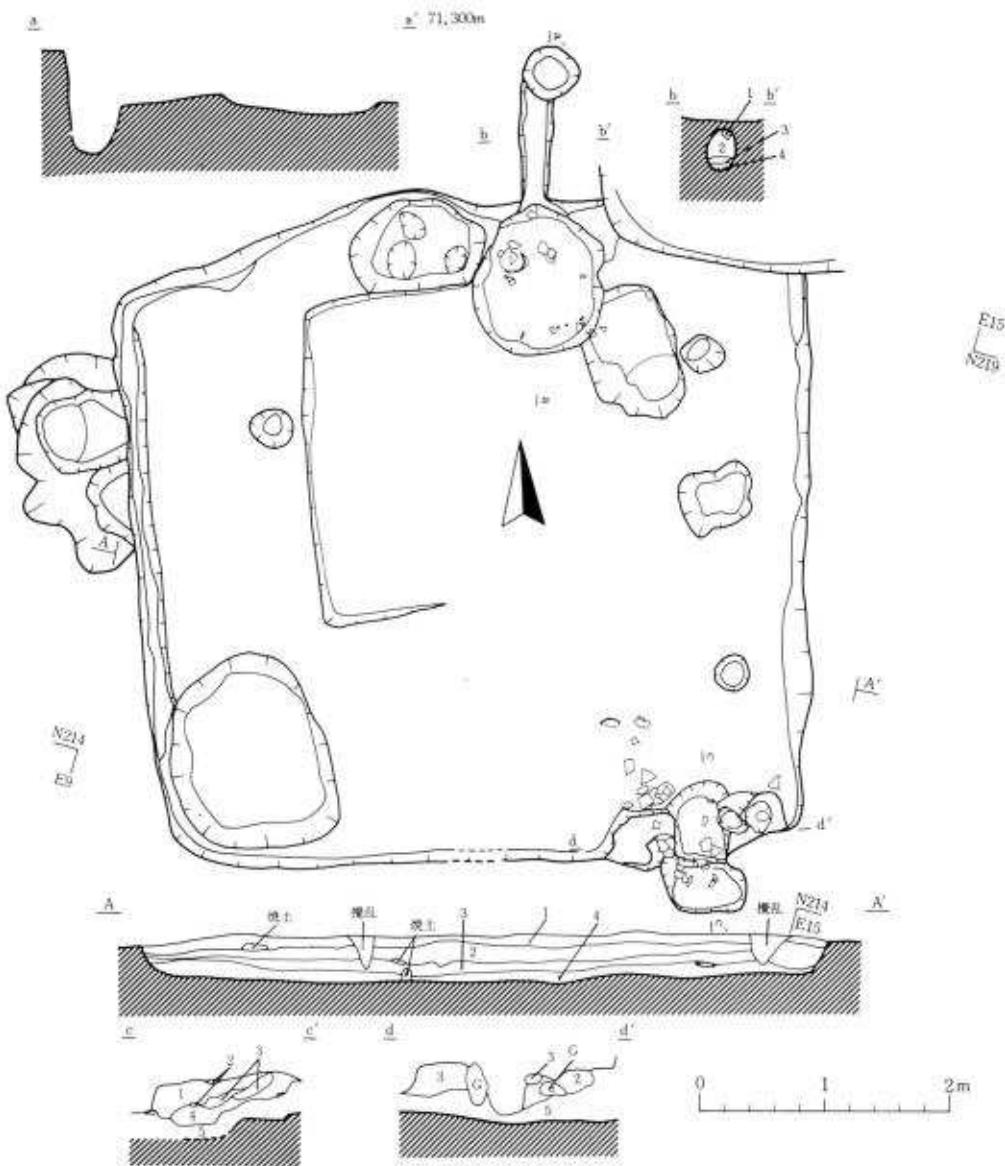
〔堆積土〕 細かくみると4層に分けることができるがⅡ層に大別することができる。Ⅰ層は黒色の粘土質砂土で主に床面を除く住居全体に堆積し、Ⅱ層は、黒褐色のわずかにシルトを含むもので床面に堆積しているものである。

〔壁〕 地山をそのまま・壁としているもので、北壁がや・北に張り出している以外あまり出入りもなく直線的で比較的良好な残存状態を呈し、立ち上りも垂直に近いものである。最も良好な東、西壁で約30cmを計る。

〔床〕 地山を掘りこみ床としているものであるが、3枚（3期）の貼床が認められた。いずれも床面は水平な重なりを呈し、特に掘り返した痕跡は認められない。新しい方から貼床1は東南隅のカマドに伴うものであり、それと同じ床面に共うP₁が存在する。貼床2は、北壁煙道に伴うものでそれに伴うP₂が存在する。又、最下部のものは一辺が約2.6cmの西壁の一部が確認できた。これは方形のプランとなるものと推定されるものである。これに伴うビットとしてはP₃が存在する。これらの状況から推測すると当住居跡は、当初、一辺が約2.6mの小さな住居が構築され、その後、拡張し検出時の規模のものとして使用し、カマドを移動させた後床を貼りかえて用いたということが推定される。

〔柱穴〕 柱穴とみられるビットは、最も新しい東南隅カマドに伴って存在したとみられるビットP₄～P₆で径が約30cm、深さは25～30cmの規模をもつ。これらは対角線上に位置するものであるが全体としてや・南東寄りである。これらからは、柱痕は認められなかったが位置、配置等からそれと考えてよいものであろう。

〔カマド〕 南壁東隅（新）および北壁中央や、東寄り（旧）の2ヶ所に付設されている。前者は、黒ボクの貼床の上に焼土とシルトそれに小石を混ぜて固められた側壁から成り、それぞれに立石1個づつが使用されている。このカマドは燃焼部は皿状に凹んでおり、奥壁際で立ち上り煙道部は約50cm舌状に張り出しているのみで煙出し部は認められない。一方、北壁の方は煙道部がや・下り勾配で、約1m住居外にトンネル状に延び煙出部には煙道底部より約40cm低いビット



堆積土

大別	層	土 色	土 性	備	考
I	1	10 YR 2/1 黒色	砂質土	炭化物、焼土若干含む	
	2	7.5 YR 2/1 黒色	砂質土	炭化物焼土を1層より多く含む	
	3	10 YR 2/2 黒褐色	砂質粘土	シルトを若干含む	
II	4	7.5 YR 2/2 黑褐色	砂質粘土	シルトを若干含み、固い	

堆積土(カマド[新]煙道部)

層	土 色	土 性	備	考
1	7.5 YR 3/2 黑褐色	砂質土	炭化物、焼土を若干含む	
2	10 YR 4/3 黑褐色	砂質土	シルト、焼土の混入	
3	10 YR 4/6 黑褐色	砂質土	小石が多い	
4	2.5 YR 4/6 黑褐色	燒 土		
5	7.5 YR 1.7/1 黑 色	腐植土		

第101図 BH56竪穴住居跡

トが存在する。両側壁は既になく貼床下より側壁の補強として用いられたとみられる川原石が煙道をはさんで左右に一对見つかっている。又、燃焼部とみられるところには径130cmの深皿状のピットが存在し土師器片が出土している。

〔その他の施設〕 既述の如くそれぞれ新～旧の貼床に伴うピットが1個づつ検出されている。 P_1 は径160×130cm深さ約30cmの深鉢状のピットである。 P_2 は、径110×80cm、深さ約30cmの深鉢状のピットである。 P_3 は、北東隅近くの最も深い位置で検出したもので径約120×80深さ約10cmの深皿状のピットである。堆積土は、 P_1 は黒土を主体にシルトが若干混じる。 P_2 は下部のシルト、上部は焼土とシルトの混土、 P_3 は焼土を主体としシルトと黒色土の混土である。これらは位置、形状等から貯蔵穴状ピットといわれるものに類似するものと思われる。その他、周溝は認められない。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内ピット中より出土した土師器、須恵器等がある。

土師器

壺（第102図1） 内面がペラミガキされ、黒色処理を施しているもので、底部の切り離しは回転糸切り無調整のものである。

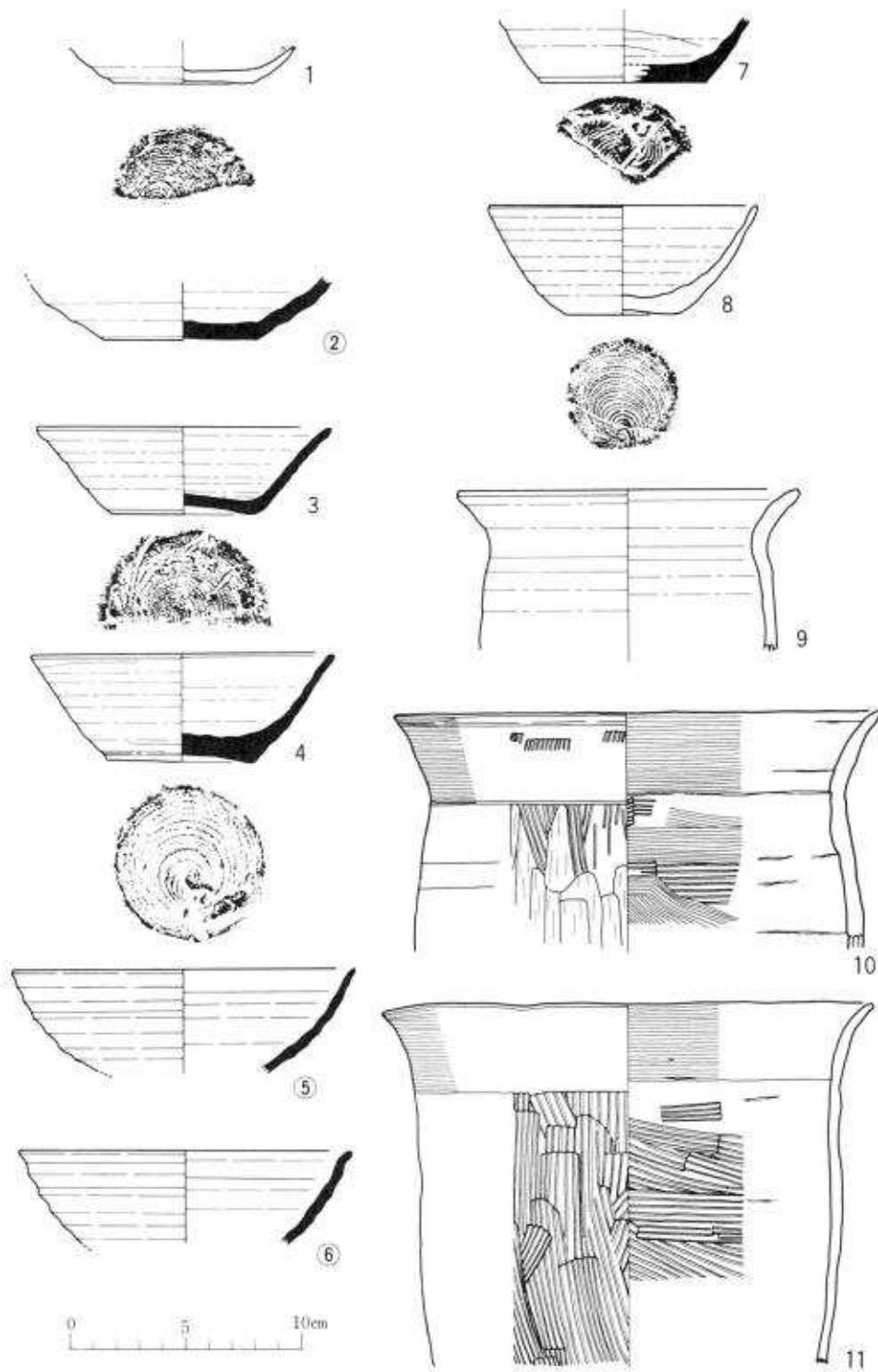
小甕（第102図9） 口縁部が単純に「くの字」状に外反するロクロ使用の小型甕と推定されるものである。

中・大甕（第102・103図10～13・17・18）（10～12）は、ロクロ未使用の甕で、口縁部が長く「くの字」状に外反し、肩部に段のないもので、12は、特に強く外反しているのが特色である。調整技法は、口縁部内外面はいずれもヨコナデ、体部外面は、10はハケメ後ヘラケズリ、11・12はハケメであり、内面は、いずれもハケメである。13は、ロクロ使用の甕で口縁部がやや短く「くの字」状に外反し口唇部が上方へつまみ出され内側に稜を有するものである。調整技法は、体部外面にタタキメがみられる。16は、口縁部が短く外反し、口唇部がやや長く上方へ引き出されているもの、17は、口縁部が欠失しているが、口径に比べて器高が比較的高いと推定される長胴であり、体部外面の上半にタタキメ、下半にヘラケズリのあるもの、18は、やはり口縁部が欠失しているもので肩部に軽い段が巡り、口径に比べて器高の底い甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面には、ヘラケズリ、タタキメ、内面にナデの施されているものである。

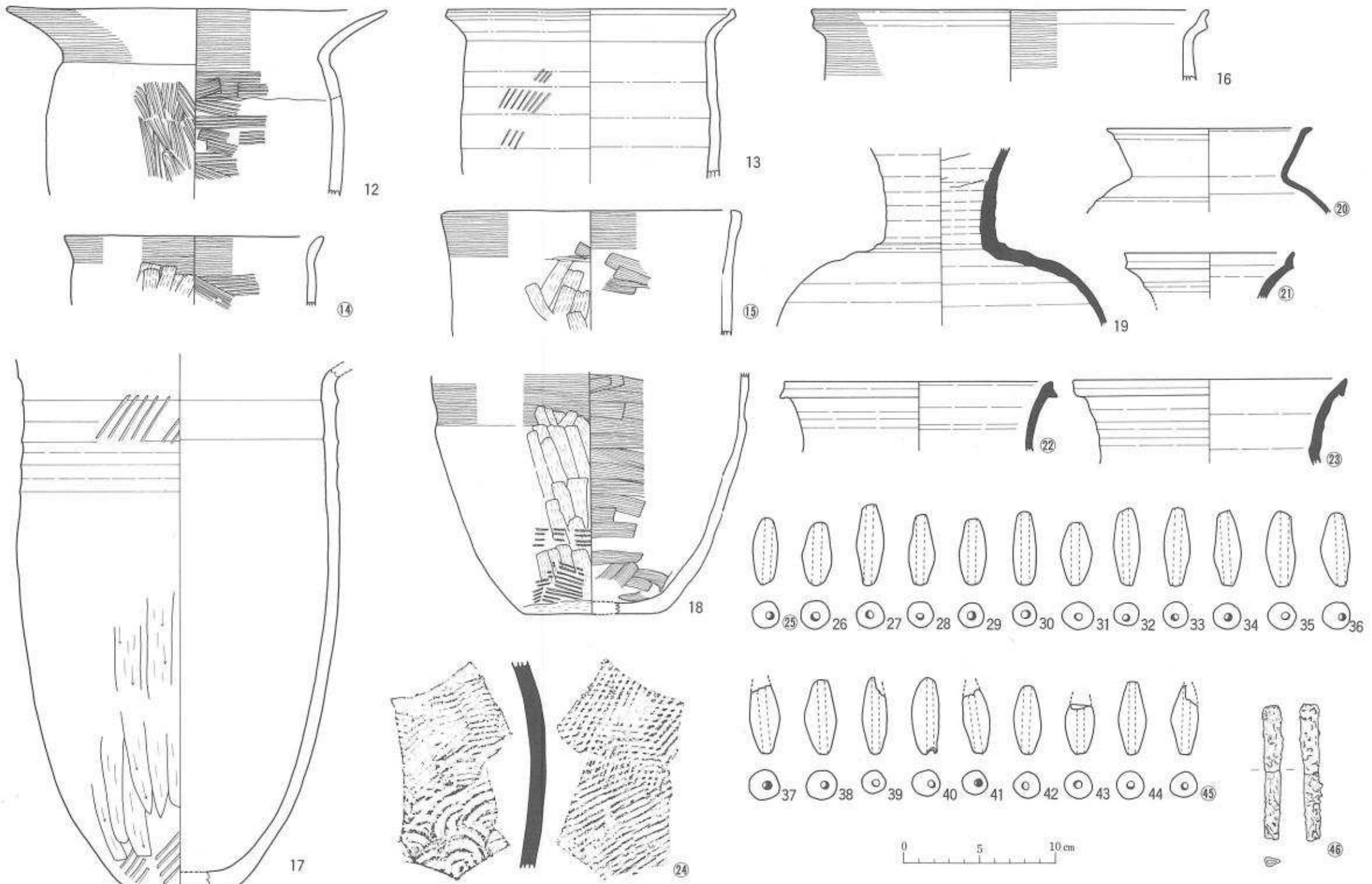
赤焼き土器（第102図8） 体部から口縁にかけて内湾氣味に立ち上るもので、器高に比べて底径の小さいものである。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。

須恵器

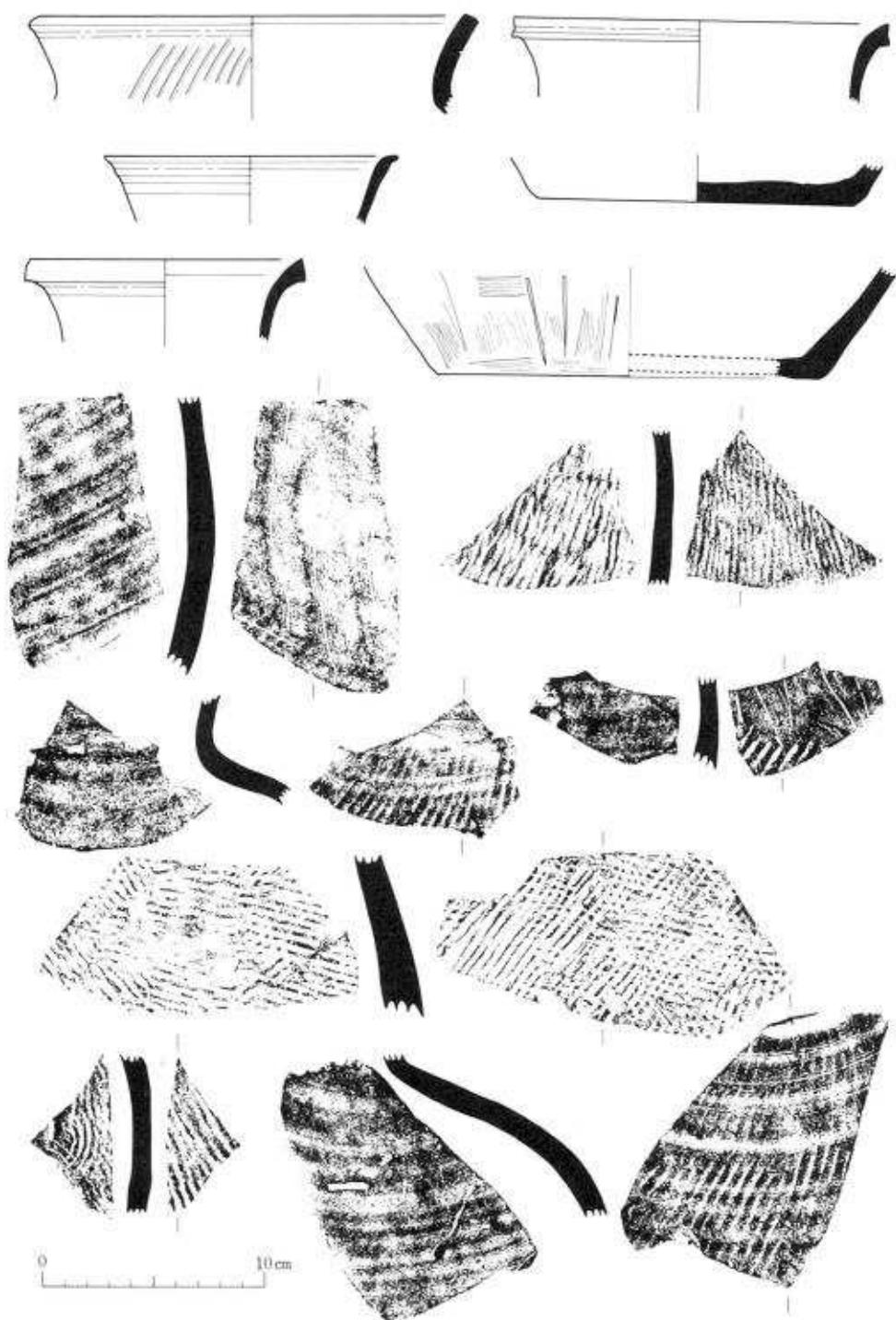
壺（第102図3・4・7）（3・4）は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものである。（7）は、底部近くの破片である。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。



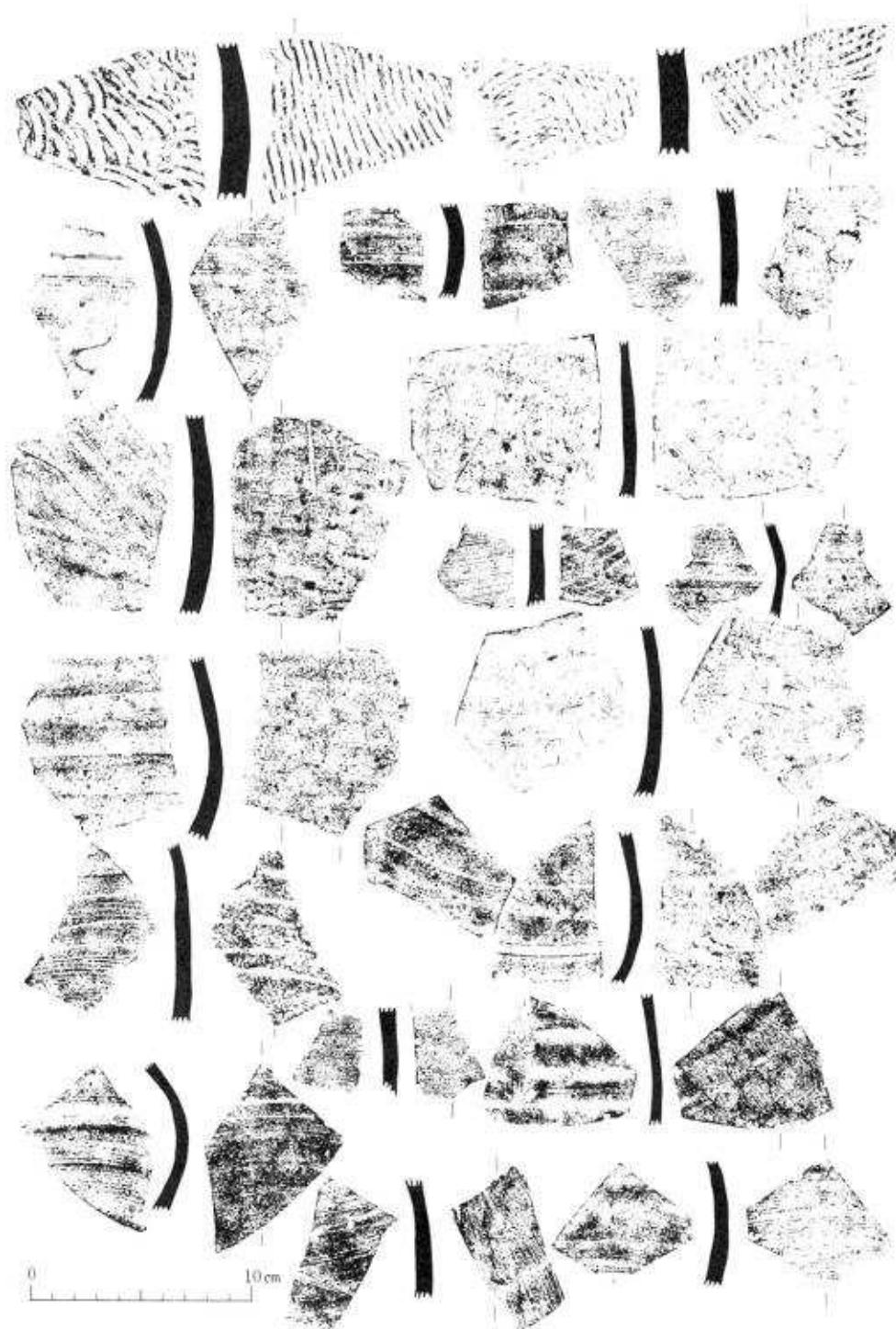
第102図 BH56竪穴住居跡出土遺物(1)



第103図 BH56竪穴住居跡出土遺物(2)



第104図 BH56竪穴住居跡堆積土出土遺物(1)



第105図 BH56竪穴住居跡堆積土出土遺物(2)

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調 整		底 面	器 高	口 横	体 種	底 深	分類番号
			外 面	内 面						
1	床面直上	土師器(环)	ロクロ底	ヘラミガキ(内墨)	右回転系切引	1.5			5.9	B ₁
2	堆積土	單惠器(环)	ロクロ底	ロクロ底	右回転系切引	(2.5)			5.9	C ₁
3	北カマド煙出	單惠器(环)	ロクロ底	ロクロ底	右回転系切引	4.8	12.8		6.0	C ₁ I a
4	床面	道惠器(环)	ロクロ底	ロクロ底	左回転系切引	4.6	13.1		6.3	C ₁ I a
5	堆積土	道惠器(環)	ロクロ底	ロクロ底		(4.3)	(15.0)			
6	堆積土	道惠器(環)	ロクロ底	ロクロ底		(4.1)	(14.6)			
7	床面	單惠器(盤)	ロクロ底	ロクロ底	左回転系切引	(2.7)			(7.2)	C ₁ I
8	北カマド	土師器(环)	ロクロ底	ロクロ底		4.7	11.6		4.8	B ₁
9	床面	土師器(盤)	ロクロ底	ロクロ底		(6.7)	14.8		B ₁ II a	
10	北カマド煙出	土師器(盤)	ハケヌラコナギ・ハラタケヌリ	ヨコナギ・ハケヌ		(10.1)	21.0		A ₁ I a3	
11	床面	土師器(盤)	ヨコナギ・ハケヌ	ヨコナギ・ハケヌ		(15.6)	(21.0)		A ₁ II b3	
12	北カマド煙出	土師器(盤)	ヨコナギ・ハケヌ	ヨコナギ・ナギ		(12.0)	(25.2)		A ₁ I a3	
13	北カマド煙出	土師器(盤)	ロクロナギ・タタキヌ	ロクロ底		(10.9)	19.3		B ₁ II a	
14	堆積土	土師器(盤)	ヨコナギ・ケヌリ	ヨコナギ・ハケヌ		(4.5)	(17.6)		A ₁ II b1	
15	堆積土	土師器(盤)	ロクロ底	ロクロ底		(4.5)	(26.2)			
16	堆積土	土師器(盤)	ヨコナギ・ケヌリ	ヨコナギ・ナギ		(8.0)	(20.0)		B ₁ II b1	
17	床面	土師器(盤)	タタキヌ・ハラタケヌリ	磨滅		(34.1)			(7.2)	B ₁
18	床面	土師器(盤)	ヨコナギ・タタキヌ・ハラタケヌリ	ナゲテ		(16.8)			(9.0)	
19	床面	道惠器(盃)	ロクロ底	ロクロ底		(11.3)			C	
20	堆積土	道惠器(盃)	ロクロ底	ロクロ底		(3.5)	(13.6)		C	
21	堆積土	道惠器(盃)	ロクロ底	ロクロ底		(2.8)	(10.6)		C	
22	堆積土	道惠器(盃)	ロクロ底	ロクロ底		(4.0)	(17.8)		C	
23	堆積土	道惠器(盃)	ロクロ底	ロクロ底		(5.5)	(18.0)		C	
24	堆積土	道惠器(盃)	タタキヌ	タタキヌ(拓本)					C	
25	堆積土	土 蘭	長さ 4.5cm		最大径 1.9cm					
26	堆積土	土 蘭	長さ 4.2cm		最大径 2.0cm					
27	堆積土	土 蘭	長さ 5.2cm		最大径 1.9cm					
28	堆積土	土 蘭	長さ 4.2cm		最大径 2.0cm					
29	堆積土	土 蘭	長さ 4.4cm		最大径 1.8cm					
30	堆積土	土 蘭	長さ 4.8cm		最大径 1.7cm					
31	堆積土	土 蘭	長さ 4.1cm		最大径 2.1cm					
32	堆積土	土 蘭	長さ 5.1cm		最大径 1.7cm					
33	堆積土	土 蘭	長さ 5.2cm		最大径 1.7cm					
34	堆積土	土 蘭	長さ 5.0cm		最大径 1.9cm					
35	堆積土	土 蘭	長さ 5.0cm		最大径 1.9cm					
36	堆積土	土 蘭	長さ 4.8cm		最大径 1.9cm					
37	堆積土	土 蘭	長さ (4.4cm)		最大径 2.1cm					
38	堆積土	土 蘭	長さ 4.9cm		最大径 2.1cm					
39	堆積土	土 蘭	長さ 5.1cm		最大径 1.8cm					
40	堆積土	土 蘭	長さ 5.0cm		最大径 1.8cm					
41	堆積土	土 蘭	長さ (4.2cm)		最大径 1.7cm					
42	堆積土	土 蘭	長さ 4.5cm		最大径 1.8cm					
43	堆積土	土 蘭	長さ (5.2cm)		最大径 1.9cm					
44	堆積土	土 蘭	長さ 4.8cm		最大径 1.9cm					
45	堆積土	土 蘭	長さ (4.6cm)		最大径 1.8cm					
46	堆積土	鉄製品(刃子)	長さ 8.8cm、幅 1.1cm、厚さ 0.5~0.2cm							

壺（第103図19） 口唇部分、体部下半を欠失しているが、肩の張る体部を有すると推定される長頸壺の一部である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、堆積土中より多量の土師器、須恵器、赤焼土器の破片と土錘が出土している。

甕（第103図14・15） 口縁部がわずかに外反しているもの⑯と平縁状のもの⑰とがある。いずれもロクロ未使用のものと推定される。調整技法は、口縁の内外面はヨコナデ、体部の外面はヘラケズリ、内面はナデである。⑰は筒形土器の一部とも思われる。

須恵器

壺（第102図2・5・6）（5・6）は、内湾気味に立ち上る口縁部、(2)は回転糸切りの底部である。

甕（第103図20・22・23・24） 口唇部が外方、下方、にそれぞれつまみ出されている甕の口縁部分の破片である。⑭は大甕の体部破片である。

壺（第103図21） 口縁部が外反し、口唇部が強く上方に引き出され、内側に稜を有する壺の口縁部と推定されるものである。

〔その他の遺物〕

土錘（第103図25～45） 最大長5.2～4.1cm、最大径約2.1～1.7cmのもので中央に径約0.4cm、前後の貫通孔が穿がわかっているものである。

鉄製品（第103図46） 長さ8.8cm、幅1.1cmの刀子の一部とみられる鉄製品である。

その他、堆積土中より他の住居に比べて多量の土師器、須恵器等の破片が出土しているのが目につく。第104図、105図は、須恵器の甕、壺等の一部と推定される破片の拓本である。

⑮C F 56竪穴住居跡（第106図）

〔遺構の確認〕 C調査区の中央付近、C I 53竪穴住居跡の北約6m、C E 68竪穴住居跡の西12mの地点の地山面で検出したものである。

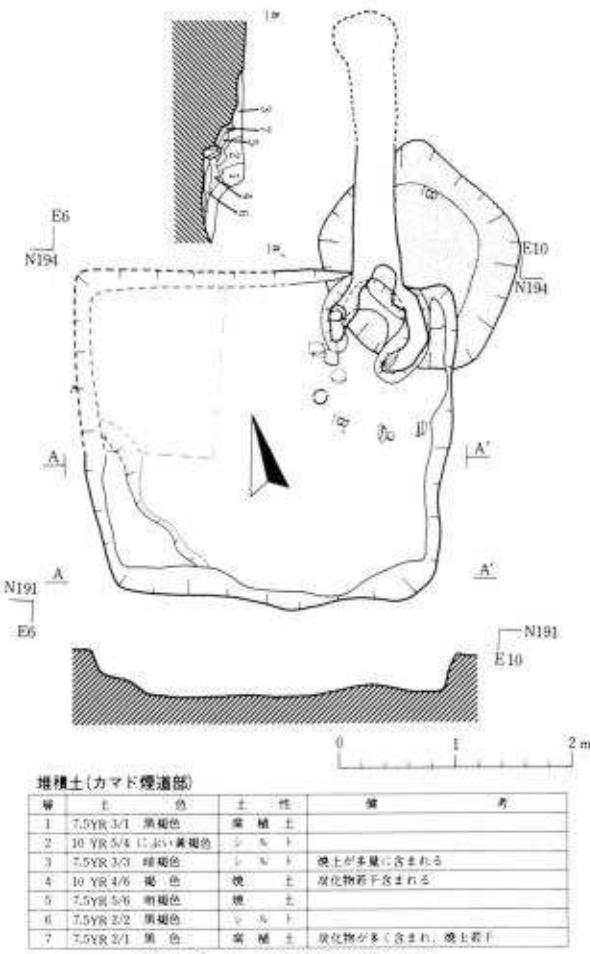
〔重複〕 カマドの燃焼部から煙道部にかけて、縄文時代のピットとみられるC F 09ピットの上に構築されている。又、北西隅部分は調査当初の深掘りのため破壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形は、やや北壁が長いがほぼ方形である。長軸（東西）約3.1m、短軸（南北）約2.9mであり、床面積は、約9.0m²である。なむ、南北壁の中央を結ぶ軸線はN-17°-Eである。

〔壁〕 地山をそのまま、壁面としているものであるが既述の如く北南隅部分は調査前の深掘りで破壊されている。残存壁は比較的良好で特に東壁に鋭い立ち上りを呈しその壁高は約40cmである。

〔床〕 特に貼床は認められず、床面に人頭大の石が多数散在しているのが認められた。

〔柱穴〕 床面より柱穴とみられるピットは検出されなかった。



第106図 CF56竪穴住居跡

(年代決定資料) 住居の構築及び使用の年代等を決定する資料としてはカマド内、床面より出土の土師器盤がある。いずれも完形品ではなく、口縁部上半、体部下半のものや破片からの復元実測したものである。

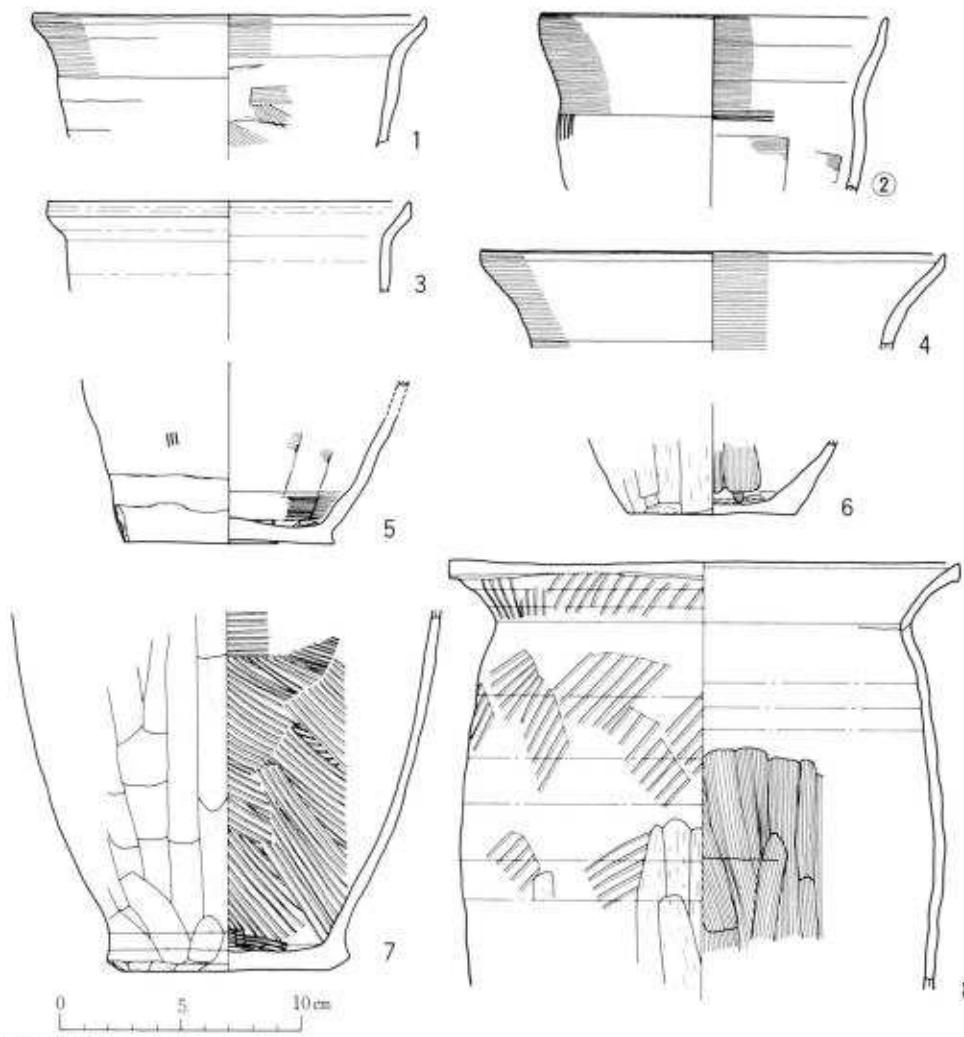
土師器

中・小甕 (第107図1・3・5~7) (1)は、口縁部が短く「くの字」状に外反し口唇部が上方へつまみ出されているものでロクロ未使用のもの、(3)は、口縁部が短く外反し、口唇部が上下につまみ出されているものでロクロ使用のものである。(5~7)は、いずれも体部下半のもので(5)・(6)は外面にヘラケズリ、内面にはハケメ、ナデ等が施されているものである。

大甕 (第107図4・8) (4)は、口縁部が長く外反し、口唇部が単純に上方へつまみ出されているもの、(8)は、口縁部が短く「くの字」状に外反し、口唇部が上下にわずかにつまみ出されているものであり、体部最大径が上半に位置すると思われるものである。(8)はロクロ使用で

〔カマド〕 北壁東隅に付設されているものである。両側壁はシルトで構築されているが燃焼部は北壁に対して少し東に振れる形で構築されている。煙道部分は奥壁際でやや上り、それより北へ伸びているものであるが底面部分が一部確認されたのみで、上部及び先端部は明瞭には確認できなかったものである。

〔その他の施設〕 床面上よりピット周溝等は検出されなかった。



出土遺物観察表

番 号	出土場所	種類	調 整		灰 面	器 底	口 部	体 部	基 底	分類番号
			外 面	内 面						
1	カマド埋土	土師器(壺)	ヨコサギ・不明	ヨコサギ一部モザイク		(15.0)	(16.4)			A.2.62
2	埋積土	土師器(壺)	ヨコサギ・ハセキ(サ)	ヨコサギ・ハセキ		(16.2)	(14.5)			A.2.64
3	カマド埋土	土師器(壺)	ロテロ瓶	ロテロ瓶		(13.8)	(15.0)			B.2.13
4	床面直上	土師器(壺)	ヨコサギ(ロタロウ)	ヨコサギ(ロタロウ)		(4.0)	(19.3)			
5	カマド前	土師器(壺)	器底	ハラケヌリ		(6.8)				9.1
6	カマド埋土	土師器(壺)	ハラケヌリ	ハラケヌリ	ハラケヌリ	(3.2)				7.0
7	カマド前	土師器(壺)	ハラケヌリ	ハラケヌリ	ハラケヌリ	(5.4)				10.1
8	カマド埋土	土師器(壺)	ヨコサギ後ロタロウナナ ヨコサギ後 ヨコサギ後ハラケヌリ	ヨコサギ後ロタロウ(1)		(17.7)	21.1			B.1.8

第107図 CF56竪穴住居跡出土遺物

あるが(4)ははっきりしない。調整技法は(4)は、口縁部内外面ともにヨコナデ、(8)は、タタキメ後ロクロナデ、体部外面はタタキ後ロクロナデでその後ヘラケズリを下半に施されている。内面は中～下半にかけてヘラナデされている。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、堆積土中より、土師器の破片の他多量の縄文土器片や、石匙(1)(第53図)、打製石斧(1)(第55図)、磨石(1)(第55図)が出土している。

土師器

〔中甕〕(第107図2) 口縁部がわずかに外傾し、口唇部近くで直立する頸部に段のない甕の口縁部で口径より類推して中型の甕と思われるものである。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面をわずかにハケメ痕がみわれる。内面はナデである。

その他、多くの甕の破片にまじってロクロ使用の坏で内黒処理された破片が1片出土している。

⑯C I 53堅穴住居跡(第108図)

〔遺構の確認〕 C調査区のほぼ中央、C J 50住居跡の北約2mの地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 C I 53、C I 56、C I 50、C J 59の各ピットを切って構築しているもので、床面のほぼ2/3は、それに該当する。

〔平面形〕 平面形は長方形を呈しており、規模は、長軸(南北)約4.3m、短軸(東西)約3.4mである。なお、床面積は約14.6m²である。又、南北壁の中点を結ぶ軸線はN-28°-Wである。

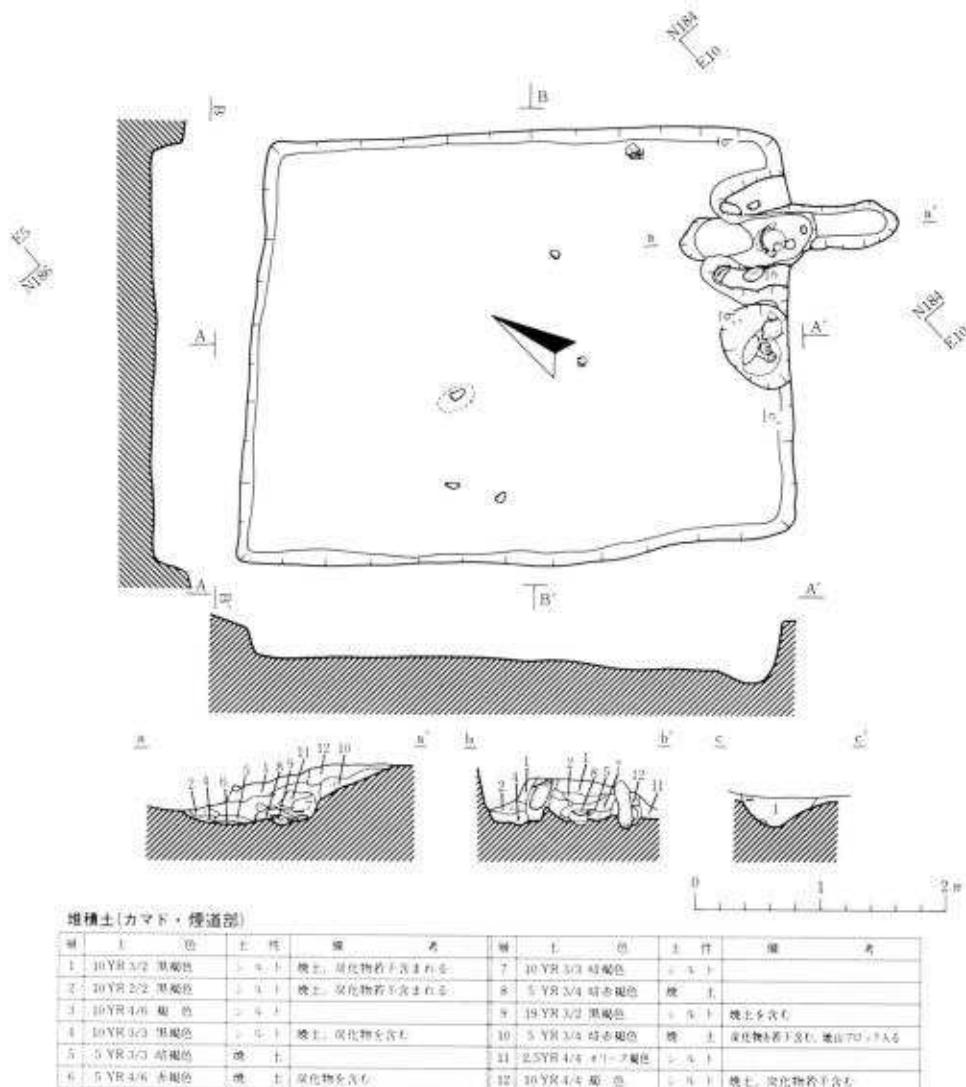
〔堆積土〕 断面のみで堆積の様子はわからないが、現説資料によると、中央西寄りに粉状バミス(火山灰)がレンズ状に多量に入っており、一部床面にも存在したことが述べられている。

〔壁〕 地山をそのまま、壁としているもの立ち上りも垂直に近く残存状態も北壁を除き良好である。壁高はそれぞれ23～33cmである。

〔床〕 既述の如く縄文時代のピットの上に構築されているが特に貼床した様子は認められない。

〔柱穴〕 検出されていない。

〔カマド〕 南壁、東寄りのコーナー近くに付設されている。燃焼部と煙道部より成る。両側壁は、芯材として左右それぞれに3個の川原石を並列させてその上をシルトで固めて構築していたものである。又、燃焼部中央には、焚口面に対して土師器の甕の口縁部を二重にめぐらした高さ約8mの円筒状のシルトが存在した。シルト面が厚さ5cmにわたり固く焼けており、これは、石や土器の支脚のかわりにシルトで支脚を作り使用したものと思われるもので前面の土師器は火力からシルトを保護するためのものであったと考えられる。煙道は、壁際でほぼ垂直に立ち上り、その後、ゆるやかに上昇して舌状(約3.5cm)に切れており、これが本来の姿かどうか不明である。



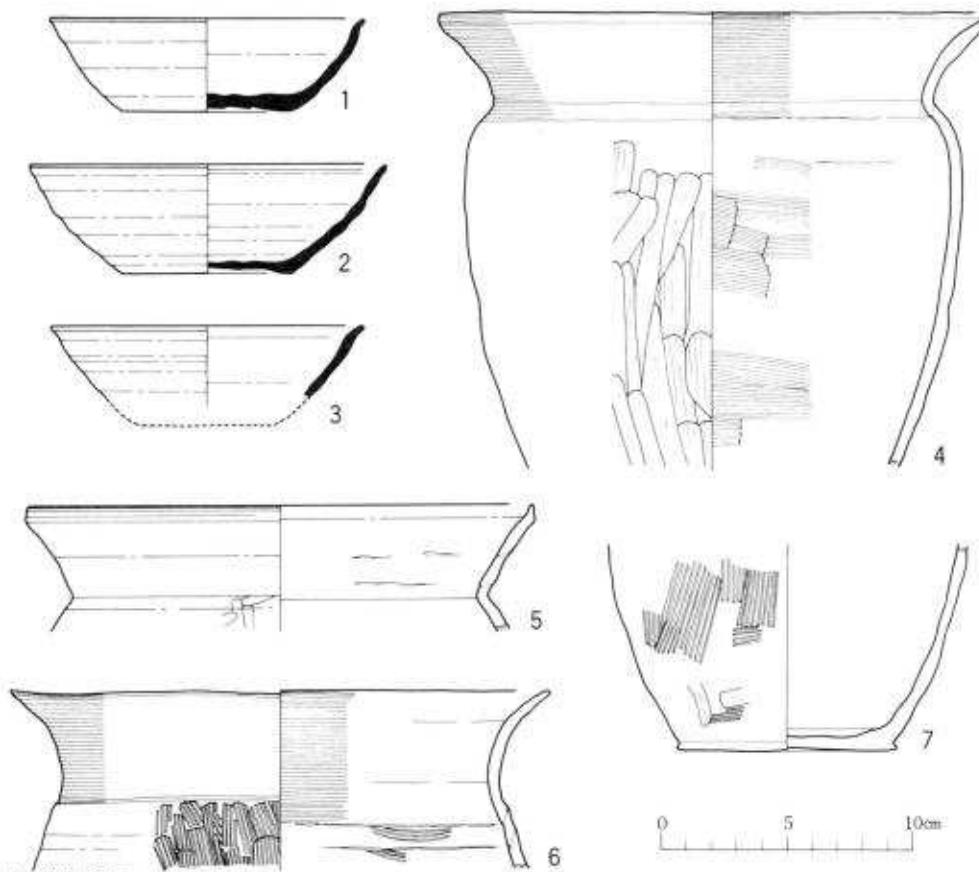
第108図 CI53竪穴住居跡

【その他の施設】 カマド西側に径約70×60cm、最大の深さが約30cmの鉢鉢状のビットがあり底面より土師器の甕が出上している。これが貯蔵穴状ビットに該当するものと考えられる。その他、周溝等は認められない。

【年代決定資料】 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内、及び貯蔵穴状ビット内から出土した土師器甕、須恵器环等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ未使用のものとロクロ使用があり、完形品ではなく、いずれも口縁部や体部上半部分が主である。

大甕 (第109図4~7) (4~5)は、口縁部が単純に「くの字」に長く外反し、口唇部を



出土遺物観察表

番号	出土層位	種類	調査		直 径	高 度	口 径	体 部	底 部	底 径	分類番号
			外 壁	内 壁							
1	床面	須恵器(24)	ロクロ復	セクロ復	回転ヘラ切り	3.1	12.5	6.8	C ₁ T ₂		
2	床面	須恵器(25)	ロクロ復	ロクロ復	右回転み切り	4.3	14.3	6.8	C ₁ T ₂		
3	床面	須恵器(26)	ロクロ復	ロクロ復		2.6	15.3		C		
4	ビード内	土師器	ヨコナデ・ハラケズリ・ヘリミガキ	ヨコナデ・ヘラオサ		16.0	22.0		A ₁ T ₂		
5	ビード内	土師器	ロクロナデ・ヘラミガキ	ロクロナデ		5.0	20.0		B ₁ T ₂		
6	ウツボ支撑	土師器	ヨコナデ・ハラメ	ヨコナデ・ナチホ		3.1	21.5		A ₁ T ₂		
7	床面	土師器	ハケメ	不規	ヘラヤズリリ	8.2			元素		

第109図 C153堅穴住居跡出土遺物

上方へつまみ出しており、肩部に軽い段が巡り、体部最大径が肩部に位置するもの、上半部である。(5)は、ロクロ使用のものと思われる。(6)は、口縁部が単純に「くの字」状に長く外反しやはり軽い段が巡るものである。又、調整技法は、口縁部内外面ヨコナデのもの、体部外面ヘラケズリのもの、ハケメのものがあり、内面についてもハケメヨコナデ等が施されている。

須恵器

坏（第109図1～3） (1)は、体部は丸味をもって立ち上り、口縁部でわずかに外反するもので底部はヘラ切りである。(2)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上るもので、底部の切り離しは回転糸切りである。(3)は、口縁部が外反するもの、破片である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く土師器甕、須恵器坏、縄文土器甕の破片が出土しているが実測できるものはない。

⑦C E 12竪穴住居跡（第110図1・2）

〔遺構の確認〕 C調査区のや、西寄り、縄文時代に属するC A 12竪穴住居跡の南約4m、C G 12竪穴状遺構の北約3m地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 縄文時代に属すると思われる北西隅のC D 12ピット、北東隅のC D 09ピット、カマド前のC E 09ピットの上に構築されているものである。これらのピットは径が約1.5m、床面よりの深さは約1mである。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸方形であり、規模は、長軸（東西）約5.5m、短軸（南北）約4.5mで、床面積は約24.8m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-18°-Eである。

〔堆積土〕 細別すると8層観察できるがIV層に大別することができる。I層は黒色の腐植土で住居内のほぼ全域に分布し床面には達していない。II層は、黒褐色の黒ボクで、I層の下方に堆積し、主として、中央附近は床面に堆積し、壁際には堆積していない。III層は、黒褐色のシルトで、壁際より中央に向って堆積している。IVとしたのは、II層にサンドイッチ状に入りこんでいる粉状バミス（火山灰）である。

〔壁〕 地山をそのまま、壁としており、立ち上りはほぼ垂直に近いもので残存状態は良好である。最も良好な西壁で約50cmを計る。

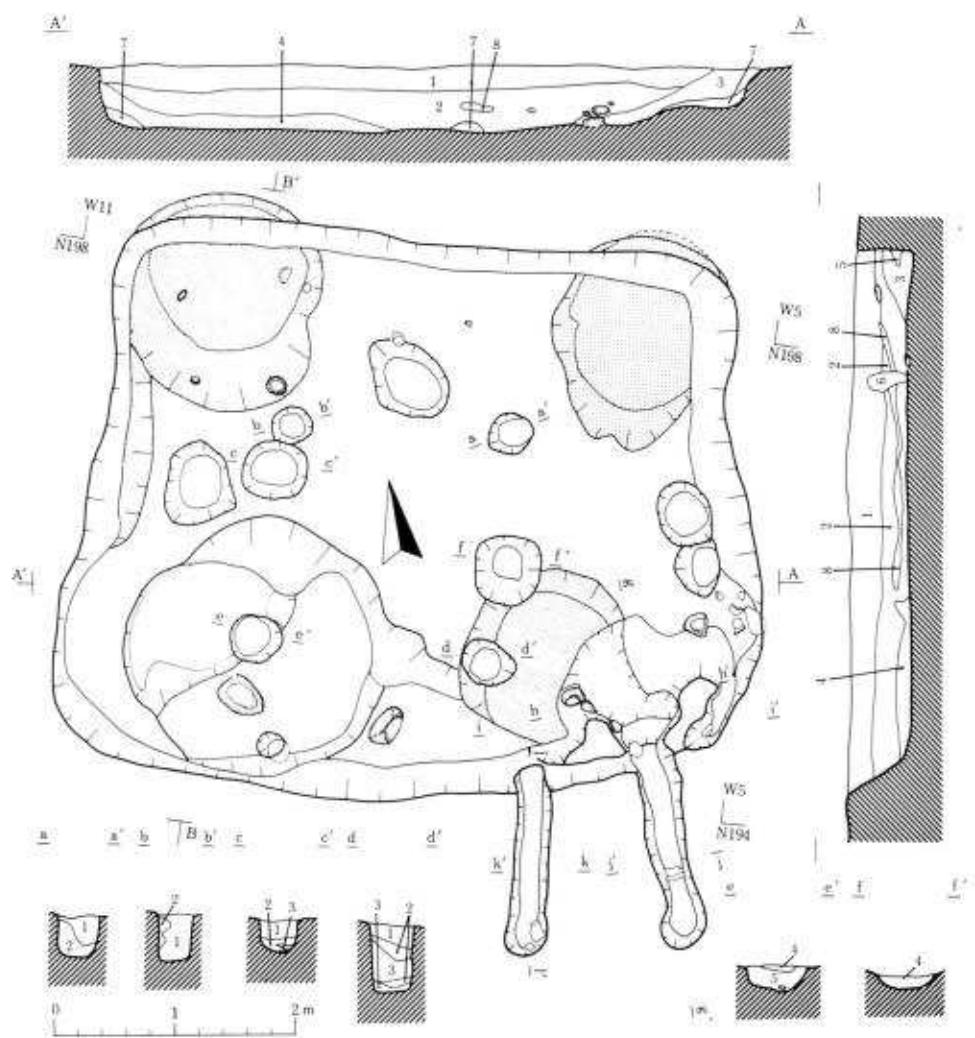
〔床〕 ほぼ平坦で固い。カマド前のピット上面は貼り床されており、又、南東隅床面下も掘り下げた後カマド前のピットと溝でつながっており、上面は貼り床状になっていた。排水のため行われたものと考えられる。

〔柱穴〕 床面上より大小10個のピットが検出されている。そのうち、住居内の対角線上に位置するP₁～P₄が、深さ、配置等からそれに該当するものと考えられる。但し、この4個のピットは各壁より、等距離というより、全体的にや、南西に寄った位置にある。

〔カマド〕 南壁東寄りに煙道のみのものが存在し、そのすぐ東隅には燃焼部と煙道より成るカマドが付設されている。前者は、廃棄されたものでトンネル状にくりぬいていた南壁はシルトで埋めて叩いてあった。後者は、両側壁が、壁の一部と利用しシルトで構築されていたもので、カマドの下面は貼り床されている。又、燃焼部側壁ともにその一部が厚い焼土層を形成しており、かなり熱を受けたことを示している。煙道は、奥壁で一段高くなりそれがや、下へ傾斜してくり抜かれており煙出部分に若干の掘り込みが認められた。

〔その他の施設〕 床面上にはP₅～P₆まで6個のピットが存在するがP₅は深さ約26cmとや、深いが他は比較的浅い皿状のピットである。特に、貯蔵穴状のピットと思われるものは存在しない。

〔年代決定資料〕 住居の使用及び構築等の年代を決定する資料としては、床面、カマド内、ピット内、及び煙出部より出土の土師器、須恵器等がある。実測したものは土師器壺2点、甕



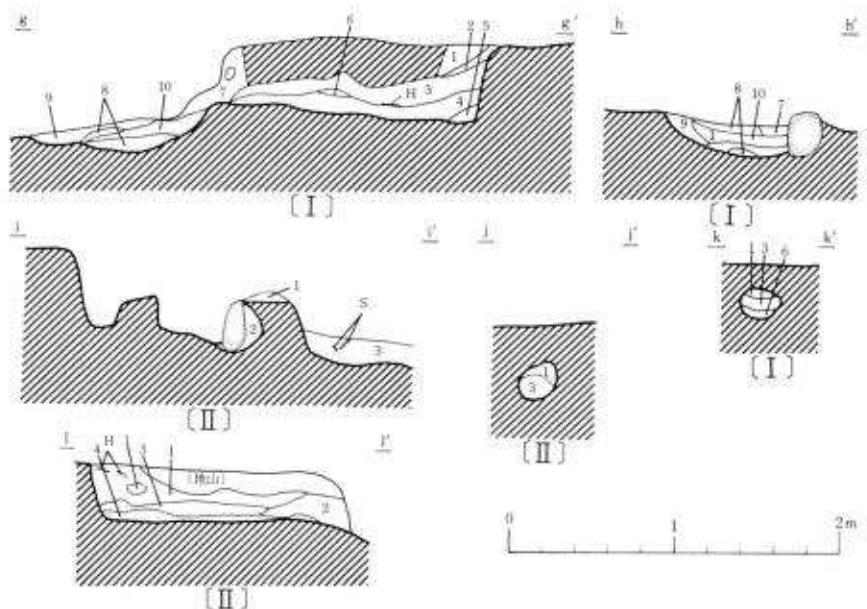
堆積土

大別	層	土色	土性	備考
I	1	10 YR 2/1 黒色	腐植土	小礫、木根含む
II	2	10 YR 2/2 黒褐色	腐植質土	木根を含む
	3	10 YR 3/2 黒褐色	腐植質土	焼土を若干含む
	4	10 YR 2/2 黒褐色	腐植質土	
III	5	10 YR 2/1 黒色		
	6	10 YR 2/1 黒色		
	7	10 YR 3/3 暗褐色		
IV	8	2.5YR 6/4 オリーブ褐色	バミス	路下大山灰

柱穴・ピット堆積土

層	土色	土性	備考
1	10 YR 2/3 黒褐色	腐植土	
2	10 YR 5/4 黄褐色	シルト	
3	10 YR 2/2 黒褐色	腐植土	
4	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	
5	10 YR 4/4 灰色	シルト	炭化物、焼土多量

第110-1図 CE12竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)〔I〕

層	上色	土性	備考
1	2.5YR 3/2 黒褐色	腐殖土	炭化物、木根を含む
2	10 YR 4/6 緑色	シルト	炭化物、木根を含む
3	7.5YR 3/3 晴褐色	シルト	炭化物を含む
4	5 YR 3/4 晴赤褐色	シルト	燒土、炭化物を含む
5	5 YR 3/4 暗赤褐色	シルト	4層に比してザラザラしている
6	10 YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む
7	5 YR 3/3 晴赤褐色	シルト	燒土、炭化物、黑色土を含む
8	5 YR 4/8 赤褐色	燒土	
9	10 YR 6/6 明黃褐色	シルト	炭化物を若干含む
10	2.5YR 5/8 明褐色	シルト	燒土を若干含む

堆積土(カマド・煙道部)〔II〕

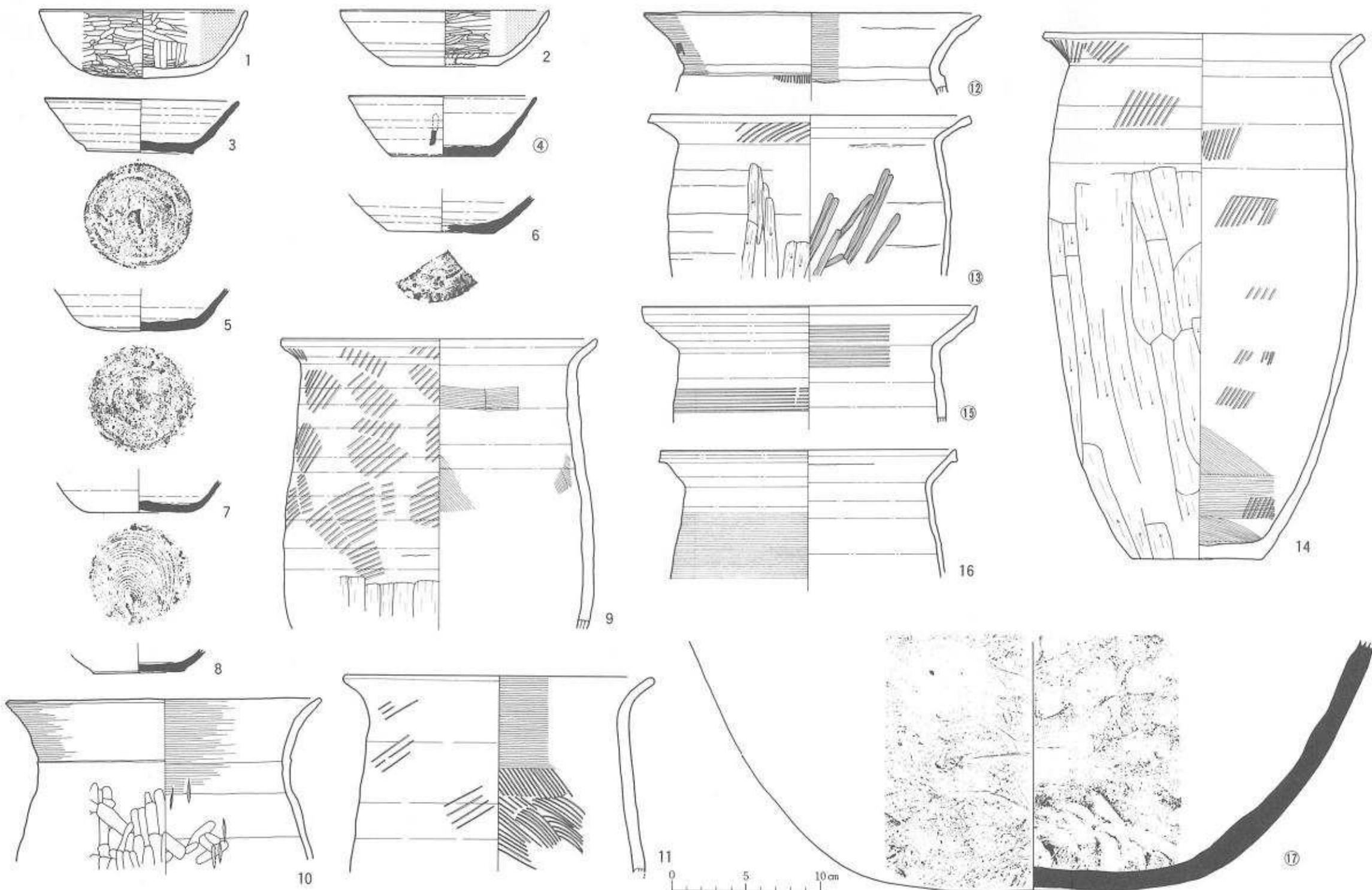
層	上色	土性	備考
1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	燒土、炭化物を若干含む
2	2.5YR 4/4 エリーズ褐色	シルト	燒土若干、煙道を埋めたもの
3	2.5YR 3/2 黒褐色	シルト	燒土と黑色土の混土
4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ブロック状に燒土が入る

第110—2図 CE12堅穴住居跡

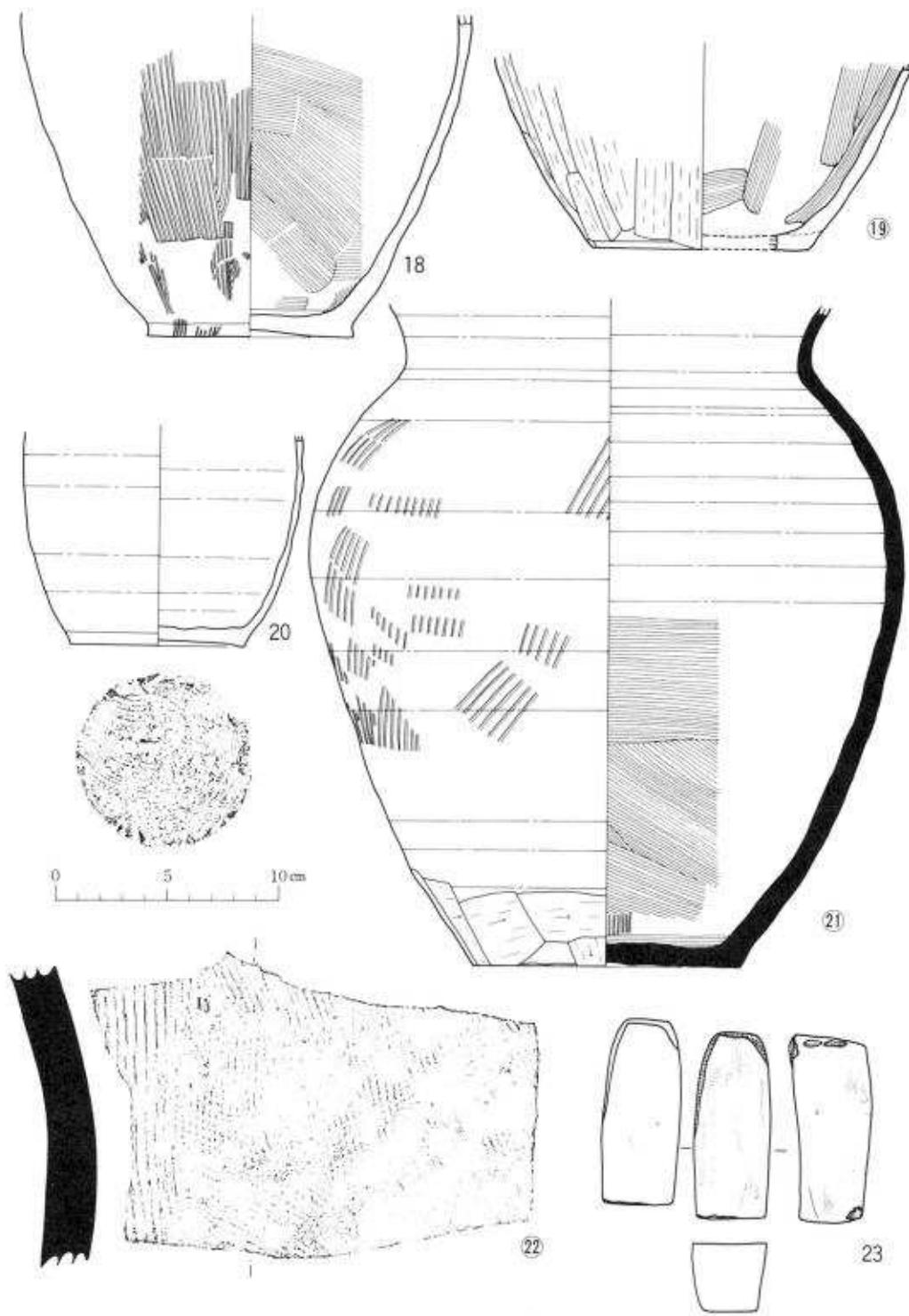
8点、須恵器環2点、砥石1点である。

土師器 製作に際しロクロ未使用のもの、ロクロ使用のものと両者が存在する。

环(第111図1・2) (1)は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上る無段の丸底風のロクロ未使用环である。調整技法は、内外面ともヘラミガキ、内面は黒色処理されている。(2)は、底部から口縁部にかけて直線的に外傾するロクロ使用の环である。内面はヘラミガキ、黒



第111図 OE12竪穴住居跡出土遺物(1)



第112図 CE12竪穴住居跡出土遺物(2)

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調 整		底 面	器 高	口 径	体 径	底 径	分類番号
			外 面	内 面						
1 カマド前	土師器(环)	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヘラミガキ(内黒)			4.6	13.9			A, b
2 壁道立上部	土師器(环)	ロクロ痕・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)	糸切り後ヘラケズリ		3.7	13.9	(7.0)	B, I a	
3 底 面	須 惠 器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り		3.6	13.9	7.1	C, I a	
4 堆 積 土	須 惠 器(环)	ロクロ痕(墨書)	ロクロ痕	ヘラ切り		4.0	12.6	7.1	C, I a	
5 堆 積 土	須 惠 器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	(3.0)			7.0	C, II	
6 ピット内	須 惠 器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕	ヘラ切り	(2.4)			(7.1)	C, I a	
7 堆 積 土	須 惠 器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(2.0)			6.8	C, II	
8 堆 積 土	須 惠 器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(1.4)			6.0	C, I	
9 壁道立上部	土師器(甕)	タタキメ後ロクロナデ	ハケメナデ		(20.4)	21.1			B, II a	
10 壁道立上部	土師器(甕)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ナデ・ナビツケ		(10.7)	21.0			A, I a 3	
11 カマド内	土師器(甕)	タタキメ後ロクロナデ	ハケメ後ヨコナデ・ハケメ		(13.5)	(20.5)			B, I d	
12 堆 積 土	土師器(甕)	ヨコナデ・ハケメ	ヨウナデ・不明		(5.3)	22.5			A, I a 3	
13 堆 積 土	土師器(甕)	ロクロナデ・ロクロ後ヘラケズリ	ロクロナデ後ナデツケ		(10.2)	21.4			B, I d	
14 カマド前	土師器(甕)	タタキメ後ロクロナデ・ヘラケズリ	タタキメ・ハケメ		34.5	21.5			B, II d	
15 壁道立上り	土師器(甕)	ロクロナデ・ハケメナデ	ハケメナデ・ロクロ		(7.8)	22.5			B, I a	
16 ピット内	土師器(甕)	ロクロナデ・ハケメ後ロクロ	ロクロナデ		(8.5)	20.5			B, I b	
17 堆 積 土	須 惠 器(甕)	タタキメ	タタキメ・シボリ?							C
18 カマド前	土師器(甕)	ハケメ	ヘラナデ・ヘラケズリ	木葉底	(14.4)			9.2	B	
19 堆 積 土	土師器(甕)	ヘラケズリ	ナビツケ	ヘラケズリ	(8.4)			(9.8)	B	
20 カマド内	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転糸切り	(9.5)			7.7	B	
21 堆 積 土	須 惠 器(甕)	タタキメ後ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ・ナビツケ	ヘラケズリ	(29.5)		26.5	12.0	C	
22 堆 積 土	須 惠 器(甕)	タタキメ	(括弧)							C
23 壁 道 部	砥 石	8.5×30×3.4cm	(石質細粒凝灰岩)							

色処理されている。底部切り離し技法は回転糸切り無調整である。

大甕 (第111・112図9~11・14~16・18~20) (9・11・14)は、口縁部が短かく外反し、体部最大径が体部中位~下半にあるもの、又は、中央附近にある長胴である。調整技法は口縁~上半は外面がタタキメ後ロクロナデ、下半がヘラケズリされており、内面はロクロナデ、ハケメ等が施されている。(10)は口縁部が長く「くの字」状に外反するもので、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はヘラミガキ、ロクロ未使用のもので(15・16)は、口縁部が短かく外反し、口唇部が上方又は、下方につまみ出されているもの長胴の上半である。内外面ともにハケメ状のロクロナデである。(18)は、木葉底のものである。

小甕 (第112図20) ロクロ使用の小型甕の体部下半である。底部は、回転糸切り無調整である。

砥石 (第112図23) 石材が石質細粒凝灰岩で、平面形は先方がや、丸味をおびた舟型で断面形は方形を呈し、上下2面が特に使用され、特に上面は湾曲している。又、側面には、多くの擦痕が認められる。

[堆積土出土遺物] 別表の如く、土師器、須恵器、繩文土器等の破片が多く出土している。実測したものは、須恵器環4点、大型甕2点、土師器、大型甕3点である。

須恵器

壺 (第 111 図 4・5・7・8) (4)は、口縁部が直線的に外傾し、体部に墨書の一部が認められるもの(8)は底部破片でいずれも、回転糸切り無調整のものである。(5・7)は、いずれも丸味の強い底部で、(5)は回転ヘラキリ、(7)は、回転糸切りものである。

大甕 (第 111 図 17・21) (17)は、底部が丸底風の大甕の下半部で外面にタタキメ文、内面は当て具痕が認められるもので残存部の体径が約 46 cm あるものである。(21)は、口縁部が欠失しているが、最大径が体部上半にある甕である。外面はタタキメ、下半底部はヘラケズリ、内面下半はナデが施されている。(22)は、表面に平行タタキメ文を有する大型甕の破片である。

土師器

大甕 (第 111 図 12・13) (12)は、口縁部が長く「くの字」状に外反するロクロ未使用のもの(13)は、口縁部が短かく外傾するロクロ使用の甕で、外面口縁部にはタタキメがみられ、体部にヘラケズリ、内面は、ロクロナデである。(19)は、底部下半が外面ヘラケズリ、内面ナデ、底部はヘラケズリされているものである。

縄文土器片は、撚糸文の破片が数片ある他は、いずれも地文が縄文で摩滅しているものがほとんどである。

⑯B F 50 竪穴住居跡 (第 113 図 1・2)

〔遺構の確認〕 B 調査区のはば中央、B H 12 竪穴住居跡の東約 9 m、B F 53 掘立柱建物跡の西約 0.5 m の地点の地山面で煙出部と北西隅の柱穴跡と接するような形で検出されたものである。

〔重複〕 南壁西側は、住居跡より新しいと推定される B G 50 ピットによって切られている。

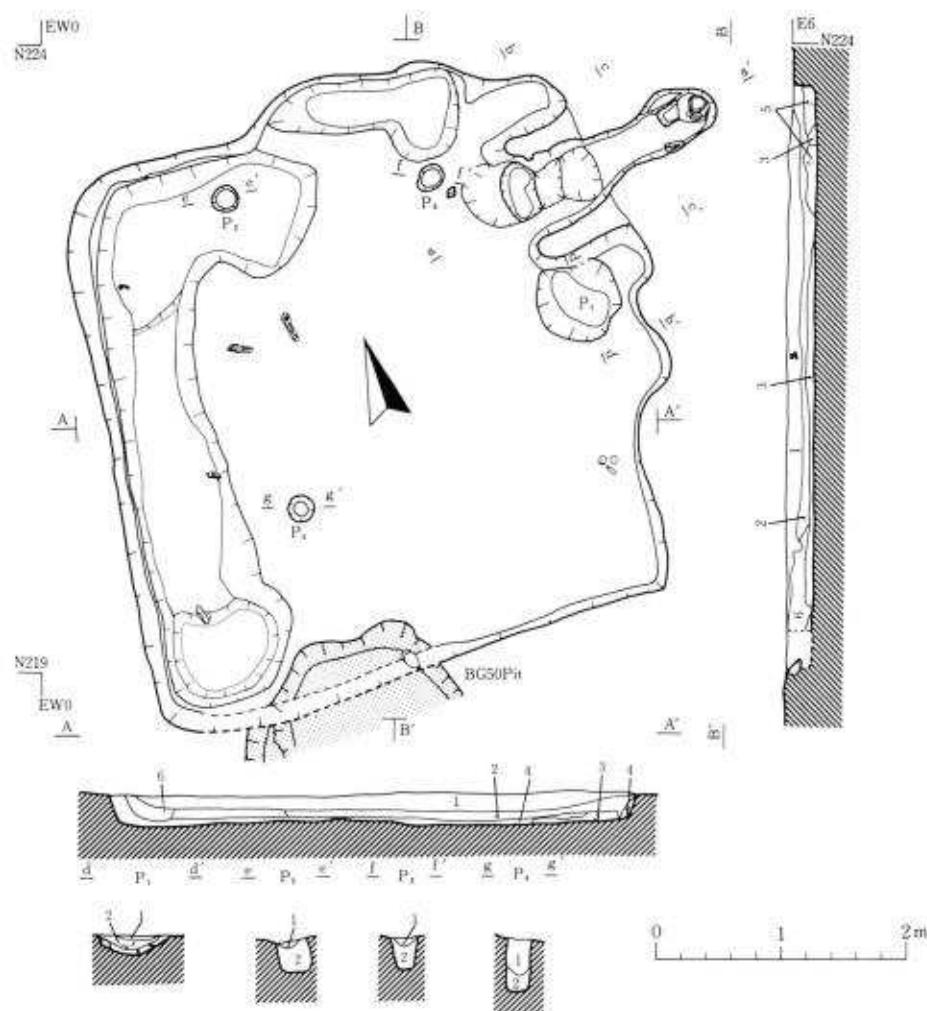
〔平面形・規模〕 平面形は、方形である。規模は、長軸(南北)約 4.7 m、短軸(東西)約 5.5 m であり、床面積は、約 2.2 m² である。なお、南北壁の中点を結ぶ軸線は、N—6°—E である。

〔堆積土〕 細かくは 6 層に分けられるが、IV 層に大別できる。I 層は、黒褐色の粘土質砂土で、壁際を除く中央附近にレンズ状に堆積し、床面には達していない。II 層は、黒褐色の砂質粘土で南東側の壁近くから中央に向って床面に堆積しているが、北東側ではみられない。III 層は、主に、黒褐色の砂質粘土で、床面の中央附近に堆積している。IV 層は、暗褐色の粘土質砂土で、北西、南西側の壁近くから中央に向って堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま、壁としているものである。残存状態は、いずれも 20 cm 内外とあまり良好といえないが床面からの立ち上りは比較的急である。なお、前述の如く、南西側は、ピットにより破壊されている。

〔床〕 比較的平坦で固く、貼床は認められない。

〔カマド〕 東壁北隅近くに附設されており、燃焼部と煙道部より成る。西側壁は、シルトで構築されそれ舌状に残っている。燃焼部は、皿状にくぼんだ床面を有し、左右の最大幅は



堆積土

大別	層	土 色	土 性	備 考
I	1	10 YR 2/2 黒褐色	粘土質砂土	土師器片、炭化物若干混じる
II	2	10 YR 3/2 黒褐色	砂質粘土	土師器片多量に出土。炭化物、埴土若干
	3	10 YR 3/1 黒褐色	砂質粘土	炭化物若干混じる
III	4	10 YR 4/4 紺色	砂質粘土	
	5	10 YR 3/1 黒褐色	砂質粘土	炭化物若干。焼土多量混じる
IV	6	10 YR 3/3 紺褐色	粘土質砂土	堆山の上に小プロット状態に現じる

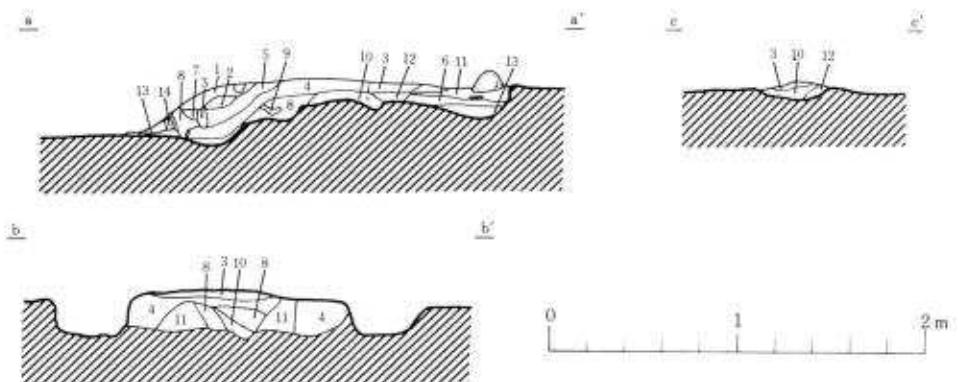
堆積土(柱穴)

層	土 色	土 色	備 考
1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	
2	10 YR 2/2 黒褐色混土	シルト	泥上

堆積土(P)

層	土 色	土 性	備 考
1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	
2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	塊土、炭化物
3	10 YR 2/3 紺褐色	シルト	

第113-1図 BF50竪穴住居跡



堆積土(カマド・煙道部)

番	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	粘土質砂土	燒土、炭化物若干含む
2	10YR 3/1 黒褐色	粘土質砂土	燒土、炭化物若干、地山小ブロック
3	10YR 2/2 黒 色	粘土質砂土	燒土、炭化物若干含む
4	10YR 2/1 黒 色	粘土質砂土	燒土、多量に含む
5	5 YR 3/3 暗赤褐色	燒 土	
6	5 YR 4/4 にほん赤褐色	燒 土	
7	10YR 4/4 褐 色	粘土質砂土	
8	10YR 3/2 黒褐色	粘土質砂土	
9	10YR 2/2 黒褐色	粘土質砂土	
10	10YR 4/4 褐 色	粘土質砂土	
11	10YR 2/2 黒褐色	粘土質砂土	燒土若干含む
12	10YR 2/1 黒 色	粘土質砂土	炭化物を多量に含む
13	10YR 3/2 黒褐色	粘土質砂土	地山の土が若干混入
14	10YR 7/1 黒 色	粘土質砂土	燒土、地山の土が混じる

第113—2図 BF50竪穴住居跡

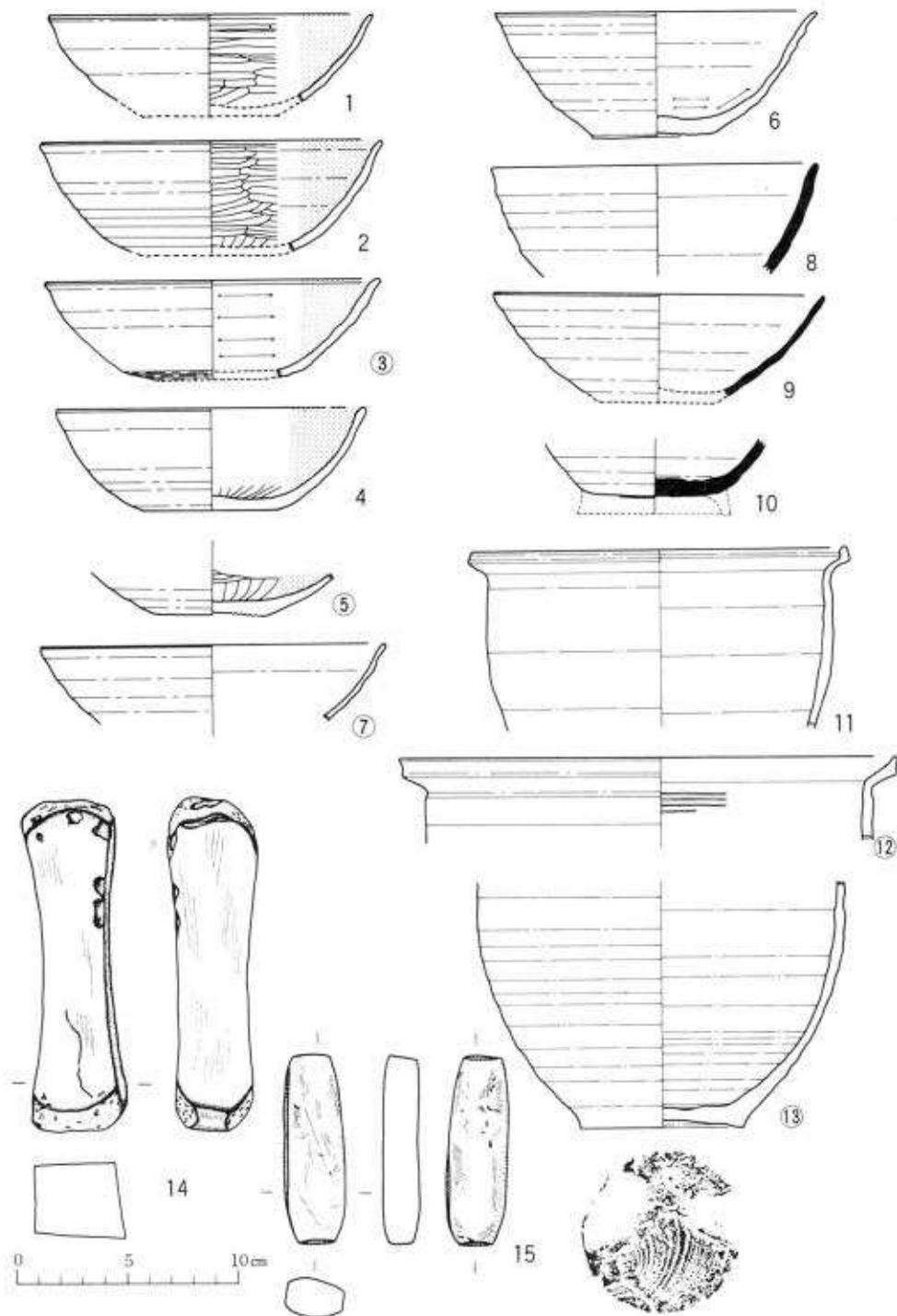
約50cmである。燃焼部奥壁は約10cmの段をもって上り更に約10cm上り二段の段差でもって長さ約110cmの煙道部へ連なる。煙道部底面は、中半より先端の煙出部にかけてやや下り傾斜になっている。特に煙出部にピットはない。

〔他の施設〕 カマド右側壁に径約75cm、深さ約20cmの深皿状のピットが存在する。焼土炭化物の混った堆積土であるが遺物は出土していない。又、西壁から北壁にかけての床面下に幅約80cm、深さ4~10cmの床面に皿状の溝がカギ状に存在し、更に、北壁に沿って長さ140cm、幅約40cm、深さ約6cmの溝が存在する。これらは、排水を意図したものと考えられる。

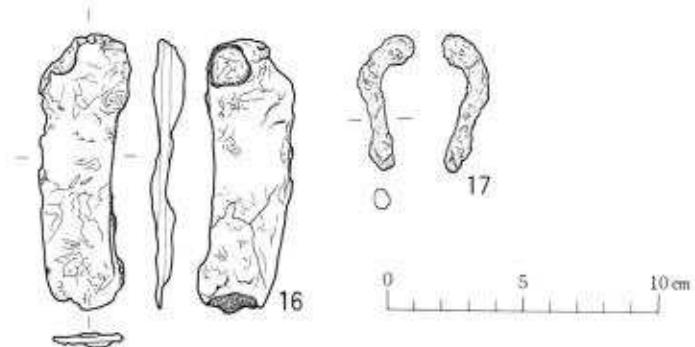
〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内、及び、カマド周辺の床面より出土した土師器、須恵器、砥石、鉄製品等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

壺(第114図1・3・4) (1・3・4)は、体部は丸味をもって立ち上り、口縁部でわ



第114図 BF50竪穴住居跡出土遺物(1)



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調 整		底面	器高	口徑	体径	底種	分類番号
			外 面	内 面						
1	カマド周辺	土師器(环)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	回転ヘラケズリ	(4.6)	14.6			B ₂
2	堆積土	土師器(环)	ロクロ痕・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(内黒)		(4.9)	15.6			B
3	カマド内	土師器(环)	ロクロ痕・回転ヘラケズリ	ヘラミガキ(横)(内黒)	回転ヘラケズリ(?)	(4.5)	15.0			B ₁
4	カマド周辺	土師器(环)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	磨滅	4.6	14.0		6.0	B, I _b
5	堆積土	土師器(环)	ロクロ痕	ヘラミガキ(内黒)	右回転あ切り	(1.8)			5.2	B, I _b
6	カマド周辺	土師器(环)	ロクロ痕	ロクロナデ・ヘラミガキ	右回転あ切り	5.6	14.5		5.2	B ₁
7	堆積土	赤焼(环)	ロクロ痕	ロクロ痕		(3.5)	(15.6)			B ₄
8	カマド内	須恵器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕		(5.0)	(14.2)			C
9	ビット1中	須恵器(环)	ロクロ痕	ロクロ痕		(4.5)	14.9			C
10	カマド周辺	須恵器(高环?)	ロクロ痕	ロクロ痕	回転ヘラキリ	(2.5)			(7.0)	
11	カマド周辺	土師器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕		(8.0)	16.9			
12	堆積土	土師器(甕)	ロクロ痕	ロクロ痕・ハケメテ		(3.8)	(22.2)			B, II _a
13	堆積土	土師器(鉢)	ロクロ痕	ロクロ痕	右回転あ切り	(11.2)			7.4	
14	床	砾石	15×3.3×4.2(cm)							
15	床	砾石	8.6×2.6×1.8(cm)							
16	床	鐵製品(鍔)?	10.1×2.6×0.3(cm)							
17	床	鐵製品(銘)?	5.3×0.6×0.8(cm)							

第115図 BF50竪穴住居跡出土遺物(2)

すかに外反するもので、内面はミガキ、内黒処理されているもの(3・4)と、内面中ごろから底面にかけてヘラミガキが施されているもので内面は褐色を呈しているが内黒がとんだものと思われる(6)がある。

鉢 (第114図11) 口縁部が短く、強く、外反し口唇部が上方へ内傾気味に引き出されているものであり、底部は欠失している。内外ともにロクロ整形である。

須恵器

坏 (第114図8・9) 体部から口縁部にかけて外傾するとみられるもの・破片である。色調は灰白色で軟質である。

高台付坏 (第114図10) 底部のみであり底面に回転ヘラキリ痕がある。中央に厚さ約1mmの粘土を貼付した痕が残っているもので、高台の周囲を内側から押えた跡と推定されるものである。

砥石 (第114図14・15) (14)は、石材が斜長石流紋岩で平面形は中央部が細長いづみ状、断面形は台形に近い棒状のもので、四面とも使用痕が認められる。(15)は、断面形が楕円に近い

棒状のもので石材は淡緑色細粒凝灰岩である。上下二面が特に使用されている他側面にも擦痕が認められる。更に、両端にも明確な使用痕のあるものである。

鉄製品 (第 115 図 16・17) (16)は、残存部分が幅 2.6 cm、長さ 10.1 cm のや、湾曲した長方形状のものであり鎌の一部と推定されるものであり、(17)は、長さ 5.3 cm、径 0.6 × 0.8 cm の楕円を呈し「くの字」状に曲った棒状であり、釘の一部とも推定される。

[堆積土出土遺物] 別表の如く土師器、須恵器、赤焼き土器、縄文土器の破片が出土しているが、実測したものは、土師器壺 2 点、甕 1 点、鉢 1 点、赤焼き土器壺 1 点である。

土師器

壺 (第 114 図 2・5) (2)は、体部が丸味を持って立ち上り口縁部でわずかに外傾するもので、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。(5)は、回転糸切りの底部で、内面にはヘラミガキ、黒色処理されている。

大甕 (第 114 図 12) 口縁部が「くの字」に短く外反し口唇部が上方へ引き出されているもの、口縁破片である。内面にハケメ状のロクロナデ痕がある。

鉢 (第 114 図 13) 底面が回転糸切りによって切り離れている鉢型の土器と思われるもの、下半部である。内外面ともにロクロ整形である。

赤焼き土器

壺 (第 114 図 7) 体部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上り、口唇部がわずかに外傾するものと思われるもの、体部破片である。

その他、破片は、ヘラミガキされた内黒の壺、甕は、比較的薄手の砂の目立つ体部破片、須恵器は、灰白色、灰色の硬質の壺の破片である。その他、床面下の掘り込みから出土した壺の破片は、灰白色、橙色で薄手の体部破片が多い。

⑯ C B 03 壺穴住居跡 (第 116 図)

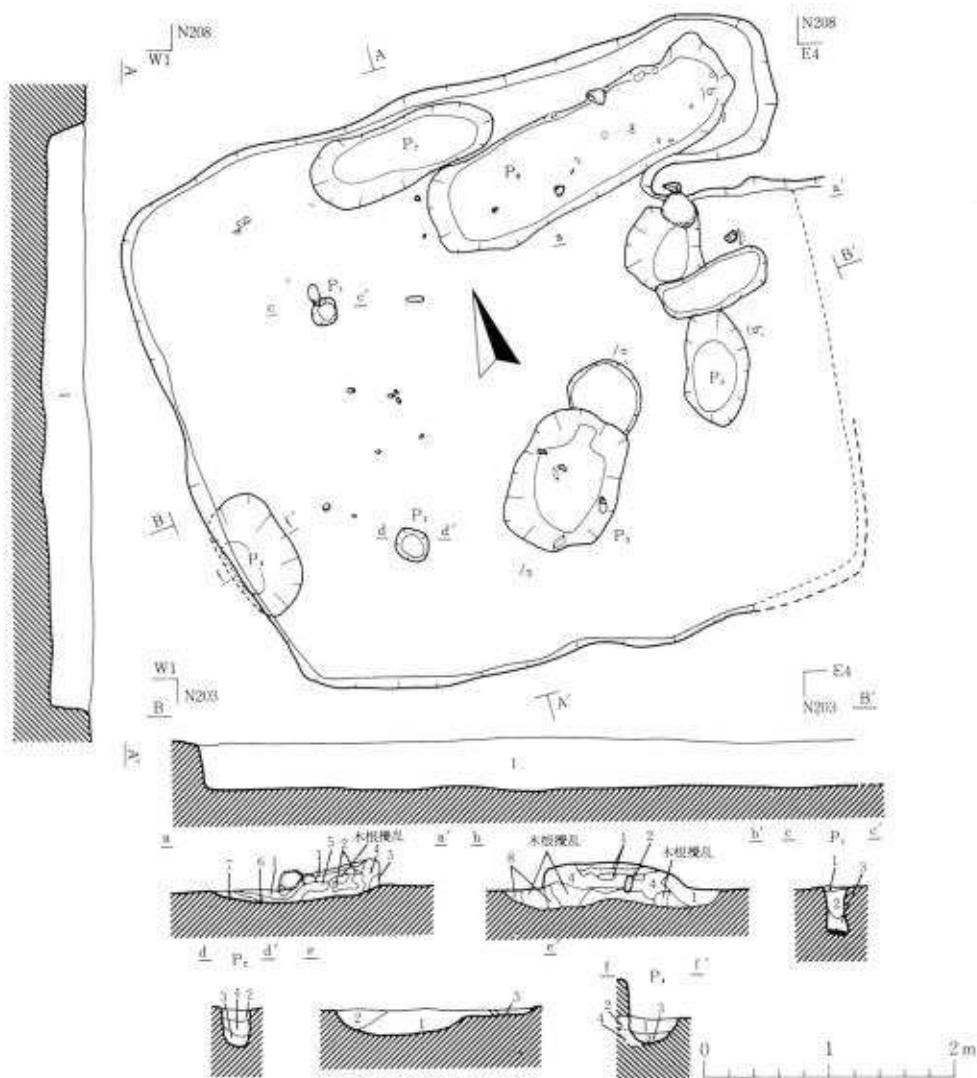
[遺構の確認] C 調査区のほぼ中央附近、C A 12 壺穴住居跡 (縄文) の東約 5 m、B H 56 壺穴住居跡の南西約 8 m の地点の地山面で検出したものである。

[重複] 認められない。

[平面形・規模] 平面形は、東壁が擾乱によりほとんど破壊されており不明であるが、東西がやや長い隅丸方形と推定される。規模は、長軸 (東西) 約 5.5 m、短軸 (南北) 約 4.65 m であり、床面積は、約 24.4 m² である。又、南北壁の中点を結ぶ軸線は N - 0° - E W である。

[堆積土] 黒色の腐植土 1 層のみである。木根、玉石等が多く含まれ擾乱されている部分が多い。

[壁] 地山をそのまま、壁としているもので、東壁から南東隅にかけて擾乱のため破壊されているが他は残存壁高が 20~30 cm と比較的良好で立ち上りもしっかりしているところが多い。



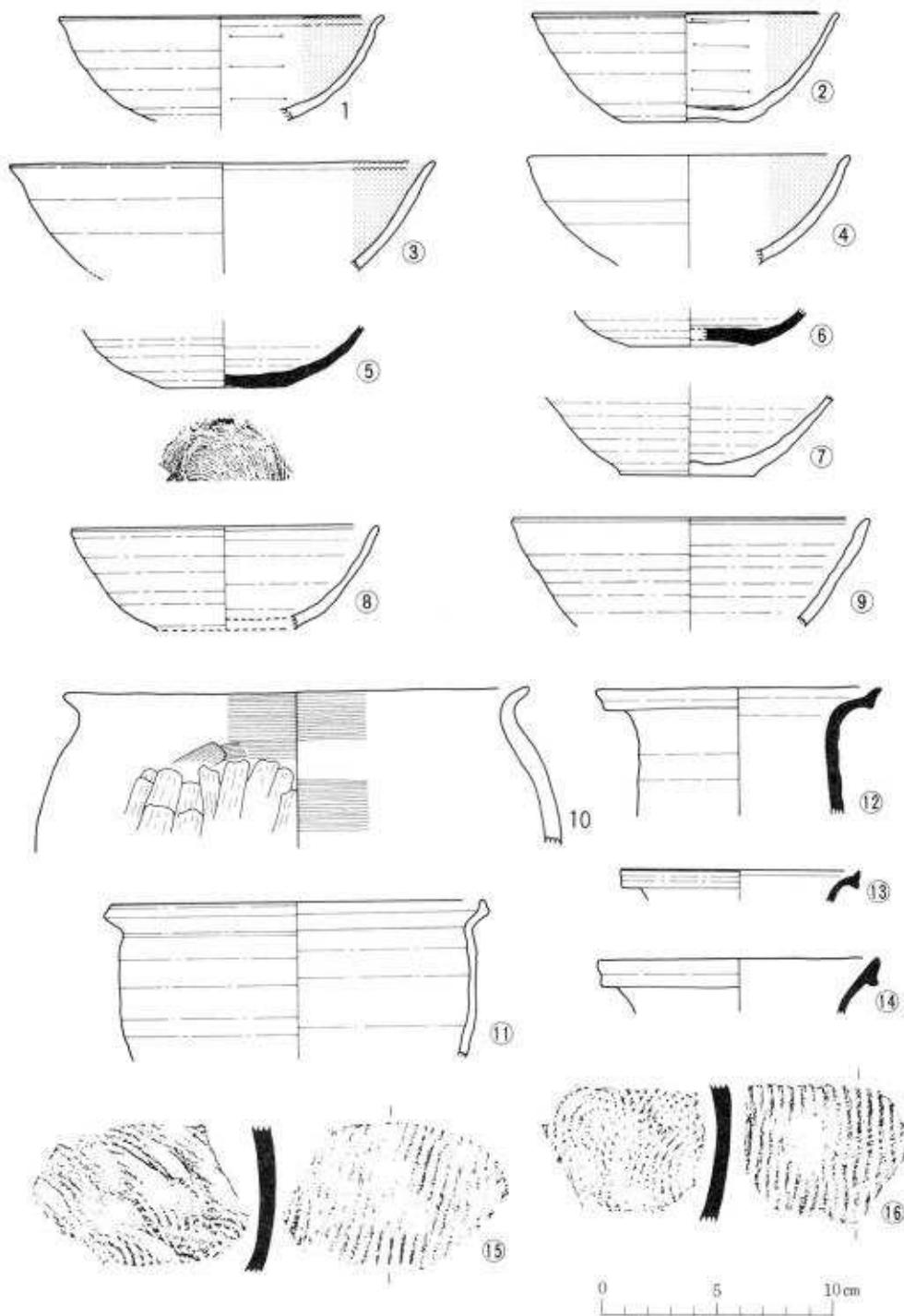
堆積土

層	土色	土性	備	考
1	7.5YR 2/1 黒褐色	腐植土	木根が多く、玉石等も入り擾乱されている	

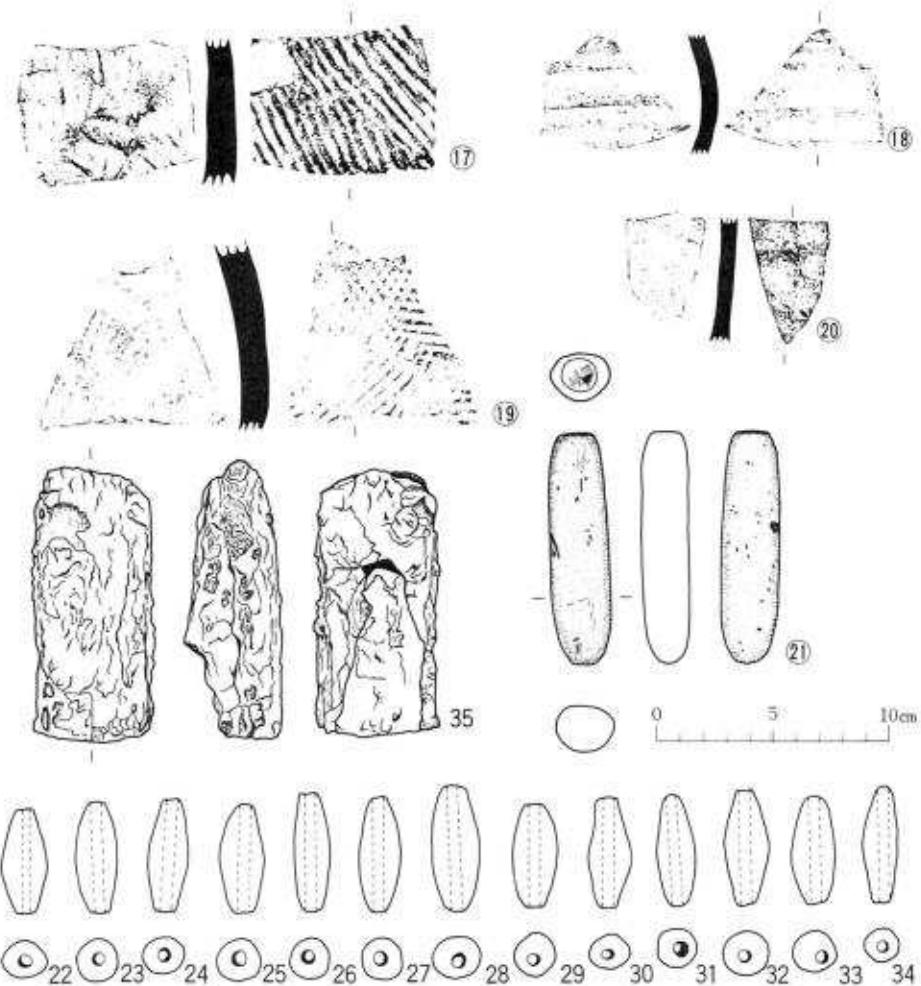
堆積土(カマド・煙道)

層	土色	土性	備	考
1	10 YR 2/2 黒褐色	腐植土	地上上、炭化物若干含まれる	
2	2.5YR 4/4 オリーブ褐色	シルト		
3	10 YR 2/2 黒褐色	腐植土	地山の土若干混じる	
4	5 YR 2/3 黒褐色	腐植土	燒土多量に含まれる	
5	5 YR 4/8 赤褐色	燒土		
6	7.5YR 4/3 暗褐色	シルト		
7	2.5YR 4/3 オリーブ褐色	シルト		
8	2.5YR 4/4 オリーブ褐色	シルト		

第116図 CB03竪穴住居跡



第117図 CB03竪穴住居跡出土遺物(1)



第118図 CB03竪穴住居跡出土遺物(2)

出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	調査		底面	器高	口様	体様	底様	分類番号
			外表面	内表面						
1	カマ下内	土師器(环)	ロクロ瓶	ヘラミガキ(内黒)?		(14.5)	(14.1)			B
2	堆積土	土師器(环)	ロクロ瓶	ヘラミガキ(内黒)		4.7	13.4		5.4	B ₂ IIb
3	堆積土	土師器(环)	ロクロ瓶	ヘラミガキ(内黒)		(14.8)	(18.4)			B
4	堆積土	土師器(环)	ロクロ瓶	磨滅(内黒)?		(5.2)	(14.0)			B
5	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転系切り	(2.6)			5.2	C ₁ IIb
6	堆積土	須恵器(环)	ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転系切り	(1.5)			(5.4)	C
7	床面赤燒き		ロクロ瓶	ロクロ瓶	右回転系切り	(3.4)			(5.9)	B ₄
8	堆積土	赤燒き	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(4.8)	(15.6)			B ₄
9	堆積土	赤燒き	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(4.4)	(13.4)			B ₄
10	ビン土	土師器(鉢)	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ		(6.4)	(20.0)			
11	堆積土	土師器(鉢)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(6.8)	(16.7)			
12	床面須恵器(盃)		ロクロ瓶	ロクロ瓶		(5.5)	(12.4)			
13	堆積土	須恵器(盃)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(1.4)	(10.5)			
14	堆積土	須恵器(盃)	ロクロ瓶	ロクロ瓶		(1.2)	(12.2)			
15	堆積土	須恵器(盃)		(拓本)						
16	堆積土	須恵器(盃)		(拓本)						

17	堆積土	須恵器(裏)		(拓本)				
18	堆積土	須恵器(裏)		(拓本)				
19	堆積土	須恵器(裏)		(拓本)				
20	堆積土	須恵器(裏)		(拓本)				
21	堆積土	須恵器(裏)		(拓本)				
22	ピット土	鉢	長さ 4.4cm	最大径 1.9cm				
23	ピット土	鉢	長さ 4.7cm	最大径 1.8cm				
24	床面土	鉢	長さ 4.7cm	最大径 1.8cm				
25	床面土	鉢	長さ 4.7cm	最大径 2.0cm				
26	床面土	鉢	長さ 4.1cm	最大径 1.6cm				
27	床面土	鉢	長さ 5.0cm	最大径 1.8cm				
28	床面土	鉢	長さ 5.4cm	最大径 2.1cm				
29	床面土	鉢	長さ 4.3cm	最大径 1.9cm				
30	床面土	鉢	長さ 4.7cm	最大径 1.9cm				
31	床面土	鉢	長さ 4.8cm	最大径 1.7cm				
32	床面土	鉢	長さ 5.0cm	最大径 2.0cm				
33	床面土	鉢	長さ 4.7cm	最大径 1.9cm				
34	床面土	鉢	長さ 4.9cm	最大径 1.5cm				
35	床面鉄	斧	長さ 11.7cm	幅5.0cm、最大高4.2cm				
36	P ₁ ピット	磁石状	長さ 10.0cm	径 2.5cm				

〔床〕 地山を床としているもので本来は平坦な床面であったと推定されるが、床全体に杉の根が入りこんでおり、検出された床面は凹凸の多い床面となっている。

〔柱穴〕 床面上よりP₁～P₅の大小5個のピットが検出されているが、そのうち、西壁の内側約1.4mの位置に南北に並ぶP₁、P₂のピットが深さ、配置等からみてそれに該当するものと思われる。なお、これに対応するものは床面の擾乱が著しいこともあり確認されなかった。

〔カマド〕 東壁や、北寄りに付設されていたものと思われる。燃焼部は左側壁が舌状に残存し、右側壁は、燃焼部の奥壁から煙道部にかけて完全に破壊されているため島状に残っているのみである。燃焼部内には皿状の浅い落ち込みが存在する。

〔その他の施設〕 カマド右脇に径約60×34cmの平面形が楕円形で深さ約20cm断面が深皿状のピットP₆が擾乱部分の下より検出されており貯蔵穴状ピットに該当するものと推定されるものである。その他、P₃、P₄とそれぞれ深さが最大20cm前後の深皿状のピットが西壁際及び中央や、南壁寄りの床面に存在した。それから、カマド北脇、北壁沿いの床面下には、幅約70cm、深さ約10cmの長楕円状、幅約50cm、深さ約10cmの楕円状の掘り込みが認められた。位置的に見て排水の機能をもったものと推定される。

〔年代決定資料〕 住居の使用年代及び構築等と決める資料としては、カマド内やピット内及び床面上より出土の土師器、須恵器、赤焼き土器、鉄製品、土製品等がある。

土師器 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

壺（117図1） 体部が丸味をもって立ち上り口縁部が外反するもので底部は欠失している。調整技法は外面ロクロ痕、内面ヘラミガキ、内黒処理されている。

鉢（第117図10） 口縁部が単純に短く外反し最大径が体部に位置すると推定される口縁部破片である。調整技法は、外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面はナデである。

須恵器

壺 (第 117 図 12) 口縁部が強く短く外反し、口唇部が外方に強く引き出されている長頸壺と推定されるもの・頸部の破片である。

赤焼き土器

壺 (第 117 図 7) 底部の切り離しが回転糸切りで、底部より体部にかけて外傾する赤褐色の軟質の壺である。

〔その他の出土品〕

土鍤 (第 118 図 22~34) いずれも床面や P₆ の堆積土中よりの出土である。最大長 5.4~4.0 cm、最大径 2.1~1.5 cm で、長軸に沿って中央部には、径約 0.4 cm の貫通孔が穿たれている。

鉄斧 (第 118 図 35) 長さ 11.7 cm、幅 5.0 cm のもので、柄を差しこんだと推定されるところは内側に鉄板をまげてある。銹化は進んでいるが残存状態は良好である。

砥石 (第 118 図 36) 石材は濃緑色凝灰岩製で、長さ 10 cm、径 2.5 cm、断面が円形の棒状を呈し、その一方の先端部のみを扁平に使用しているものである。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く多量の土師器、須恵器、赤焼き土器、縄文土器等の破片が出士している。

土師器 製作に際しロクロ使用のものである。

壺 (第 117 図 2~4) 体部から底部にかけてや・丸味をもって立ち上り、口縁部でわずかに外反するものである。(2)は、底面の切り離し技法は回転糸切り無調整である。調整技法はいずれも内面はヘラミガキ、内黒処理されたものである。

鉢 (第 117 図 1) 口縁部が「くの字」に外反し、口唇部が上方へ強く引き出されているものであり内外面ともにロクロ痕のものである。

須恵器

壺 (第 118 図 5~6) いずれも、ゆるやかに内窓気味に立ち上ると推定されるもの・底部である。底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

甕 (第 117・118 図 13~20) (13)は口縁部が強く外反し口唇部が上下に引き出されている灰釉のみられる口縁部片、(14)は、口縁部が外反し、口唇部が下方へ引き出されているもの・口縁部片である。(15~20)は、外面がタタキメ文、内面青海波文、ヘラ状の当て具痕のあるもの、内外面ともにナデ痕のみられるもの・破片である。

赤焼き土器

壺 (第 117 図 8・9) 体部から口縁部にかけて直線的に外反するもの(8)と、丸味をもって口縁部まで立ち上るもの(9)がある。

その他、打製石斧 (第 54 図)、石鏃 (第 53 図) 等が出土している。

⑩DA24竪穴住居跡（第119図）

〔遺構の確認〕 段丘の南縁近く、D調査区の南西端G18竪穴住居跡の南西約3mの地山面で確認したものである。

〔重複〕 床面下、北東隅にはD A21(No.1)ビットが、南西隅にはD B24ビット(No.1)が存在し、西、南壁によって切られた形になっている。これらのビットは、いずれも縄文時代に属するとみられるビットである。

〔平面形、規模〕 平面形はほぼ正方形に近い形を呈し、（一部、東壁が確定せず推定線ではあるが）一辺がいずれも約3.6mである。又、床面積は約13.0m²である。なお、南北壁の中点を結ぶ軸線はN-22°-Eである。

〔堆積土〕 炭化物、焼土、地山のシルト等の含まれ具合によって細かくは8層に分けられるが、本質的にはいずれも黒褐色のシルト質の土であり、大別するとⅢ層に分けられる。Ⅰ層は、壁際を除く中央附近に堆積しているもので大部分が床面に達していない層であり、Ⅱ層は、主として壁際より中央に向って堆積しているもの、Ⅲ層は床面に堆積している焼土である。

〔壁〕 地山をそのまま壁としているものであるが、縄文時代のビットと重複関係にある北東、南東隅は壁が明確でない。壁の立ち上りは全般的に緩かであり、壁高は最も良好な南壁部分で約24cmである。

〔床〕 地山のシルトを堀り下げ直接床としているもので、縄文時代のビット上に特に貼床を施した様子は認められない。

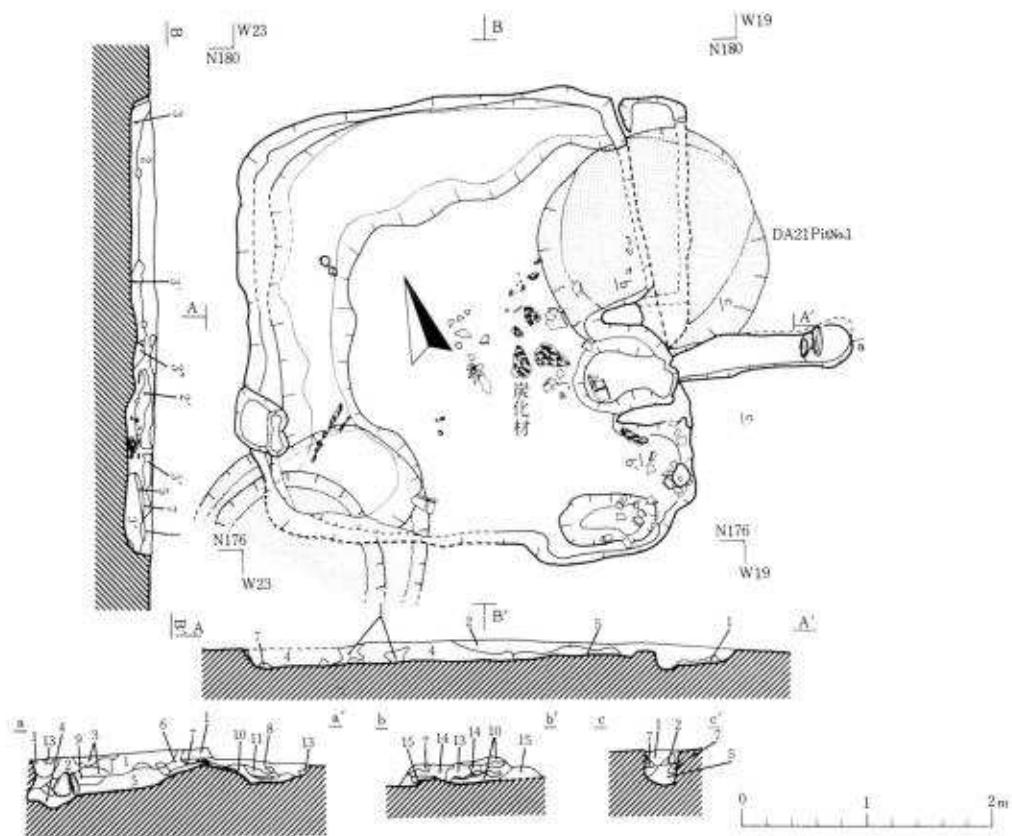
〔炭化米の出土状況〕 カマド前及び北西隅床面には炭化材が散在しており、そのうちカマド前に散在していた炭化材(ナラ)の下より炭化米の塊りが出土している。

〔柱穴〕 床面上から柱穴とみられるビットは発見されなかった。

〔カマド〕 東壁中央よりやや南に付設されていたものである。本体は天井部分が既になく、西側壁も削平され舌状に残っていたものである。燃焼部は床面より僅かに堀りくぼめられ皿状を呈している。燃焼部底面から煙道部へは、奥壁に向って一旦緩い傾斜で上り、その後更に緩い傾斜で下り煙出部へ至る。煙出部には特にビットは認められない。煙道と煙出部の境目には楕円状の川原石が2個煙道を防ぐ形で発見されている。カマドの長軸方向はN-115°-Eである。

〔その他の施設〕 カマドの右側、住居の南東隅に東西に長い楕円状の深さ7~10cmのビットが発見されており底面より土師器の壊、甕の破片が出土している。その他西壁北東寄りにも皿状の浅いビットが認められている。又、北壁、西壁沿いに幅約60cm、深さ10cm内外の皿状の溝が床面下にまわっており排水的な機能をもたせたものと考えられる。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内や煙道部内及び、床面等より出土した土師器、須恵器等がある。



堆積土

大区分	層	土色	土性	備	考
Ⅰ	1	10 YR 2/2 黒褐色	壤土	上部砂片を若干含む	
	2	10 YR 2/2 黒褐色	壤土	炭化物、燒土を若干含む	
	2'	10 YR 2/2 黒褐色	壤土	2層より燒土を多く含む	
	3	10 YR 2/2 黒褐色	壤土	炭化物、燒土地山のシルトブロックを含む	
	3'	10 YR 2/3 黒褐色	壤土	3層より炭化物、燒土の塊にが多い	
Ⅱ	3'	10 YR 2/3 黒褐色	壤土	3層より地山のシルトのブロックが多い	
	4	10 YR 4/4 褐色	シルト		
Ⅲ	5	5 YR 4/6 赤褐色	燒土		

堆積土(カマド・煙道部)

層	土色	土性	備	考
1	10 YR 3/2 黒褐色	壤土	燒土、炭化物を若干含む	
2	10 YR 3/2 黒褐色	壤土	1層より黒かい	
3	7.5 YR 4/4 褐色	シルト		
4	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	燒土若干含まれる	
5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物若干含まれる	
6	2.5 YR 4/6 オリーブ褐色	シルト	燒土若干含まれる	
7	10 YR 2/2 黒褐色	シルト		
8	7.5 YR 3/4 褐色	シルト		
9	5 YR 3/3 暗赤褐色	燒土		
10	5 YR 4/6 布褐色	燒土	炭化物を含む	
11	5 YR 3/6 暗赤褐色	燒土		
12	5 YR 5/8 明赤褐色	燒土		
13	5 YR 3/4 暗赤褐色	燒土		
14	5 YR 3/4 暗赤褐色	燒土	炭化物を含む	
15	10 YR 2/2 黒褐色	シルト		
16	10 YR 4/3 深い黄褐色	シルト	燒土、炭化物を含む	
17	10 YR 4/8 黄褐色	シルト	燒土を若干含む	

第119図 DA24竪穴住居跡

土師器 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

坏 (第120図1～3) (1・2)は、体部は丸味をもって立ち上り口縁部が直線的なものであり、(3)は、同じく口縁部がわずかに外反するものである。調整技法は外面(1)は、底部周辺にヘラケズリが認められるが他は、ロクロ痕のみである。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りである。

赤焼き土器

坏 (第120図9) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾すると推定されるものの破片である。赤褐色を呈し軟質である。

甕 (第120図11～13) (11・10)は、口縁部が単純に短く「く」の字状に外反し、口唇部は軽く上下につまみ出しているもの、(12)は、口縁部が短く「く」の字に外反し、口唇部が強く下方へつまみ出されているもの、(13)は、口縁部が極端に短く「く」の字に外反するものである。(11・13)は、体部外面にヘラケズリが施されている。

土壙 (第120図18・19) 体部から口縁部にかけて丸味をもち口縁部がわずかに外反し、口唇部が上下につまみ出されているものである。外面下半にナデ、ヘラケズリ、内面にはナデが施されているものである。

【堆積土出土遺物】 別表の如く多くの土師器、須恵器、赤焼き土器の破片及び石匙、打製石斧等の石器が出土している。

土師器 製作に際しいずれもロクロ使用のものである。

坏 (第120図4～7) いずれも体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上るもので(4・5)は口縁部にかけて直線的になるのに対して(6)は、口縁部がわずかに外反するものである。調整技法は外面(5)の底部にヘラケズリが施されている。内面は、いずれもヘラミガキ、黒色処理されている。底部の切り離しは、(5)がヘラキリの他は、回転糸切り無調整である。

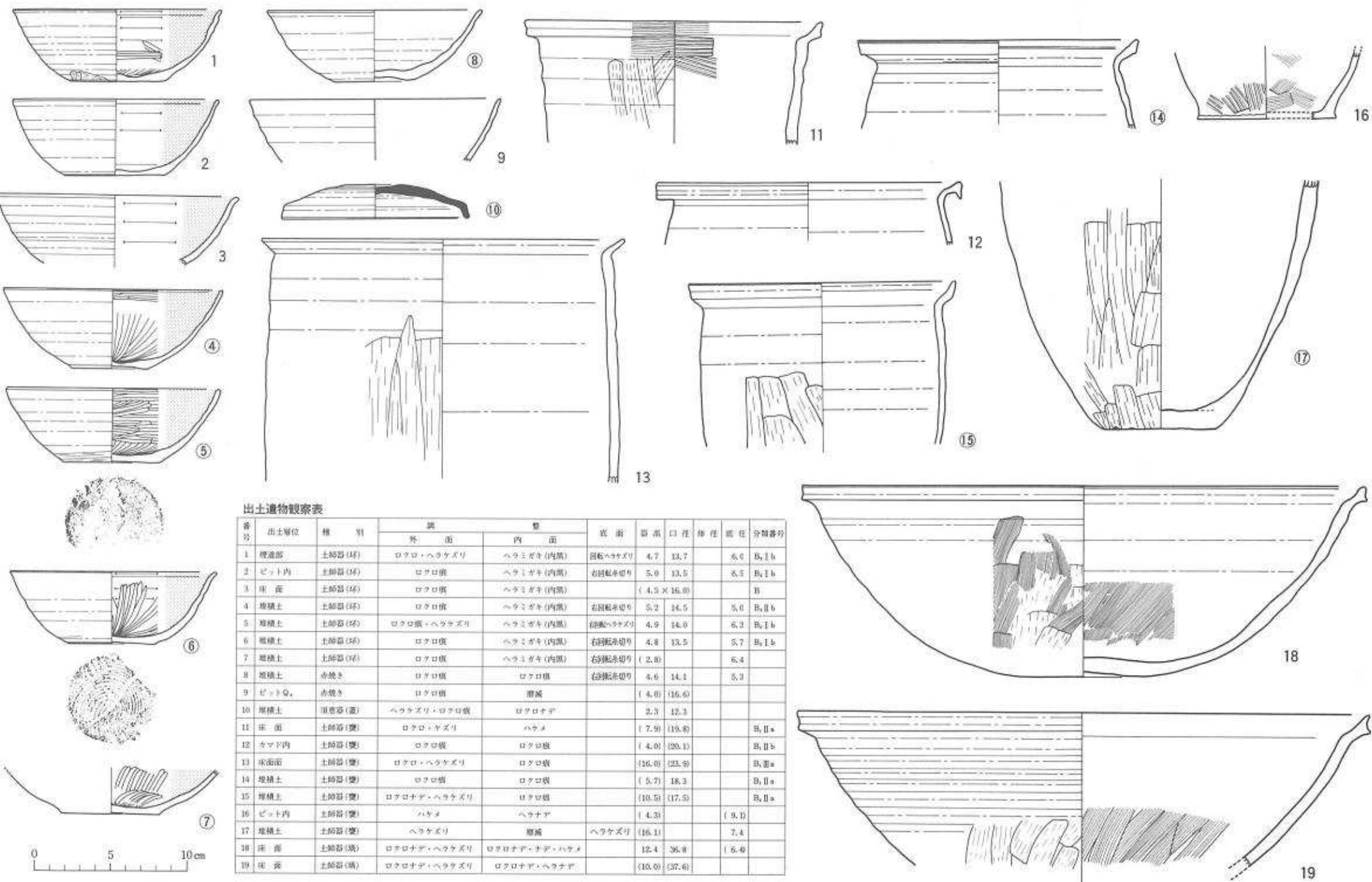
赤焼き土器 (第120図8) 体部から口縁部にかけてやや丸味をもって直線的に立ち上るものである。赤褐色を呈し軟質である。

甕 (第120図15～17) (15)は、口縁部が「く」の字に外反し、口唇部が上方へつまみ出されているもの(16)は、やはり口縁部が「く」の字に外反し、口唇部が上方へ長く引き出されているものである。(15)の体部外面にヘラケズリが施されている。(17)は、体部外面にヘラケズリの施されている下半部である。

須恵器

蓋 (第120図10) つまみ部が欠失しているもので、天井部は、ヘラケズリがなされているが、内面はロクロナデのみである。

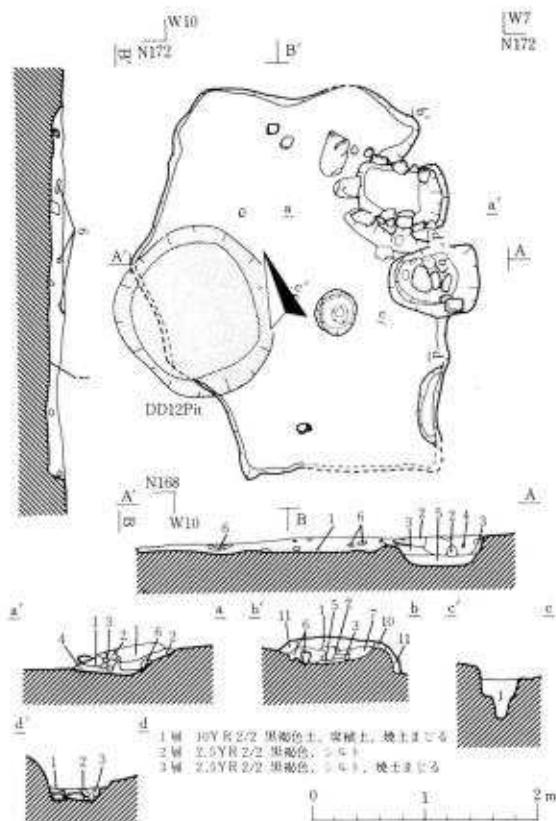
石匙(第53図)打製石斧(第54図)の他、縄文土器、赤焼き土器等の破片が多く出土している。



第120図 DA24竪穴住居跡出土遺物

② DC12竪穴住居跡（第121図）

【遺構の確認】 D調査区底位段丘上の最南端に位置するものでD B09竪穴住居跡の南約2m、D D15竪穴状遺構（縄文）と隣接した地点の地山面で検出したものである。



堆積土

層	上 層	土 性	標 考
1	10YR 2/1 黒色	腐植土	粒状バミスブロック状に焼土、炭化物若干
2	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	燒土器片、焼土、炭化物若干含む
3	10YR 3/2 黒褐色	腐植土	
4	10YR 7/1 黒色	腐植土	
5	10YR 2/2 黒色	砂質粘土	焼土、炭化物若干含む
6	2.5YR 7/6 明黄色	珪土	隆下火山灰

堆積土(カマド部)

層	上 層	土 性	標 考
1	7.5YR 4/3 褐色	シルト	上層器片、焼土炭化物含まれる
2	5 YR 4/6 赤褐色	シルト	焼土ブロック状に上層器片、炭化物
3	5 YR 3/2 赤褐色	シルト	焼土炭化物若干含まれる
4	7.5YR 3/1 黒褐色	シルト	焼土若干含まれる
5	10YR 4/4 褐色	シルト	
6	10YR 4/3 に赤い黄褐色	シルト	焼土されている地上
7	5 YR 4/4 に赤い褐色	シルト	焼土、炭化物若干含まれる
8	7.5YR 2/4 黑色	腐植土	
9	2.5YR 7/5 明黄色	珪土	隆下火山灰
10	10YR 5/3 に赤い黄褐色	シルト	炭化物若干含まれる
11	10YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土、炭化物若干含まれる

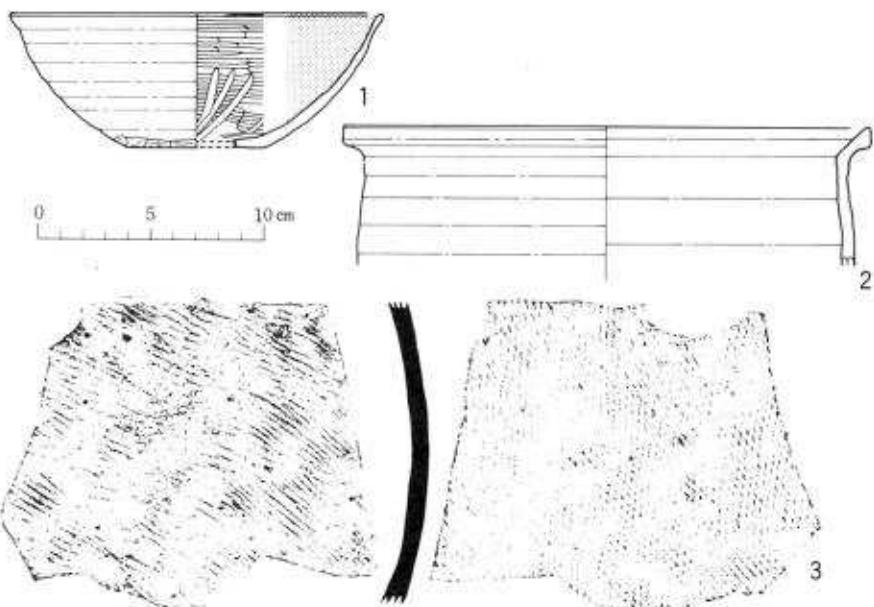
第121図 DC12竪穴住居跡

【重複】 D D12ピットが西側床下に存在し西壁の一部が切り合い関係にある。

【平面形・規模】 平面形は南壁の一部が直線的であるが他は出入りが多く一定しない不整形である。規模は、長軸(南北)約3.3m、短軸(東西)約2.2mで床面積は約9.2m²である。南北壁が一定していないので正確さに欠けるが中点の軸線はN-20°-Eといえよう。

【堆積土】 大略は、黒褐色の腐植土1層であり、粉状バミス(火山灰)や地山の黄褐色シルトが小プロック状に入り込んでいる。

【壁】 地山をそのまま、壁としているが、南壁の一部が残存状態がや、良く約20cmを計る他はいずれも皿状の立ち上りを呈している。又、壁面は直線的なところが少く緩かに蛇行しており明確でないところが多い。



出土遺物観察表

番号	出土層位	種別	真 横		底面	器高	口径	腹 横	底 横	分類番号
			外 面	内 面						
1. カマド内	土師器(瓦)	ロクロ窓・手格ハケ瓦アリ	ハナミガキ(内面)	ハタケメリ	5.9	16.6			(6.2)	B.Ⅱb
2. カマド内	土師器(甕)	口子の窓	ロクロ窓		16.3	123.4				B.Ⅱb
3. 推積土	瓦片(甕)	ダダキメ	ダダキメ(瓦本)							

第122図 DC12竪穴住居跡出土遺物

〔床〕 地山をそのまま、床面とし比較的平坦で固い。ピットの上面を特に貼り床した様子は認められない。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁北寄りに西側壁が多段残存しており、幅約50cm、長さ約80cm、深さ約15cmの一部が住居外に延びる舌状の燃焼部が存在した。燃焼部の周辺には、人頭大の川原石が一見、並べたような形で多数存在した。煙道は認められない。

〔その他の施設〕 カマドの右側に径約80×60cm、深さが最大20cm前後の平面形が舌状のピットが存在し、その中に、カマド周辺に並んでいたと同様の川原石が入っていた。又、中央よりや、南寄りの床面には、上場の径約40cm、下場径約12cm、上方よりの深さ約40cmの断面形が独楽状のピットが存在した。これは、その形態からロクロピットといわれているものに類似したものである。

〔年代決定資料〕 住居の構築及使用等の年代を決定する資料としては、カマド内出土の土師器がある。カマド内出土の甕片は、いずれも二次加熱を受けたもろいものが多い。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

壺 (第 122 図 1) 体部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上るもので、外面底部近くは手持ヘラケズリされている。内面はヘラミガキ、内黒処理されている。

甕 (第 122 図 2) 口縁部が短く「くの字」に外反し、口唇部が上下にわずかにつまみ出されているものである。

[堆積土出土遺物] 別表の如く土師器、須恵器の壺、甕、赤焼き土器の壺の破片が出土している。(第122図3)は、内外面にタタキメのある大甕と推定されるもの・破片である。

② BG 59 竪穴住居跡 (第 123 図)

[遺構の確認] B 調査区の東、B D 62 竪穴住居跡の南約 1m、B F 56 挖立柱建物跡のすぐ東側、B H 56 竪穴住居跡を南壁の一部が切る形で検出されたものである。

(重複) 南壁の一部が B H 56 竪穴住居跡の北壁の一部を切っている。

[堆積土] 細かく観察すると 6 層に分けられるが IV 層に大別される。I 層は、黒褐色の腐植土で住居の中央附近の上面に堆積し床面には達していない。II 層は、I 層と類似のものでやはり一部の壁際を除き住居全域を覆っているが床面には達していない。III 層は、黒褐色のシルトで住居全体の床面に堆積している。IV 層は、部分的に壁際・床面に堆積しているものである。

(壁) 地山をそのまま、壁としているもので、残存状態も良好である。最も良好な西壁で約 50 cm を計る。

(床) 一部粗掘時の掘りすぎがあり南西隅は明確でないが、西南壁沿いに幅 60~70cm の範囲にわたって 5~10cm の貼床部分が存在した。他には認められない。

(柱穴) 認められない。

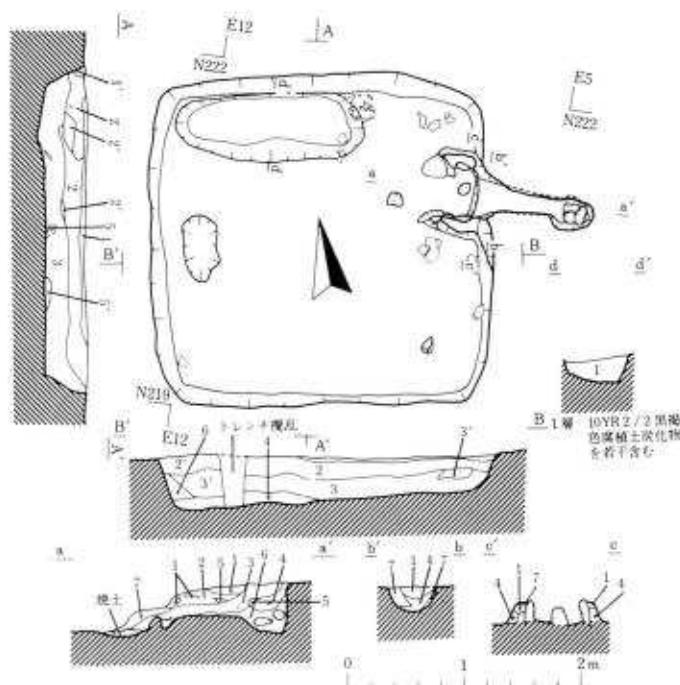
[カマド] 東壁や、北寄りに付設されている。両側壁内、左側は少し乱れているが内側に川原石を一列に並べ立ててシルトの側壁をおさえたものである。又、燃焼部奥壁中央附近には径約 20cm の支脚石と思われる川原石が埋められていた。燃焼部の底面は熱をうけて固い。煙道部は長さ約 120cm、幅約 20cm の溝状で奥壁で約 10cm 上り、傾斜もなく煙出部へとのびている。煙出部には、煙道底面より約 10cm 下った径約 26cm のビットが存在する。検出面からの深さは約 40cm である。なお、煙出部には、人頭大の川原石が 3 個埋まっていた。

[その他の施設] 北壁沿いの床面下に径約 160 × 60cm で深さが約 20cm の楕円状のビットが存在した。

[年代決定資料] 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面上より出土した土師器、須恵器等がある。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

壺 (第 124 図 1~3) いずれも体部は丸味をもち口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上るも



堆積土

大別層	土色	土性	備考
I	1 10YR 2/2 黒褐色	腐植土	
	1' 10YR 2/2 黒褐色	腐植土	1層より少し柔らかい
II	2 10YR 3/2 黒褐色	シルト	
	2' 10YR 2/3 黒褐色	シルト	2層より少し柔らかい
III	3 10YR 2/2 黒褐色	シルト	土師器、須恵器を含む
	3' 10YR 2/2 黒褐色	シルト	
IV	4 10YR 4/4 褐色	シルト	
	5 5YR 5/8 明赤褐色	焼土	
	6 10YR 2/1 黒色	腐植土	

カド・煙道堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 4/3 深い黄褐色	シルト	
1'	10YR 4/2 黄褐色	シルト	
2	10YR 2/3 黑褐色	シルト	
3	10YR 3/3 晴褐色	シルト	焼土を含む
4	10YR 2/2 黑褐色	シルト	
5	10YR 4/3 黑褐色	シルト	
6	10YR 4/3 深い黄褐色	シルト	黑色腐植土混じる
7	10YR 4/3 深い黄褐色	シルト	焼土を含む

第123図 BG59堅穴住居跡

[堆積土出土遺物] 別表の如く、少量の土師器、須恵器の破片、土錘が出土している。

須恵器

壺(第124図6・7) 底部切り離しが回転糸切り無調整のものである。

土錘(第124図9~11) 堆積土のⅢ層から出土したもので長さ4.5~4.9cm、最大径1.6~1.7cmで中央に径約0.4cmの貫通孔を穿っているものである。

のである。内面は、ヘラミガキ、黒色処理されているが(2)は、二次的火をうけてそれがとんだものと思われるものである。底部の切り離しはいずれも回転糸切り無調整である。

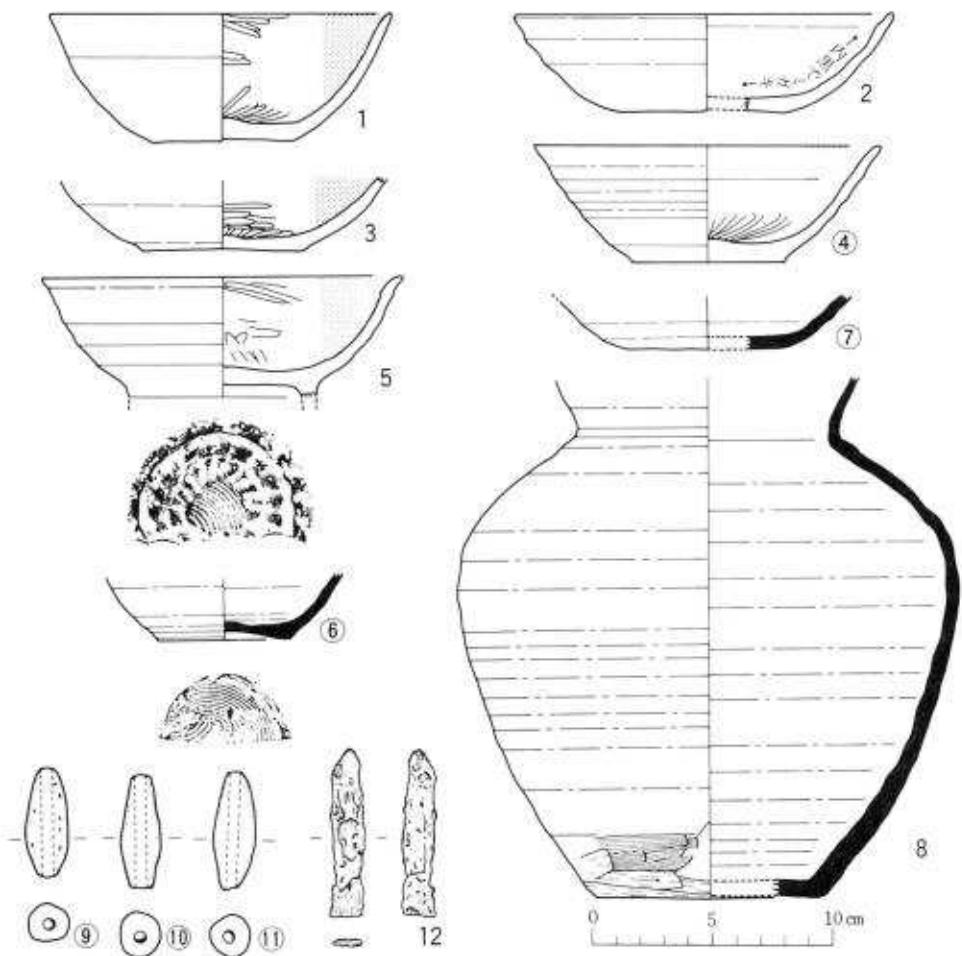
高台付壺(第124図5)

体部が丸味をもち口縁部でわずかに外反するもので、底部に高台部の欠落痕の残っているものである。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。底面は回転糸切りによって切り離し後、高台付着の際菊花状に調整したことが伺われる。

須恵器

甕(第124図8) 口縁部は欠失しているが、口縁部が外反し肩部に最大径を有するものである。体部外面下端にナデ、ヘラケズリが施されている。底面はヘラケズリされている。

鉄製品(第124図12) 長さ6.8cm、幅1.3cmの刀子の一部と推定されるものである。



出土遺物観察表

番号	出土場所	種別	調査箇		表面	裏面	口径	体積	底径	分類
			外表面	内底						
1	床面	土器底(56)	口クロ楕	ヘリミガキ(内里)	回転式切り	5.3	13.9		5.7	B ₁ b
2	床面	土器底(56)	口クロ楕	ヘリミガキ 二木加熱(内里)？	回転式切り	4.9	15.3		7.4	B ₁ b
3	床面	土器底(56)	口クロ楕	ヘリミガキ(内里)	回転式切り	13.0			6.7	B ₂ b
4	堆積土	土器底(56)	口ナロ楕	ロアロ・ヘリミガキ(内里)	回転式切り	4.9	14.4		6.2	B ₁ 1a
5	床面	土器底(高台付)	口クロ楕	ヘリミガキ(二次焼物)	左切右後 角花状	5.0	(15.3)		7.8	
6	堆積土	泥炭底(56)	口クロ楕	口クロ楕	右回転式切り	2.7			5.5	C
7	堆積土	泥炭底(56)	口クロ楕	口クロ楕	回転式切り	2.0			5.6	
8	床面	泥炭底(56)	口クロ・ヘリミガキ	口クロ楕	ヘリミガキ(21.4)	(12.5)	26.3	10.6		
9	堆積土	土跡	長さ4.5cm							
10	堆積土	土跡	長さ4.7cm							
11	堆積土	土跡	長さ4.9cm							
12	床面	刀子？	長さ6.8cm	幅1.3cm 厚さ0.1cm						

第124図 BG59竪穴住居跡出土遺物

②BH12竪穴住居跡（第125図）

〔遺構の確認〕 B調査区のほぼ中央付近、BF21竪穴住居跡の南東約2.2m、CA12竪穴住居跡（縄文）の北約5mの地山面で確認したものである。

〔重複〕 認められない。

〔平面形、規模〕 平面形は、方形である。規模は、長軸（南北）約4.6m、短軸（東西）約4.2mであり、床面積は、約19.3m²である。南北壁の中点の軸線は、N-4°-Wである。

〔堆積土〕 4層に細別される。1層は、黒色の腐植土で壁際を除く住居の中央付近にレンズ状に堆積し、床面には達していない。粉状バミス（火山灰）が小ブロックで混じる。2層は、黒褐色のシルトで壁際を除く住居全体の床面に堆積している。3・4層は、黒色、暗褐色のシルトで壁際から中央に向って床面に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま壁としており直線的であり、立ち上りも比較的急である。最も良好な東・西壁は、壁高約40cmを計る。

〔床面〕 ほぼ平坦である。人頭大の川原石が南半にかけての床面に散在していた。

〔柱穴〕 認められない。

〔カマド〕 東壁北寄りに付設されている。両側壁は、ほとんど残存しておらず、燃焼部と思われるところに径約130×70cmの楕円状で深さ約20cmの深皿状のピットが存在したのみである。煙道は、燃焼部奥壁で約20cmの段差をもって上り、それから緩かな下り傾斜をもって煙出部へ至る。煙出部には煙道底面より約10cm低い径約30cmのピットが存在した。なお、煙道の長さは約170cmで幅約40cmの溝状のものである。カマドの軸線はN-93°-Eである。

〔その他の施設〕 床面の中央西寄り及び中央南寄りに径約100×90cm、径約90×80cmの深皿状のピットが存在する。少量の炭化物、焼土の混じった堆積土である。

〔年代決定次資〕 住居の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、カマド内出土の甕の破片があるのみである。

土師器 いずれも製作に際しロクロ使用のものである。

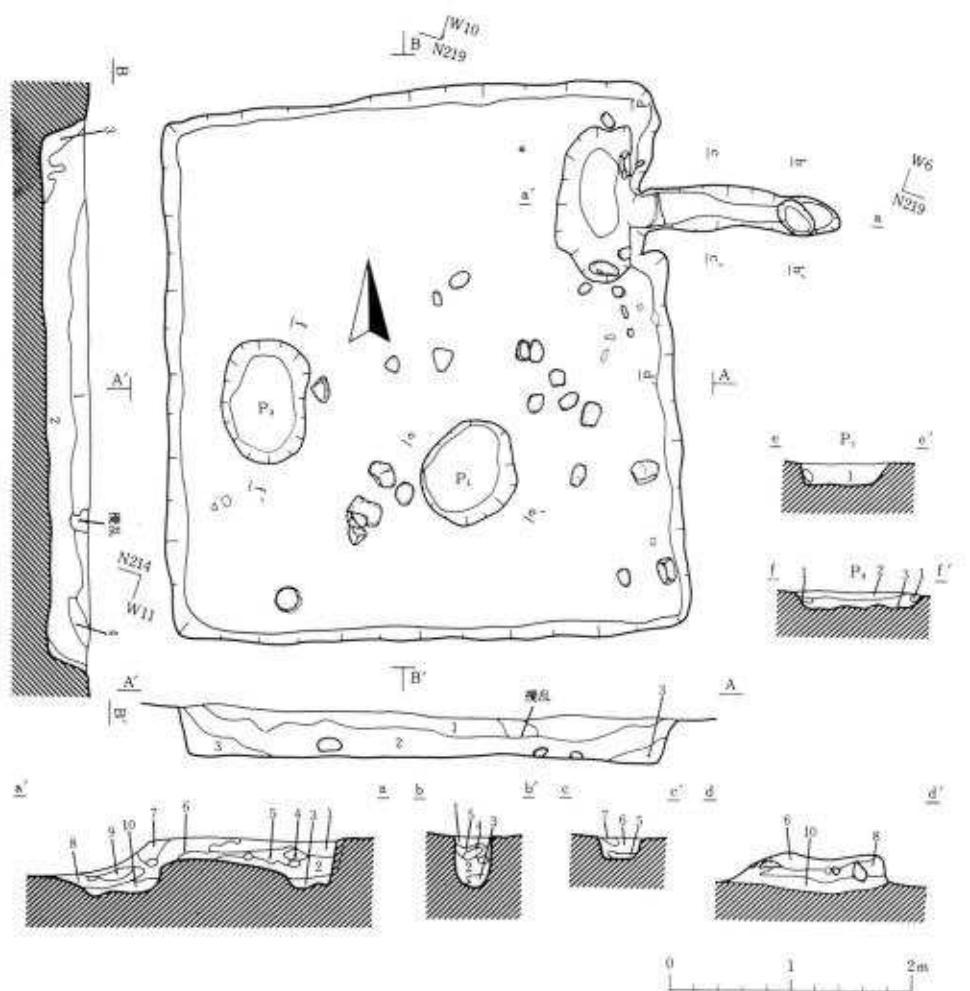
甕（第126図6・7） (6)は口縁部が短く外反し、口唇部が少し長くつまみ出されているもの、(7)は口縁部が短く外反し、口唇部が短く上下につまみ出されているものである。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、土師器、須恵器、縄文土器片がかなりの数出土している。

須恵器

壺（第126図1～4） (1・3)は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものであり、(2・4)は、体部から口縁部にかけて丸味をもち内渦気味に立ち上るもの或はそれと推定されるものである。(2)は体部に「天」の墨書がある。底部の切り離しは、いずれも回転糸切り無調整である。

甕（第126図8・9） (8)は、甕の口縁部の破片で口縁部が外反し、口唇部が下方へ引き出



堆積土

層	土 色	土 性	備 考
1	7.5YR 2/1 黒 色	腐 植 土	粒状バクミがブロック状に入る 燒土
2	10 YR 2/2 黒褐色	シ ルト	炭化物、燒土若干含まれる
3	7.5YR 2/1 黒 色	シ ルト	炭化物、燒土若干含まれる
4	7.5YR 3/3 培 植 色	シ ルト	

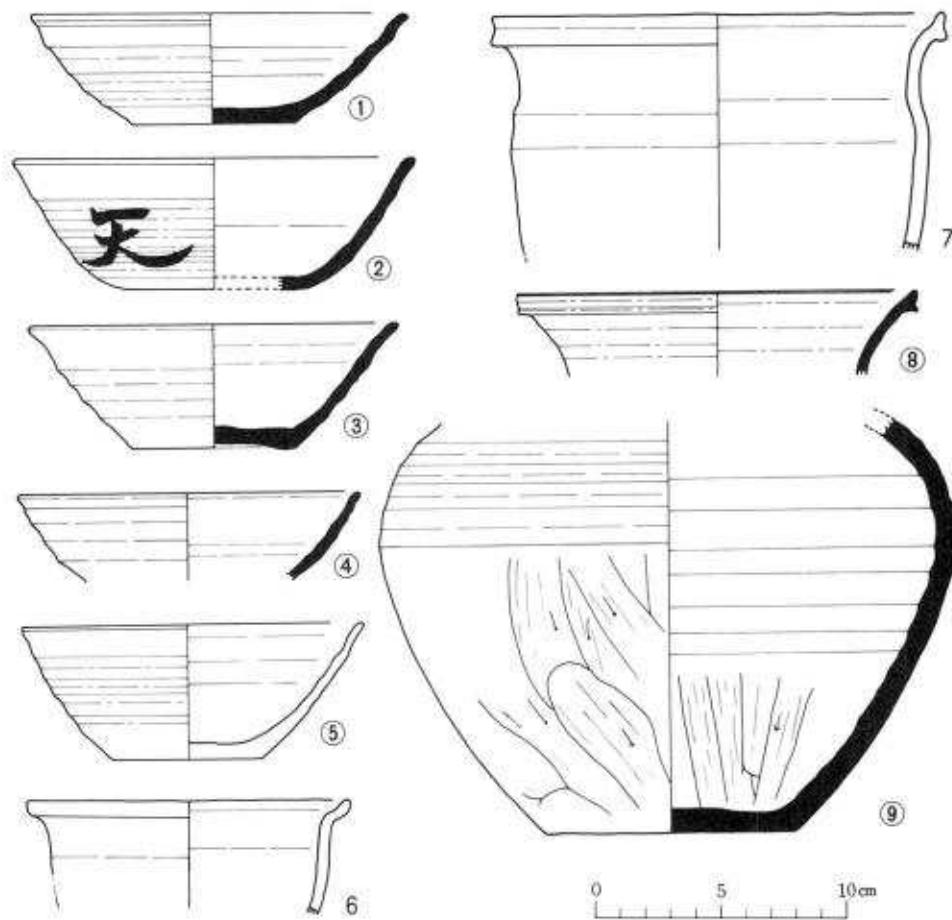
堆積土(P1-P2)

層	土 色	土 性	備 考
1	7.5YR 3/4 培 植 色	シ ルト	繩文土器片、炭化物燒土を含む
2	10 YR 2/2 黒褐色	シ ルト	燒土、炭化物若干含む
3	7.5YR 3/4 培 植 色	シ ルト	須恵器片を含む

堆積土(カマド・煙道部)

層	土 色	土 性	備 考
1	10 YR 2/2 黒褐色	シ ルト	炭化物が多量に含まれる 燒土若干
2	10 YR 2/1 黒 色	シ ルト	
3	7.5YR 3/2 黒褐色	シ ルト	地山の土がブロックで混じる
4	10 YR 4/6 褐 色	シ ルト	
5	7.5YR 3/2 黒褐色	シ ルト	燒土若干含まれる
6	7.5YR 3/3 緑褐色	シ ルト	炭化物。燒土が若干含まれる
7	7.5YR 4/3 褐 色	シ ルト	炭化物若干含まれる
8	5 YR 4/8 赤褐色	燒 土	
9	10 YR 4/6 褐 色	シ ルト	
10	7.5YR 3/3 培 植 色	シ ルト	炭化物、燒土が含まれる

第125図 BH12竪穴住居跡



出土遺物観察表

番号	出土場所	種別	調査		表面	基高	口径	体径	底径	分類番号
			外 底	内 面						
1	地積土	湯沸器(环)	ロクロ底	ロフロ底	鋸歯形切り	4.3	13.0		6.4	C ₁ 1 c
2	堆積土	湯沸器(环)	ロクロ底(天)	ロクロ底	鋸歯形切り	5.2	15.0		(7.0)	C ₁ 1 b
3	堆積土	湯沸器(环)	ロクロ底	ロクロ底	鋸歯形切り	4.7	14.8		6.4	C ₁ 1 a
4	堆積土	湯沸器(环)	ロクロ底	ロフロ底		(3.5)	(13.8)			C ₁
5	堆積土	水鏡	ロフロ底	ロフロ底		5.4	13.7		5.8	B ₁
6	カマド内	土師器(盤)	ロクロ底	ロクロ底		(3.6)	12.2			B ₁ 2 a
7	火穴内	土師器(盤)	ロクロ底	ロクロ底		(3.2)	(18.0)			B ₁ 2 d
8	堆積土	湯沸器(盤)	ロクロ底	ロフロ底		(3.4)	(16.0)			C
9	堆積土	湯沸器(盤)	ロクロ+ケメリ+ナテ	ロフロ+ケメリ		(16.5)		23.0	10.0	C

第126図 BH12竪穴住居跡出土遺物

きれているもの、(9)は、体部上半に体部の最大径を有する肩の張る感じのものである。体部内外面の下半にいずれもヘラケズリが施されている。

赤焼き土器

环 (第126図5) 体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもので器高に比して底径の小さめの环である。底部切り離しは、回転糸切り無調整である。

その他、磨製石斧 (第54図) 2点が出土している。

②DB09竪穴住居跡 (第127図)

[遺構の確認] 段丘の南端近く、D C 12竪穴住居跡の北約2m、C J 50竪穴住居跡の西約5mの地山面で検出したものである。

[重複] カマド前の床面下にD B 09ビットが、そして、北東隅にはD A 09ビットが存在し、西壁中央下にはビットがあり、いずれもそれらを切って構築されている。

[平面形・規模] 平面形は、方形である。規模は、長軸(東西)約3.9m、短軸(南北)約3.7m²、であり、床面積は、約14.2m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-50°-Wである。

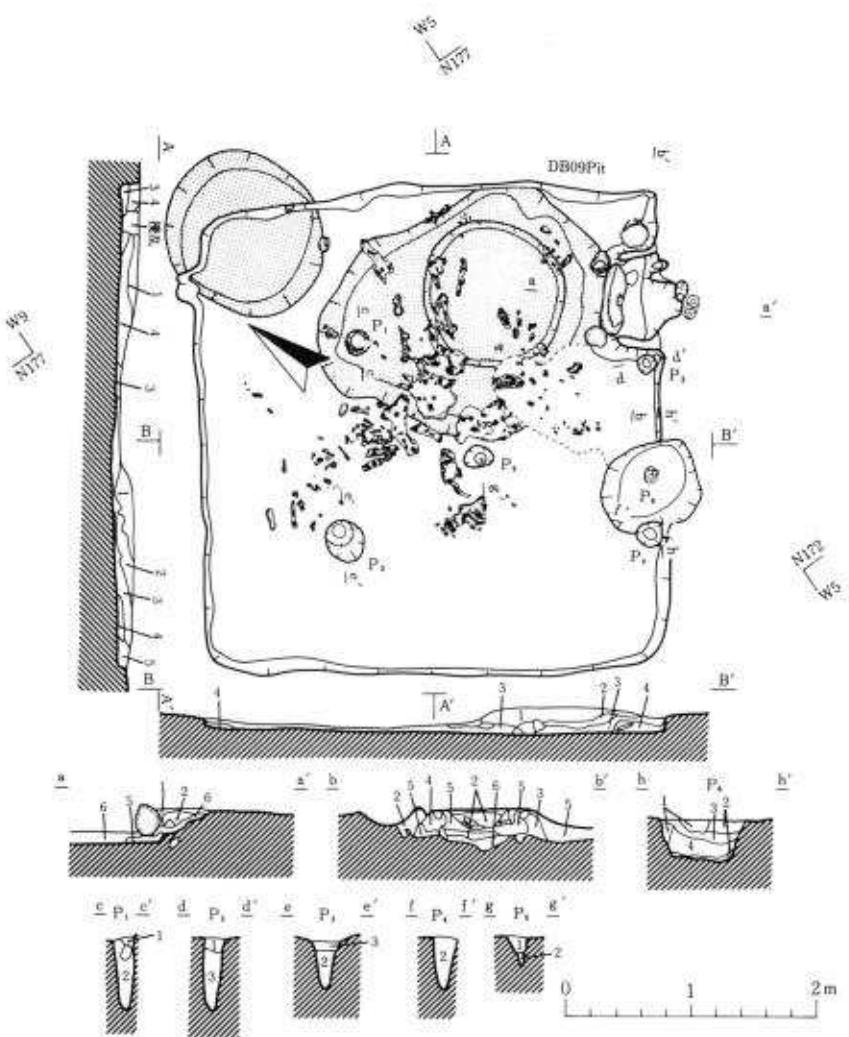
[堆積土] 住居の中央部分が削平され、堆積土の状況は明確でないが、南東隅の比較的残存状態の良好なところで観察すると5層に分けられる。1層は黒褐色の腐植土であり、2~5層は黒褐色或いは黒色の砂質粘土である。3層には、焼土、炭化物が含まれている。いずれも壁際より中央に向って流れ込むような形で堆積している。

[壁] 地山をそのまま、壁として利用しており、ビットとの切り合い関係にある部分でも特に補修している様子は認められない。残存状態は不良で最も良好な東壁で約10cmであるが立ち上がりは比較的鋭い。

[床] 全般的に平坦で固く、ビット上に貼床した様子は認められない。中央附近より北寄りにかけての床面に炭化材が散在していた。

[柱穴] 床面上よりP₁~P₆の6個のビットが検出されている。そのうち、カマド右脇及びP₆ビットの脇で、しかも、南壁に接した形で検出されたP₂、P₄ビットと、それに対応する位置で北側に検出されたP₁、P₃ビットが位置的には南に片寄るが配置、深さ等からみて、それに該当するものと思われるもので、又、中央に存在するP₅ビットも補助的なものと推定してもよいものであろう。規模は約径20cm内外床面上よりの深さ約45cm内外である。

[カマド] 南壁や、東寄りに付設されている。燃焼部は舌状にわずかに住居外にのびており、煙道は削平されたものか、当初よりなかったものか判然としない。両側壁はシルトで構築され、先端にはそれぞれ川原石が存在し、かけ口に使用されたとみられる径約30cm、長さ約60cmの楕円形の川原石が燃焼部内に横に倒れていた。燃焼部内には焼土が堆積していたが底面には掘り込みは認められなかった。カマドの軸方向はN-140°-Eである。



堆積土

番	土色	土性	備考
1	10 YR 2/2 黒褐色	腐植土	
2	10 YR 3/2 黒褐色	砂質粘土	
3	10 YR 2/1 黒色	砂質粘土	機土、炭化物を含む
4	10 YR 1.7/1 黒色	砂質粘土	
5	10 YR 2/1 黒色	砂質粘土	地山の土がブロック状に入る

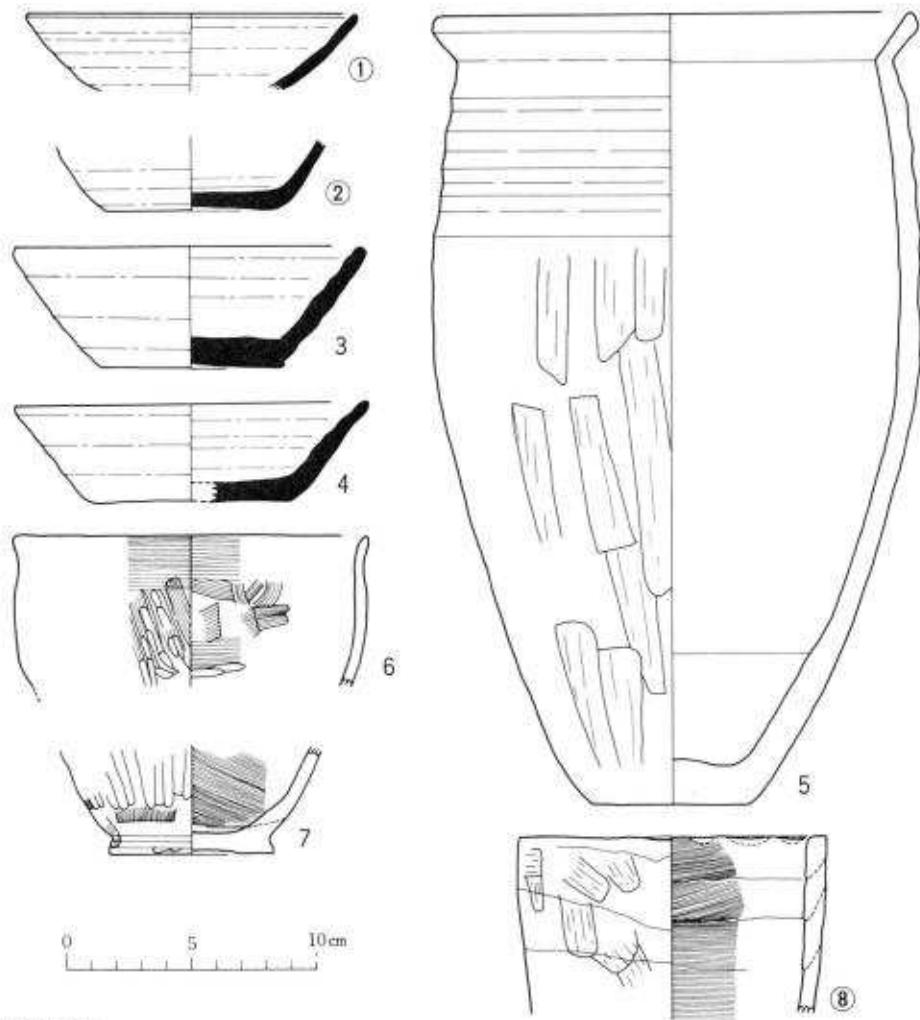
堆積土($P_1 \sim P_4$)

番	土色	土性	備考
1	10 YR 2/1 黒色	シルト	炭化物微量含む
2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	機乱
3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	炭化物微量含む
4	10 YR 2/1 黒色	シルト	土師器片、炭化物を含む

カマド・煙道部堆積土

番	土色	土性	備考
1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	燒土、炭化物を若干含む
2	10 YR 4/3 にむき黒褐色	シルト	
3	5 YR 4/4 にむき黒褐色	シルト	
4	10 YR 4/3 にむき黒褐色	シルト	炭化物を含む
5	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	燒土、炭化物を含む
6	2.5YR 4/6 赤褐色	燒土	

第127図 DB09竪穴住居跡



出土遺物観察表

番号	出土層位	種類	調査		底面	口部	H	体径	底径	分類番号
			外表面	内表面						
1	堆積土	泥質器(环)	ロクロ模	ロクロ模		(3.1)	13.2			C ₁
2	埋積土	直筒器(环)	ロクロ模	ロクロ模	有鉢輪削り	(2.6)			6.8	C ₁
3	ビット	土器器(环)	ロクロ模	ロクロ模	有鉢輪削り	4.9	14.2		7.2	C ₁ 1a
4	ビット	直筒器(环)	ロクロ模	ロクロ模	有鉢輪削り	4.9	14.6		7.8	C ₁ 1a
5	床面	土器器(盤)	ロクロ模+手彫り	ロクロ模		31.2	19.4		6.3	B ₁ 5a
6	カツド手	土器器(盤)	ヨコナギ・ナガ浅三脚	ヨコナギ・ナガ・三脚		(6.8)	14.0		6	A ₁ 5b
7	カツド内	土器器(盤)	ハラケ京冬	ナガスチ		(4.2)			6.6	
8	堆積土	土器器	ハラケズリ	ヨコナギ		(7.1)	12.3			

第128図 DB09竪穴住居跡出土遺物

〔その他の施設〕 東壁中央に一部が住居外に出る形で径約80cm、深さ約30cmの深鉢状のピットが存在する。炭化物と須恵器が出土している。

〔年代決定資料〕 住居の構築及び年代を決定する資料としては、カマド内及び床面ピット等から出土した土師器、須恵器等がある。

土師器

大甕（第128図5） 口縁部が短く「くの字」に外反しているもので、体部最大径が体部上半にあり、器高に比べて底径の小さい長胴である。調整技法は口縁部の内外はロクロ痕、体部外面下半はヘラケズリ、内面はロクロ痕である。ロクロ使用のものである。

小甕（第128図6・7） 口縁部が短くわずかに外反している薄手の小型甕と推定されるもの、口縁部及び底部である。ロクロ未使用のものである。口縁部附近は、内外ともに、ヨコナデ体部の外面は、ナデ及び部分的なミガキ、内面は主にナデである。二次的加熱をうけピンク色を呈しているところが多い。

須恵器

壺（第128図3・4） 体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するもの(3)と底部近くがや、丸味をもたらす外反気味に口縁部に立ち上るもの(4)とがある。いずれも器高に比べて底径の比較的大きいものである。胎土の色調は、いずれも浅黄橙色である。これは灰白色のものが二次加熱を受けた結果変化したもの、ようである。底部の切り離しは、回転糸切り無調整である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く、堆積土からは、土師器、須恵器の破片が出土している。

土師器

筒形土器（第128図8） 口縁部に指で押圧して成形した痕跡のみられる平縁で、円筒状に近い特殊な甕と推定されるものである。内外面はかなり磨滅しているが、外面にヘラミガキ、内面にナデの調整痕が認められる。製作に際してはロクロ未使用のものである。

壺（第128図1・2） (1)は、口縁部がや、内湾気味に立ち上るもの、(2)は、底部がや、丸味をもつて立ち上るもので、色調は灰白色のや、軟質のものである。

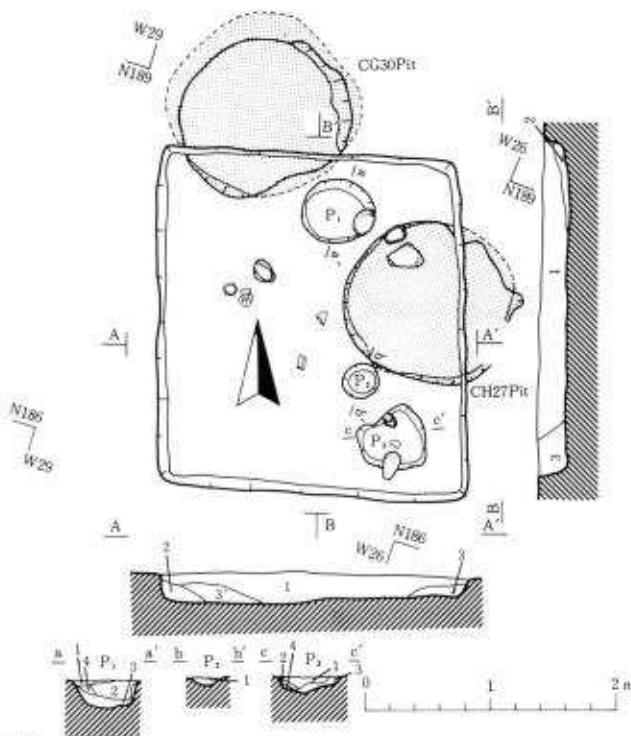
(2) 穫穴状遺構とその出土遺物

②CH30竪穴状遺構（第129図）

〔遺構の確認〕 C調査区の最西端、C F 24竪穴住居跡の南西約5m、D A 24竪穴住居跡の北西約7mの地山面で検出したものである。

〔重複〕 北壁がC G 30ピット、東壁がC H 27ピットと重複関係にありそれを切って構築されている。

〔平面形〕 平面形は、長方形である。規模は、長軸（南北）約2.7m、短軸（東西）約2.5mであり床面積は約6.8m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-2°-Wである。



堆積土

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	粘土質	土師器片、炭化物を含む
2	10YR 2/2 黒褐色	粘土質	炭化物を若干含み地山がブロッカ入る
3	10YR 3/2 黒褐色	粘土質	炭化物、焼土を含む

堆積土 (P₁ ~ P₃)

層	土色	土性	備考
1	10YR 2/4 黒色	粘土質	炭化物を含む
2	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山のブロッカ入る
3	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山のブロッカ多量に入る
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物微量含む

第129図 CH30堅穴状遺構

は、いずれも深さ10~20cmの深皿状を呈しているものである。

〔年代決定資料〕 遺構の構築及び使用等の年代を決定する資料としては、床面出土の須恵器がある。

須恵器

環（第130図2~4）(2)は、体部が丸味をもって立ち上り口縁部がわずかに外反するもの(3・4)は、体部がほぼ直線的に外傾するもので底部の切り離しは(3)が回転ヘラキリであり、他は、回転系切り無調整である。

〔堆積土出土遺物〕 別表の如く土師器の甕の破片が多量に出土した他、須恵器の环、土師器の环、縄文土器片が少量出土した。

土師器 製作に際しロクロ使用のものである。

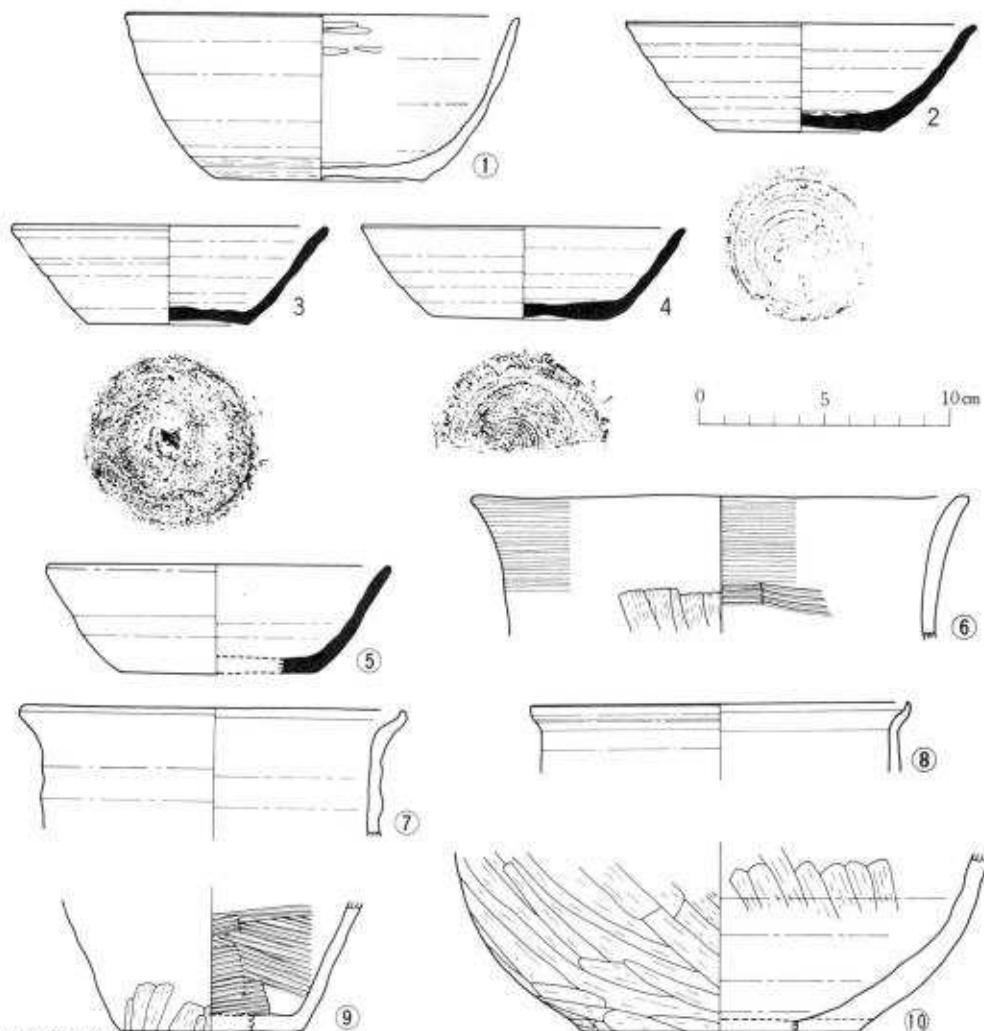
〔堆積土〕 3層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で住居全体に堆積し、壁際を除く床面に堆積している。又、3層は、壁際に堆積している。

〔壁〕 地山をそのまま・壁としているもので立ち上りも急である。残存状態は、いずれも約20cmである。

〔床〕 床面は、平坦で固く、特に、ピットの上面に貼床は認められない。床面に人頭大の川原石が5個散在していた。

〔柱穴・カマド〕 認められない。

〔その他の施設〕 中央北壁近くに径約50cm、深さ約44cmの深鉢状のP₁ピットが存在する。炭化物が上部にわずかに含まれる以外特に出土物はない。その他、P₂、P₃のピット



出土遺物観察表

番号	出土状況	種別	調査		古道	高さ	口径	体深	底径	分類番号
			外 壁	内 面						
1.	堆積土	上部層(3)	U字形構	ハラカガニ(内側)	同	軽 ヘラカヌリ	6.6	15.7		B ₁ Ⅲa
2.	床一帯	漆器器(2)	U字形構	U字形構	右側斜面切り	4.3	14.0			C ₁ I a
3.	床一帯	漆器器(3)	U字形構	U字形構	同	軽 ヘラカヌリ	3.9	12.6		C ₁ I a
4.	床一帯	漆器器(4)	U字形構	U字形構	右側斜面切り	3.6	12.9			C ₁ II a
5.	堆積上	漆器器(5)	U字形構	U字形構		4.5	10.8			C ₁ I a
6.	堆積土	上部層(7)	ロコオボン(多量発見)	ロコオボン(ナメ)		(5.5)	(19.0)			
7.	堆積土	上部層(7)	U字形構	U字形構		(5.0)	(19.0)			B ₁ II a
8.	堆積土	上部層(7)	U字形構	U字形構		(2.8)	(15.2)			B ₁ II a
9.	堆積土	上部層(7)	ハラカヌリ	ハラカヌリ	ハラカヌリ	(5.2)			(7.3)	
10.	堆積土	上部層(7) ?	ハラカヌリ	ナメ・ロコオボン	ハラカヌリ	(7.1)			(31.0)	

第130図 CH30堅穴状遺構

坏(第130図1) 体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上り、他に比べて器高が高く径も大きいものである。外面底部近くはヘラケズリされているもので切り離しは回転系切りである。

斐（第130図6～10）(6)は、口縁部の外反するもの、(7・8)は、口縁部がわずかに外反し口唇部が上につまみだされているものである。(10)は、内外にケズリの施された斐或は壺の体部下半がある。

須恵器（第130図5） 体部がや、丸味を持って立ち上る底部の切り離しが回転糸切り無調整のものである。

その他、石鎌（第53図）が1点出土している。

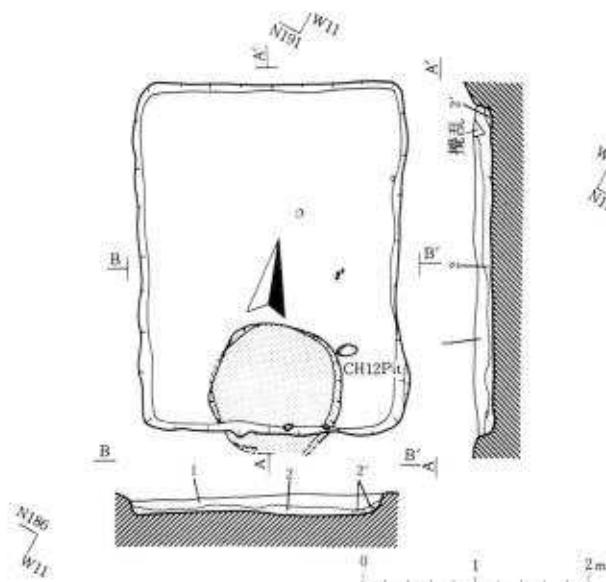
②6 C G 12 穴状遺構（第 131 図）

〔遺構の確認〕 C調査区の西側、C E 12竪穴住居跡の南約3m、C J 18竪穴住居跡の北東約5.5mの地点の地山面で検出したものである。

〔重複〕 南壁の中央附近がCH12ピット(No.2)の上にかかり、重複関係にある。

〔平面形・規模〕 平面形は、長方形であり、長軸は（南北）約3.0m、短軸（東西）約2.3mである。床面積は、約6.9m²である。南北壁の中点を結ぶ軸線はN-10°-Wである。

〔堆積土〕 2層に分けることができる。1層は、黒褐色の腐植土で、住居内全域に堆積し、



堆積土			
層	土色	土性	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	腐植土	土師器、須恵器片を含む
2	10YR 2/1 黒褐色	腐植土	炭化物、土師器、須恵器片を含む
2'	10YR 2/1 黒褐色	腐植土	地山のシルトを多く含む

床面には達していない。2層は、黒褐色の腐植土であるが、一部に地山の土が小ブロック状に入りこんでいるもので、炭化物、土器を含み、床面上に堆積しているものである。

〔壁〕 地山を壁としているもので、南壁中央に弧状の張り出し部分が存在する。残存壁高は、15~20cmであるが、立ち上りは比較的鋭い。

〔床〕 平坦で、固くしまつている。

〔柱穴・カマド〕 いずれも認められない。

第131図 CG12整穴状遺構



出土遺物観察表

番号	出土部位	種別	外 面	内 面	底 面	高 さ	口 径	体 径	底 径	分類記号
1	床 面	土師器(壺)	ロクロ底	ロクロ底		(3.5)-(14.4)				B.

第132図 CG12縫穴状遺構出土遺物

土師器

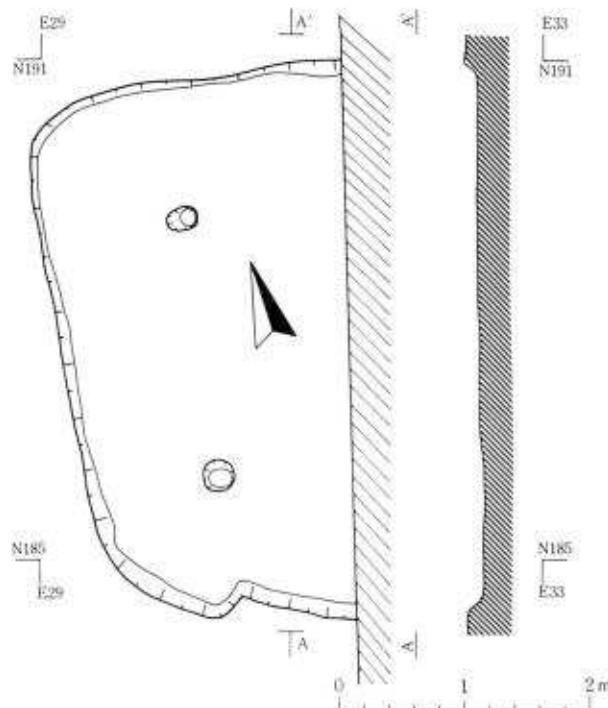
中壺 (第132図1) 口縁部が外反し、口唇部が強く上方へつまみ出されているもので、内外面ともにロクロナデ整形されているものである。

[堆積土出土遺物] 堆積土中より出土している土師器の壺の破片は体部の小破片で摩滅の著しいものが多いが、いずれもロクロ使用のものと推定される。須恵器の壺は、灰白色で軟質である。その他、縄文土器の体部破片、底部破片、磨石(2個)(第55図)等が出土している。

②CD77縫穴状遺構 (第133図)

[遺構の確認] C調査区の東側、CE68縫穴住居跡の東約5mの地点で調査区外に約1/2がかかる形で検出されたものである。

[重複] CE77ピットの一部を切って構築されている。



第133図 CD77縫穴状遺構

[年代決定資料] 遺構の構築及び使用等の年代を決定する資料としては床面出土の土師器があるが、いずれも小破片であり、しかも出土量が少ない。

[平面形、規模] 全体的には不明であるが、西壁部分は長さ約4.9m、北壁約2.6m、東壁は約2mである。

[壁] 地山をそのまま壁としているが残存状態は、西壁で約10cmであり立ち上りも丸味をもつておるもので壁高も約16cmと浅い。

[床] ほぼ平坦で固い。

[柱穴] 西壁の内側約1mの地点に径約25cm、床面からの深さ約50cmの1対のピットが存在する。これが、それに該当する可能性が強い。

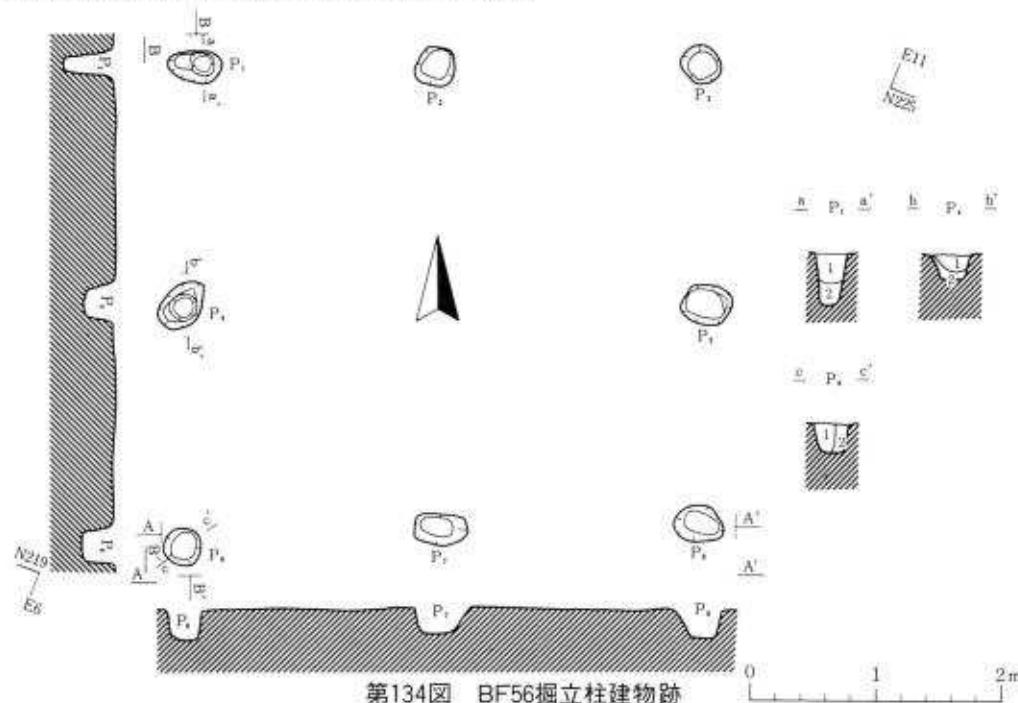
[堆積土、カマド等] 不明。

[年代決定資料] 遺物の出土なし。

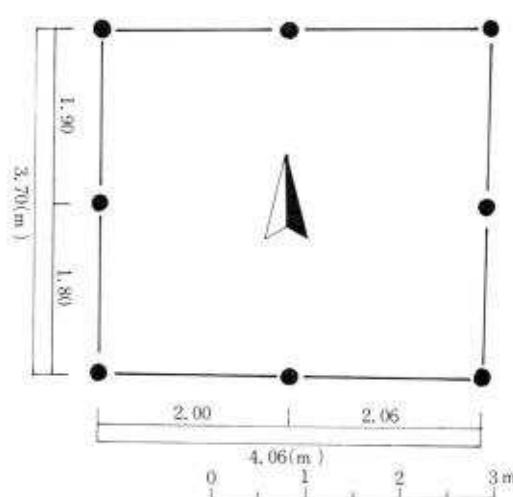
(3) 堀立柱建物遺構

BF53堀立柱建物（第134・135図）

〔遺構の確認〕 B 調査区のほぼ中央附近、B F 50竪穴住居跡、B D 62竪穴住居跡、B G 59竪穴住居跡に囲まれた地点で検出したものである。



第134図 BF56堀立柱建物跡



第135図 BF56堀立柱建物跡模式図

〔規模〕 東西棟 2間(約4.06m)×2間(約3.70m)の堀立柱建物である。柱間寸法は、桁行1.80m～1.90m、梁行2.00～2.06m、と若干の差が認められるが、桁行1.85m、桁行2.0mの等間の建物とみてよいものであろう。又、梁行は磁北とほぼ一致し、桁行がそれに直交する形である。

〔堀り方〕 堀り方は、円或いは稍円に近い形状を呈しており、特に、柱痕跡は認められない。埋土は、1～2層の黒色、黒褐色土で地山のシルトがブロック状に入っているものである。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
堀り方上幅径(cm)	44×28	30×32	30×32	30×34	42×32	30×30	42×26	40×32
検出面からの深さ(cm)	42	28	20	20	6	24	16	22

〔出土遺物〕 この遺構と関連するとみられる遺物は出土していない。

(4) 焼土遺構、周隣状遺構とその他の遺構

(1) 焼土遺構

BH56焼土遺構（第136図）

〔遺構の確認〕 B調査区のほぼ中央、その一部がBH56竪穴住居跡の西壁に切られた形で検出されたものである。

〔平面形、断面形〕 周辺が擾乱されており、完全な形は不明であるが、主体部は、幅広の橢円形を呈していたと推定される。断面形は、壁面の傾斜が緩く立ち上る深皿状と推定される。

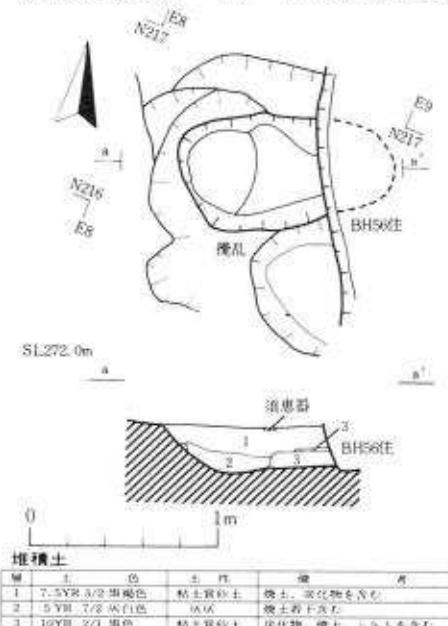
〔規模〕 東側半分はBH56竪穴住居跡に切られており不明であるが、残存部分は、長径約90cm、短径約60～80cmで深さは、約20cmである。

〔堆積土〕 底面には、灰白色の灰、及び炭化物、焼土の混ったシルトが堆積している。

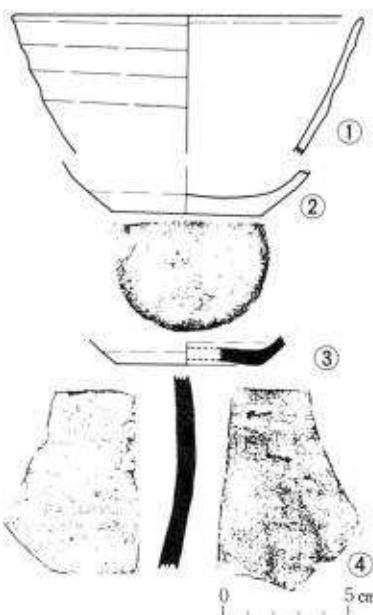
〔出土遺物〕 土師器、須恵器の破片が出土している。完形品はないが実測したものは壺3点と甕の拓影1点である。

土師器 製作に際しロクロ使用のもの。

壺（第136図1～2）(1)は、外傾気味の口縁部、(2)は、回転系切り無調整の底部の破片で



第136-1図 BH56焼土遺構



第136-2図 BH56焼土遺構出土遺物

ある。内外面ともに磨滅が著しいが、内面にはヘラミガキされた形跡が残っており、二次加熱をうけ、内黒処理のとんだものと推定される。

須恵器

壺（第136図3） 回転糸切り無調整の底部の破片である。器面は乳白色で比較的軟質である。

甕（第136図4） 表面上にタテのヘラケズリ痕の認められる甕の破片の拓影である。

BG50焼土遺構（第137図）

〔遺構の確認〕 B調査区のほぼ中央、B F 50号穴住居跡の北西コーナーの西約0.2mの地山面で検出したものである。

〔平面形・断面形〕 平面形の開口部は幅広の橢円形状を呈し、底面形は、中央部分がわずかにくびれダルマ状を呈している。長軸断面形は、一方がほぼ垂直に掘り込まれ緩かに上る舟形状を呈している。

〔規模〕 長径約1.35m、短径約80~85cm、深さ約35cm。

〔堆積土〕 1層は黒色腐植土で遺構の上面に堆積し底部には達していない。2層は底面に堆積している。3~5層は、2層の上にブロック状に堆積している焼土、炭化物等である。

(2) 周壁状遺構とその他の遺構

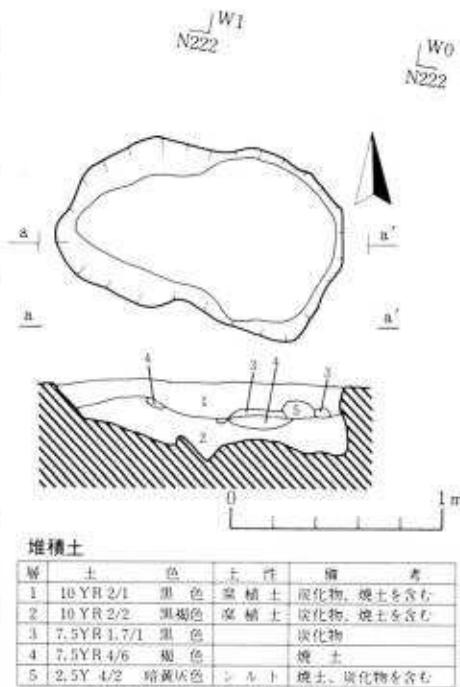
IC15周壁状遺構（第138図）

〔遺構の確認〕 I調査区の中央よりや、北西寄り、J区50号穴住居群の北約30mの地点の地山面で検出したものである。

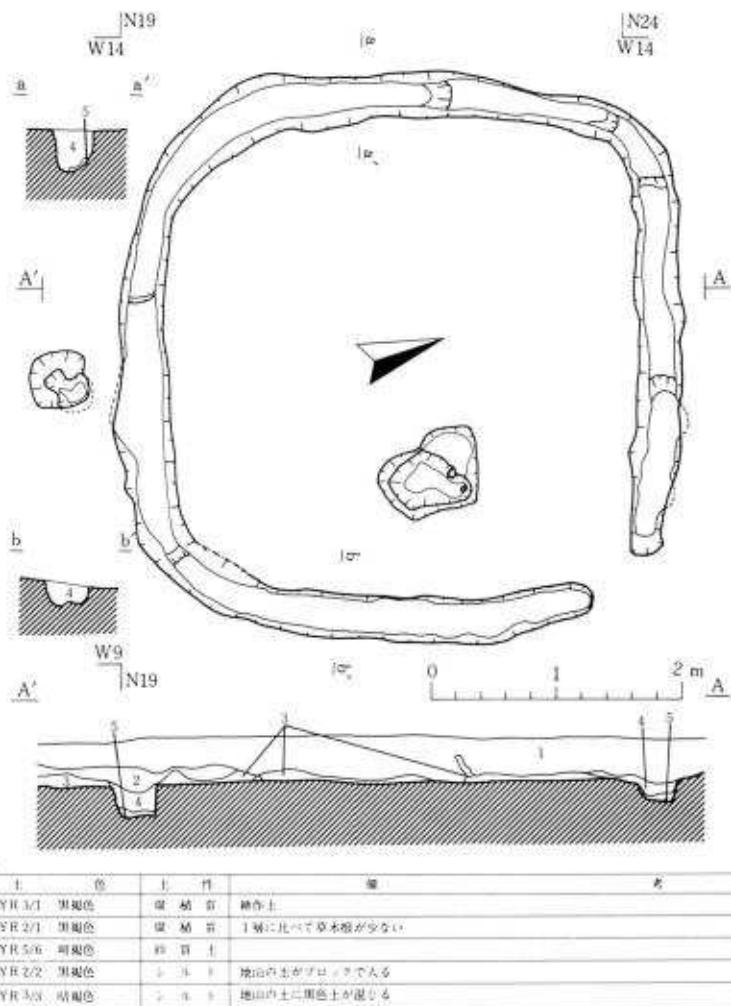
〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 全体として隅丸方形状の周壁であるが、北東隅が切れている。規模は、内径（南北）約3.80m（東西）約3.80m、外径（南北）約4.60m、（東西）約4.60mである。

〔堆積土〕 表土からの堆積状況を観察すると5層に分けられ、1・2層は、黒褐色の腐植質土で、3層は、明褐色の砂質シルト（地山）4・5層は、周壁中の堆積土で砂質シルトの小ブロックの混じった暗褐色の混土である。特に、周壁の堆積部分の上部は、つきかためられたように固くなっていた。



第137図 BG50焼土遺構



第138図 IC15周墳状遺構

[断面形・底部] 断面形はU字に近い形状を呈し、側壁は比較的凹凸が多い。底面は、一様の深さではなく、浅いところで約3cm、深いところは約30cmと差があり、随所に段を有する形態を呈している。

[主体部・その他の施設] 周墳の内側の主体部とみられるところには、不定形のピットが存在するものゝ、特に、意図的な掘り込み等は認められない。

[遺物] これと関連する遺物は出土していない。

[性格] 円形周墳が検出されている例としては白沢遺跡、長沼遺跡、五条丸古墳群^{注1}、があり白沢遺跡を除き、古墳に伴う周墳として調査されているものである。これらの形状をみると、いずれも完全な円形をなさず、一方が開き、U字形（馬蹄形）をなしているのが特徴である。^{注2}そこで形態的に類似しているものとしてあげると湯沢遺跡における円形周溝^{注3}といわれるものがある。特に、途中1ヶ所が切られている点や、底面の状況が浅い、深いの差があり、凹凸のあること、段差のあること等かなり共通した点が認められる。しかし、規模の上からみた場

合、前三者についてみると外径が8~12m、湯沢遺跡においても、1基No.10(B C 80)が4.3~5.5mの規模をもつ以外11~14mと大きいものばかりである。従って、平面的には類似しているもの、規模的には非常に小規模なものと墳丘を伴う遺構としてみるには問題がありそうであり、もし伴うものとすれば例の少い部類に入るものといえよう。

注1 岩手県文化財調査報告書第49集東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—V—昭和55年3月
岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

注2 「長沼古墳」 和賀町教育委員会(1974)

注3 「猫谷地、五条丸古墳群」 江鈴子村教育委員会(1978)

注4 岩手県文化財調査報告書第32集東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—III—

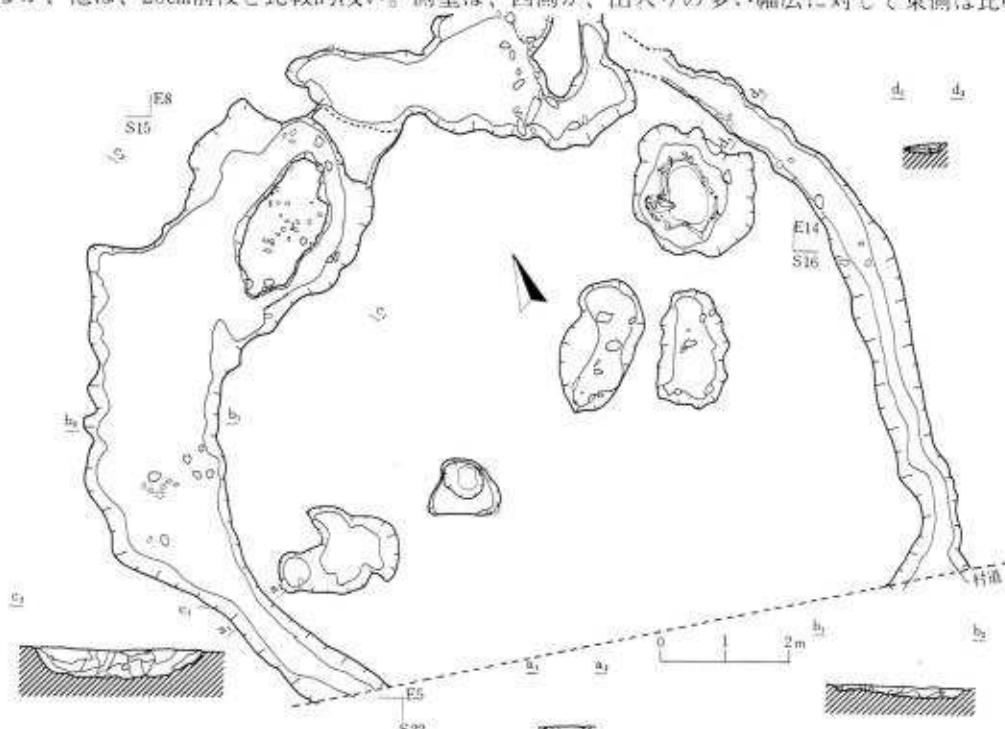
岩手県教育委員会、日本道路公団

JE53周隆状遺構(第139図)

〔遺構の確認〕 J調査区のほぼ中央附近、J G06竪穴住居跡と東端に位置する10号墳(県指定古墳群)との間の地山面で確認されたものである。

〔平面形・規模〕 南側の一部は村道下にあり調査できなかったが、全体的にみた場合、平面形は、不整円形のものと推定される。規模は、外径で(東西)約13.5m×(南北)約(12)mである。

〔断面形・底部〕 断面形は、逆台形状を呈し、深さは、西側の最も深いところで約40cmを計るが、他は、20cm前後と比較的浅い。側壁は、西側が、出入りの多い幅広に対して東側は比較



第139図 JE53周隆状遺構

的出入りの少い溝状を呈している。底面は、北半に凹凸のあるところが多い。

〔堆積土〕 溝中の堆積土は、細かく観察すると8層にもなるが2層に大別される。1層は、黒褐色土、2層は暗褐色土で、他は、いずれも地山のシルトがブロック状に混じっているものや、ブロックそのものである。

〔主体部・その他の施設〕 周囲内側の主体部とみられるところには、大小5個の不整形のピットが存在する。そのうち、P1は、馬が埋葬されていたものである。

〔明治27年代かき中に病死した馬を埋葬したものである。 高橋タマ氏（当時88歳）〕

その他のピットは、いずれも皿状の浅いものであり、特に人為的な面は認めがたいものである。

〔遺物〕 特になし。

HG06マウンド状遺構（第140図）

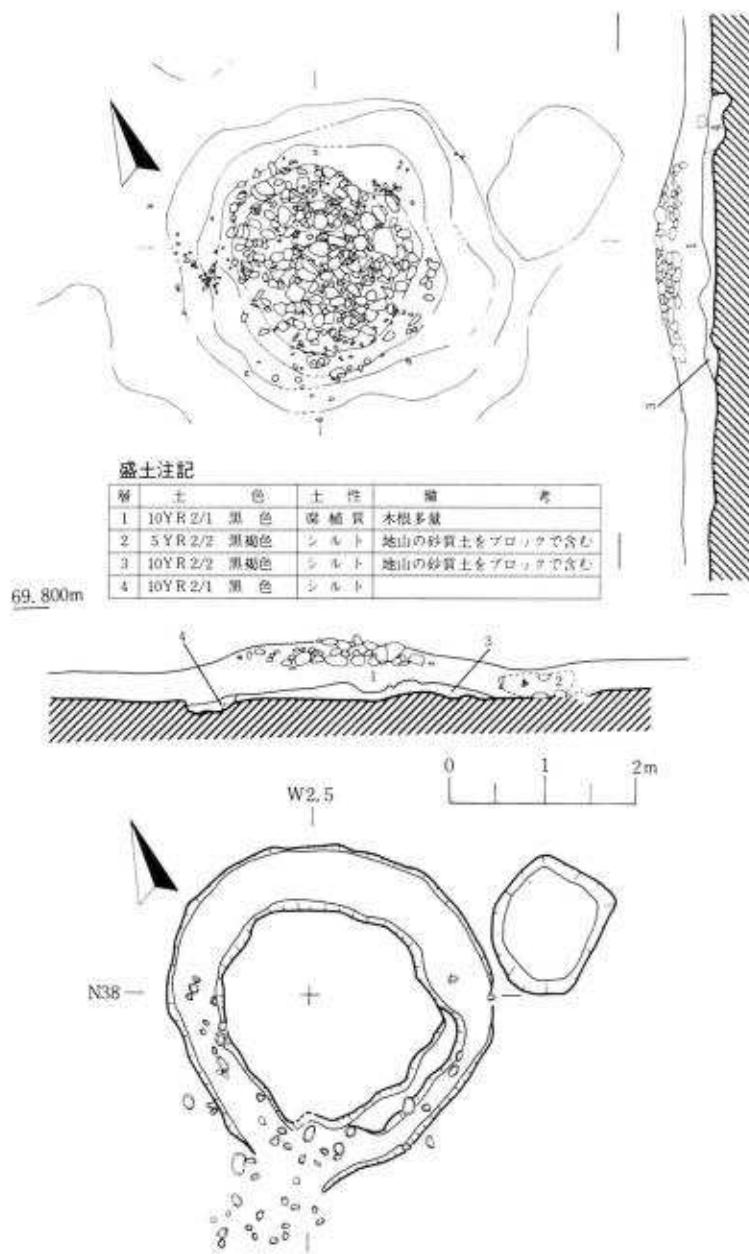
〔遺構の確認〕 H調査区のほぼ中央、IC15周溝状遺構の北東約15mの地点に存在したもので、自然堤防上で発見されたものとしては最も北に位置するものである。

〔規模・形状等〕 現状の大きさは、底部の直径が約3.2m、高さが約0.65mで、低い土饅頭状を呈していたものである。中央部の一番高い所を中心に行き約2.2mの範囲に径35~10cmの大小の川原石が乱雑に積まれており、特に下方に比較的大きい石が多い。盛土は、地山直上に地山の黄色砂質土をブロックで含む黒褐色土が最高10cmの高さでみられた。その上は黒色の腐植質土である。

〔周溝〕 幅50~60cm、深さ約15cmの南方が切れている馬蹄形状の溝が発見されている。

〔遺物〕 盛土とみられる上面より、土師器の破片2片と繩文土器片が出土しているがいずれも磨滅の著しいものである。

〔性格〕 地山面より検出された馬蹄形状の周溝をみると、そこに何らかの人為的作用が働いていると考えることができるが、盛土を観察した場合、特に、マウンド状に盛ったものかどうか疑しい面が残る。しかし、周溝のみの形態をみた場合南方が開く馬蹄形の周溝としては、西方に位置する五条丸古墳群^{注1}、和賀町長沼古墳^{注2}、矢巾町白沢遺跡^{注3}等でもみられるものである。次に規模の面でこれらの遺跡のものと比較してみると、いずれも径が8~12m、深さが20~130cmであり、当遺跡のそれに比較して規模の大きなものばかりである。更には墳丘としてみた場合隣接する猫谷地古墳群の最も小規模な5号墳を例にとってみても直径7.5m、高さ0.83mである。それと比較しても小規模な点ではかわりがない。従って遺物や主体部と推定されるものがないこの遺構について、形態、規模の上から推定しても墳墓が存在したとするには、疑問が多すぎる。上部の積み石は、周辺に散在する川原石を単に積み上げたものとする他に、古墳の石室部分が破壊した川原石である可能性もなくはない。しかし現状においては周溝と盛り土との関係からみて古代の遺構とするには無理な点が多い。



第140図 HG06マウンド実測図

- 注1 「猫谷地、五条丸古墳群」 江鈴子村教育委員会 (1978)
 注2 「長沼古墳」 和賀町教育委員会 (1974)
 注3 岩手県文化財調査報告書 第49条 東北新幹線関係埋葬文化財調査報告書－V－昭和55年3月
 岩手県教育委員会、日本国有鉄道盛岡工事局

KE15小ピット群（第141図）

〔遺構の確認〕 K調査区の西側ほぼ中央附近、西から東に走るKE24溝の壁面中より発見したものである。

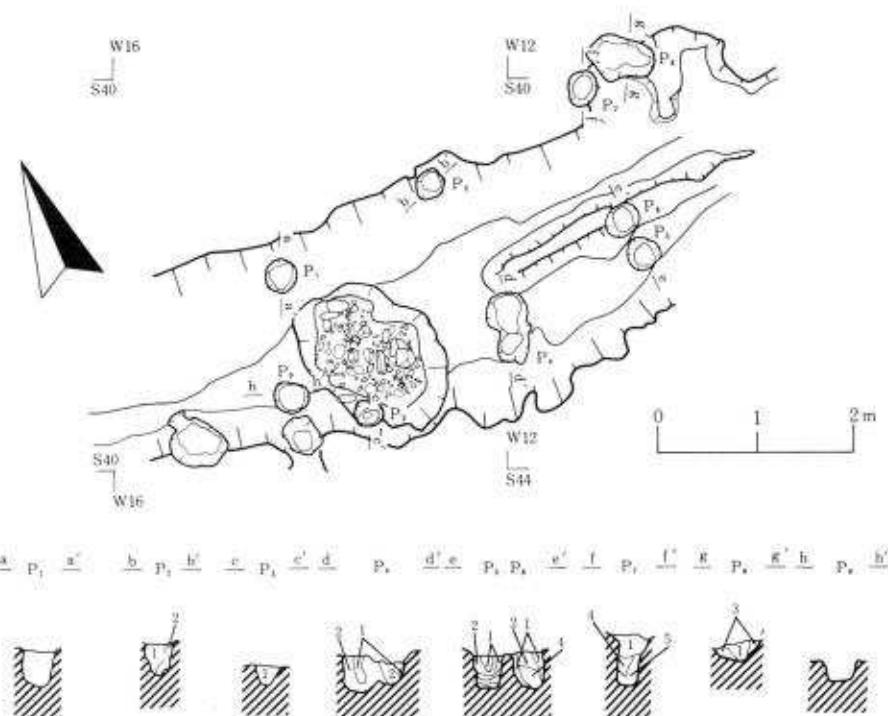
〔重複〕 西から東に走るKE24溝によって上面が削平されたものと推定される。

〔平面形・規模〕 平面形は、P₁～P₄までの9個のピットの中P₃が楕円状を示す他ま、ほぼ円形のものである。断面形は浅い、深いの差はあるがほぼU字状を呈している。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径(cm)	34	31	31	74×32	36	32	34	72×40	36
深さ(cm)	36	32	32	36・22	32	34	52	20	24

〔性格〕

これらのピットは、一見規則的に並列しておりP₁・P₂・P₃・P₅・P₄・P₆を結ぶと1間(180cm)×2間の掘立柱建跡とも考えることも可能であるが決めて欠ける。



第141図 KE15小ピット群実測図

AH18溝状遺構（第7図）

〔遺構の確認〕 調査区の最北端、A区の国道107号線沿いの地山面で検出したものである。

〔重複等〕 西端は攪乱、南東端は調査区外に延びるため不明である。

〔形状・方向〕 断面形は底部がや・丸いがV字状に近いものであり、側壁、底面等にはあまり凹凸はみられない。溝は多少の出入りあるが西より東へ走っており、調査区の東端附近で緩かに南東へカーブし調査区外へ出ている。西端と南東端の比高は約60cmである。

〔規模〕 現存長は、約45.8mで上幅は90~50cm、下幅は70~20cm、深さは50~20cmである。

〔堆積土〕 溝部分の堆積土は、細かくは3層に分けられるが、黒色のシルト1層である。一部炭化物が微量含まれるところも存在する。

〔出土遺物〕 特になし。

KE24溝遺構（第8図）

〔遺構の確認〕 調査区の最南端、K区中央附近の地山面で検出したものである。

〔重複等〕 KA06竪穴住居跡の南壁の上部を切って西から東へ走っており、その他、KE15小ピット群の一部を削平している。

〔形状・方向〕 断面形は、深さ20cm前後の深皿状を呈している。溝は西から東へ走っており北南差は47cmである。側壁には、大小のピットがあり凹凸が比較的多い。底面には、西半部分にピット、礫が入りこんで変化が多く、東半は平坦である。

〔規模〕 現存長は約48m、上幅は約3m~1.2m、下幅は約0.20~0.50mとかなりの差がある。

〔性格〕 ほぼ、村道と並行して西から東へ走っており、それぞれ西、東ともに調査区外に延びており、底面には、水酸化鉄の沈澱等もみられるところから比較的新しい時期の水路と推定されるものである。

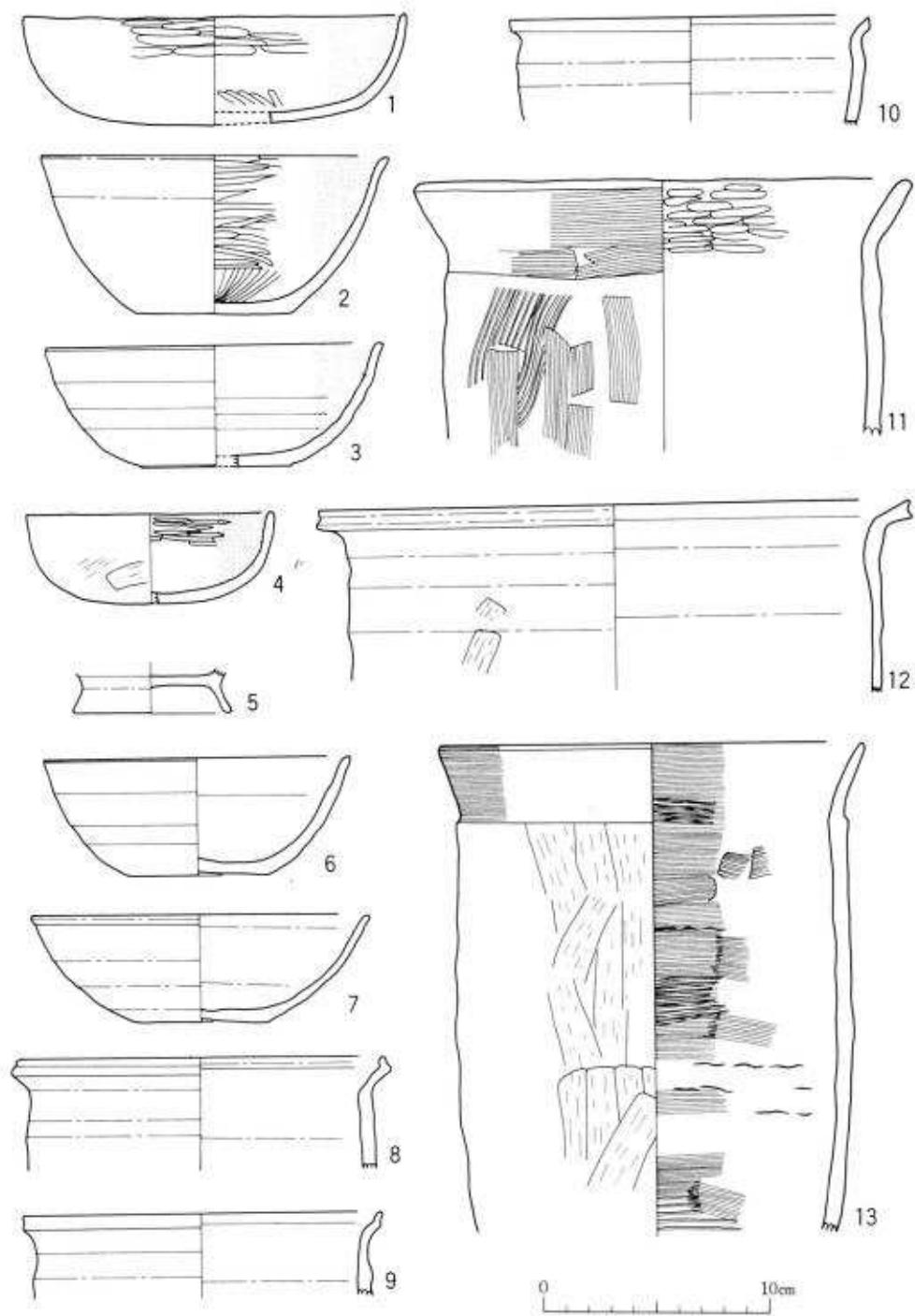
表探および粗掘時出土遺物（第142図）

遺構に関連する遺物については既述の通りであるが、こゝで、遺構に直接関連のないものについて一部とりあげておく。

土器

壺（第142図1~7）（1・4）は口縁部が内湾気味に立ち上る丸底のものである。外面には一部ミガキがみられるが摩滅しているところが多い。内面は、ヘラミガキされ黒色処理されている。いずれもロクロ未使用のものである（2・3・6・7）は口縁部が内湾気味に直立する底径に比べて器高の高いロクロ使用の壺であり（2）は内面ヘラミガキ黒色処理されている。他は、回転糸切り無調整のものである。（5）は、高台付の台部である。

甕（第142図8~13）（11・13）は、口縁部の外傾するロクロ未使用のもの、他は、口縁部が短く外反し、口唇部が上部につまみ出されているロクロ使用のものである。



第142図 表採および粗掘時出土遺物

(5) 考察とまとめ

1 遺構 (第7・8図)

本遺跡で検出された古代関係の遺構は、竪穴住居跡24棟、竪穴状遺構3棟、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構2基、周溝状遺構3基、溝遺構2条、小ピット群、マウンド状遺構1基である。これらのうち竪穴住居跡、竪穴状遺構を除いてはそれぞれのところで既に大略まとめているので、ここでは前者についてのまとめと若干の考察を加えることとする。

A. 竪穴住居跡・竪穴状遺構

〔形態と構造〕 完全な形或いはそれに近い形で検出された23棟と竪穴状遺構2棟を含めた25棟についてみるとする。

(a) 平面形・規模 そのほとんどが方形を基調としたものであるといえる。即ち住居における長辺と短辺の割合をみると長辺が短辺より20%以上長い例は2例にすぎず、これは全体の10%にもみたない。他は、ほぼ同じか10%内外の差しかみられない。このことは、平面形が正方形に近いプランを呈していることを物語っているといつてよいであろう。又、住居のコーナーについてみても比較的丸味を帯びているとみられるもの（多分に感覚的なものもあるが）は、全体の約25%であり、このことからも隅丸方形というよりは正方形に近い平面形（掘り込み面）を呈していたものであるといえよう。この傾向はおおよそ時間差に関係なくいえるようである。

次に、規模の点についてみると一辺が2.5m～12mと大きな差があるが床面積の面から比較すると以下のような4グループに分けることが可能である。（第143図）

- (1) 15m²以下 (一辺2.5m～4m以上) 10. (CE68, CF24, CJ18, CF56, DA24, BG59, DB09, CI53, CH30, CG12)
- (2) 20m²～30m² (一辺4m～5.5m) 10. (CF15, JG27, CH74, DA62, CJ50, BH56, CE12, BF50, CB03, BH12)
- (3) 35m²～40m² (一辺6m～7m前後) 4. (KA06, JG06, BF21, BD62)
- (4) 100m²以上 (一辺10m以上) 1. (JJ24)

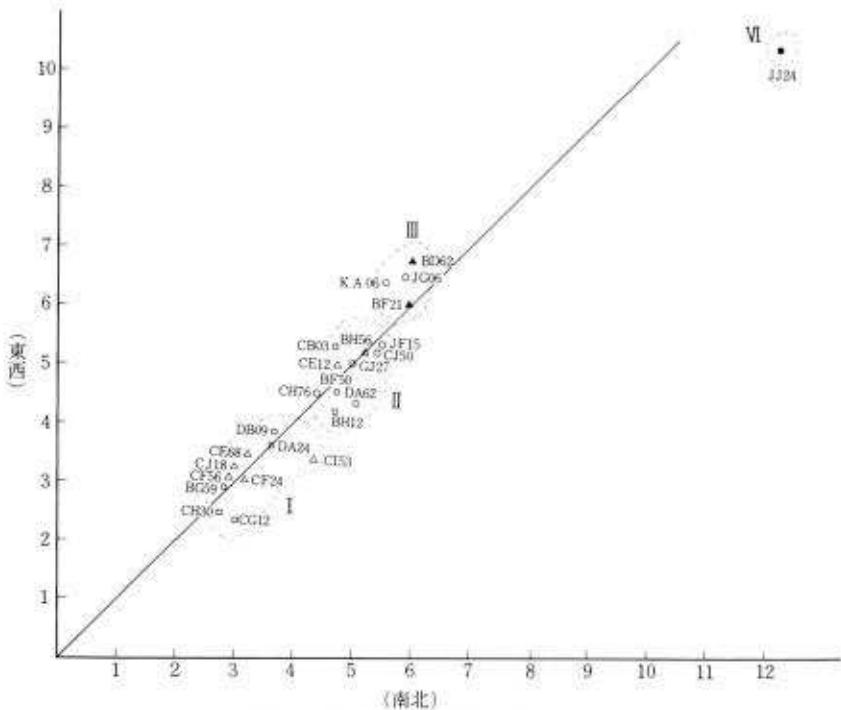
以上の結果から住居の変遷を考慮に入れて規模についてみると次のようになる。

1つはCH74、DA62、CJ50のグループで一辺が4～5.5mの3類に属する広さの住居のみで構成され、そこにはあまり差が認められない。

次に、南の自然堤防上に立地する一群をみると一辺が10m以上の大型住居JJ24を核として、2、3類の比較的大～中形の住居群で構成されているといえる。

更に段丘上の住居群をみると比較的大形の住居(BF21)を核としてそれに小形住居が付随する1群と、比較的大形の住居(BD62)を中心として中、小形住居でもって構成する1群がある。

以上絶対数としては、やや資料不足の感はまぬがれないが、全体的な傾向としては古期においては、比較的住居の広さに差が現われないのでに対して、時期が下るにつれて、1棟の大形住



第143図 住居跡規模長幅分布図

居を核として、中、小形住居が存在する傾向がみえる。しかも、それが時代が下るにつれて、核になる住居及び、それらに付随する住居も小形化してくる傾向にあり、猫谷地においても、一般的な傾向に対しては例外でないことを示しているものといえよう。

(b) 壁 壁は、すべて地山をそのまま壁としているもので、一部の削平、擾乱等を除けば、比較的残存状態の良好なものが多い。又、縄文時代の土壌等の切り合い関係にある壁面においてその部分に特に補修・強化した形跡が認められないことは、単純なことではあるが、これらの堆積土が壁を構築する際に支障のない状態であったことを意味するものであろう。

(c) 床 床面についてみると3つのタイプに分けることが可能である。

A 地山(掘り込み面)をそのまま使用 CH74, DA62, CJ50, JG06, CE68, CF24, BD62, CF56.
しているもの CI53, BF50, DB09, CH30, CG12, CE77, DC12(16棟)

B 貼床を全面に施しているもの JJ24(?), KA06, JG27, JF15, CJ18, BH56 (6棟)

C 貼床を部分的に施しているもの BG59, CE12, BF21, DA24, CB03 (5棟)

以上の結果からみるとAタイプが全体の6割弱であり、掘り込み面をそのまま生活面として使用しており床面下に縄文時代の土壌が存在するものでも壁面の構築と同じく、特に、手を加えずそのまま使用しているものようである。

次に、貼床を一部あるいは全面に施しているものがそれぞれ約2割存在する。その中でBタ

第13表 住居跡一覧表

遺構名	平面形	規 (東西)	規 (南北) m	規 体面積m ²	柱穴 (南北)	柱穴 (東西)	柱設場所	間	壁	壁道の長さ	壁出部 ビット	重複他 (備考)
1 CH7住居跡	方	矩	4.50	4.40	19.8	(N-16°-W)	全	なし	なし	なし	なし	未記載
2 DA62住居跡	*	4.34	5.08	22.05	(N-43°-W)	-	なし	なし	なし	なし	なし	未記載
3 CJ50住居跡	*	5.20	5.40	28.0	(N-62°-W)	*	なし	なし	なし	なし	なし	未記載
4 JC06住居跡	*	6.5	5.9	38.4	(N-8°-W)	6	北壁 中央	(3.09+1.5)×(2.04+0.6)=6.15	なし	70cm	なし	一部特え?
5 JF15住居跡	*	5.3	5.5	29.2	(N-26°-E)	4	北壁 中央	6.08m	なし	156cm	なし	床床、馬蹄あり
6 JG27住居跡	*	5.0	5.0	25.0	(N-5°-W)	4	北壁 中央	(支離石乞ケ)	なし	137cm	なし	なし
7 KA06住居跡	*	6.42	5.56	35.7	(N-20°-E)	4	北壁 中央	シルト 壁面6cm (支離石)	なし	112cm	なし	床床
8 JJ24住居跡	隅丸方形	10.4	12.2	126.9	(N-17°-W)	2	北壁 中央	Q-L (支離石)	なし	156cm	なし	なし
9 BF23住居跡	方 形	6.05	5.95	37.0	(N-10°-E)	4	北壁 中央	シルト 壁面6cm (支離石)	なし	164cm	なし	壁がこわされている
10 CE68住居跡	*	3.5	3.2	11.2	(N-7°-W)	3	中壁 中央	シルト 壁材とセメント用	なし	176cm	なし	なし
11 CF24住居跡	*	3.05	3.15	9.60	(N-90°-E)	*	東壁 中央	Q-L (支離石)	なし	180cm	なし	なし
12 CJ18住居跡	隅丸方形	3.35	3.0	10.1	(N-20°-W)	*	北壁 中央	シルト 壁材として土岐石の	不	明	不明	なし
13 BD22住居跡	*	6.8	6.0	36.8	(N-180°-E)	4	南壁 や西北寄り	シルト 壁外にも及ぶ	なし	110cm	なし	CJ71ビットと切り合っている。角
14 BH56住居跡	方 形	5.2	5.2	27.0	(N-160°-E)	3	(II)北壁 東寄り	なし (支離石の川崎石 2ヶ)	なし	140cm	なし	未記載
15 CF56住居跡	*	3.1	2.9	8.99	(N-17°-E)	なし	北壁 北東隅	シルト	なし	120cm	なし	CJ18-CJ19-CJ20ビットがある。
16 CL53住居跡	長 方 形	3.4	4.3	14.6	(N-142°-E)	4	南壁 東隅 近く	シルト・芯材に川崎石	なし	150cm	なし	CJ18-CJ19-CJ20ビットがある。
17 CE12住居跡	隅丸方形	5.5	4.5	24.8	(II)N-160°-E	4	(II)南壁 東寄り	なし	なし	130cm	なし	未記載
18 BF50住居跡	方 形	4.5	4.7	22.1	(N-74°-E)	3	東壁 北東隅	シルト	なし	140cm	なし	未記載
19 CB03住居跡	(隅丸方形)	5.25	4.65	24.4	(N-90°-E)	2	東壁 北寄り	シルト (一部)	なし	150cm	なし	未記載
20 DA24住居跡	方 形	3.6	3.6	12.96	(N-115°-E)	なし	東壁 や西北寄り	シルト	なし	140cm	なし	DA24ビットの上に構築されている。
21 DC12住居跡	(不整)	(2.8)	3.3	(8.24)	(N-108°-E)	*	東壁 や西北寄り	なし	なし	110cm	なし	DC12ビットによつて削除が切
22 BG59住居跡	隅丸方形	2.9	2.8	8.1	(N-10°-E)	*	東壁 や西北寄り	シルト、川崎石を芯材とした	(否)	120cm	なし	DC12ビットによつて削除が切
23 BH12住居跡	方 形	4.2	4.6	19.3	(N-93°-E)	*	東壁 や西北寄り	なし	なし	170cm	なし	BH56年の北壁を切っている。
24 DB09住居跡	楕円形	3.9	3.65	14.2	(N-140°-E)	5	南壁 南東隅	(支離石、芯材)の石使用	なし	なし	なし	未記載
25 CH30堅六块	方 形	2.5	2.7	6.8	N-2°-W	なし	なし	なし	なし	なし	なし	未記載
26 CG12堅六块	長 方 形	2.3	3.0	6.9	N-10°-W	*	なし	なし	なし	なし	なし	未記載
27 CD77堅六块	不 用	(1.25)	2.3	(2.9)	2	不	明	不明	なし	なし	なし	未記載

イブ6棟のうちで、自然堤防上に位置する住居群は、1棟を除き貼床が認められている。これは、この時期の住居の構造の一つの傾向性としてとらえることもできる。一方、この住居の立地する地層をみると、シルト層が比較的薄かったり、場所によっては欠陥しているところもあり、礫層が高い位置にあるというような地質的な面がかなり影響しているものとも思われる。

最後に、Cタイプについてみると、カマド前における貼床(CE12)、南半1/2のみの貼床(BF21)等の部分的な貼床の他に、壁沿いに長楕円状の浅い掘り込みをつくり出し、それをシルトと黒褐色土とシルトの混土で埋め戻したとみられる状態のものも存在する。このことは、時期的には比較的新しい時期に属すると思われる住居にみられるが、これが、そのまま、その時期の特色としてあげられるかは少し疑問が残る。ただ、CE12、BF21は、縄文時代のピットと関係したための貼床、礫層が上っているための地質的な面の制約があったための貼床とも考えられる。しかし、壁沿いのそれは、その様なこととは関係なく、当初よりある程度排水的な面を考慮したとも考えることは無理であろうか。これは、時期的には、本遺跡において最も新しい時期に属するだろうと思われる住居に存在することからも、それを一つの傾向性としてあげてもよいものであろう。

(d) 柱穴 検出された27棟の竪穴住居跡、竪穴状遺構のうち、柱痕が残存したり、その形跡が明確なものはないが位置、配置等からそれと推定したものが存在するものは13棟である。そのうち、4個が明確に柱穴と推定される住居跡は8棟である。柱穴の配列状況についてみると、その位置の違いにより大きく二グループに分けられる。

A………対角線上に位置するもの……KA06, JG06, JF15, TG27, BF21, (JJ24)

B………対角線上の位置より若干一方向に片寄る……BD62, CE12, DB09, (BF50), (CB03)

Aタイプは、いずれも壁よりほぼ等間隔の位置に4本存在するが、JG06においては、建て替え或いは拡張が推定され、又、JJ24においては、その規模から推定して副柱の存在したことも充分あり得ると考えられる。

一方、Bタイプは、それぞれ片寄りに特徴が認められる。即ち、BD62は南側の柱列が若干西により、菱形状の配列を示し、CE12においては、柱穴が南西に、BH56は東に、BF50は北にそれぞれ寄り、DB09においては、南壁際まで寄る。

次に、規模と柱穴との関係をみると、一边が4m以上のものは必ず柱穴が存在し、4m以下の小規模な住居跡には認められないものが多くなる。これは、上屋構造や居住空間等の関連で考えなければならないものであろう。

時期的な面からみると最も古いと思われるCH74を中心とする3棟には柱穴が認められず、自然堤防上のJJ24を中心とする一群には基本的に4本認められる。又、段丘上的一群で自然堤防上のそれより新しい時期のものは、4m以下の小規模のものには認められない。

(e) カマド 検出された27棟のうち全貌が明らかにできなかったDE77を除く26棟についてまとめると、およそ次のようなことがいえる。

A …カマドの存在しないもの—CH74, DA62, CJ50, CH30, CG12.

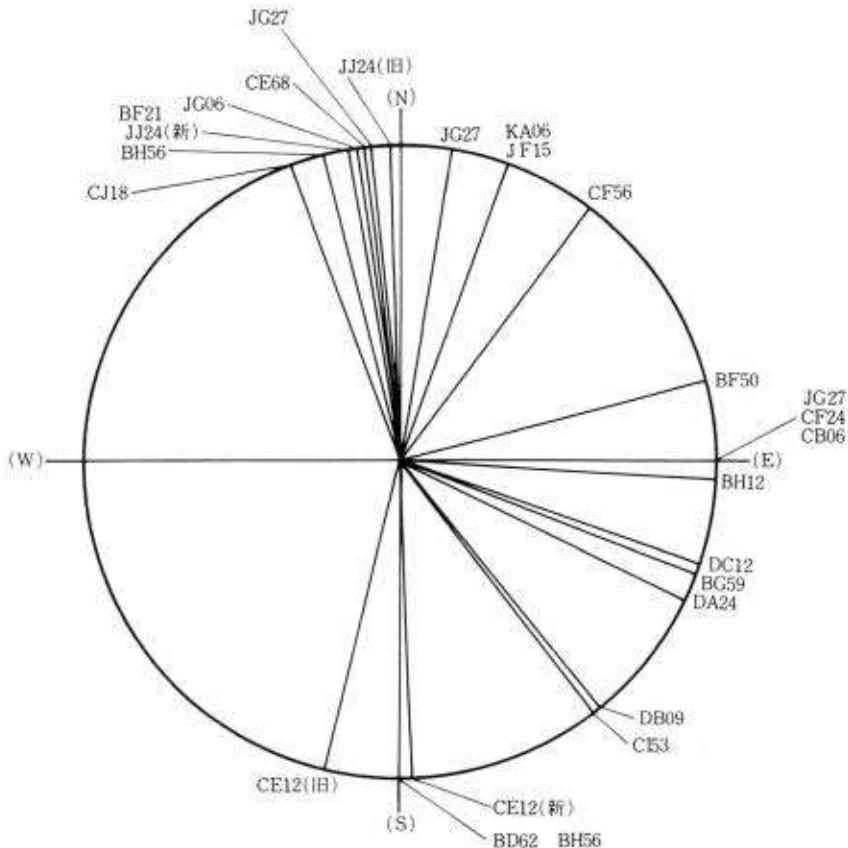
B …カマドの存在するもの—上記の住居を除く全ての住居(但し、完全な形での残存はない)

(1) 付設場所

その付設された場所により下記のように3つのグループに分けることができる。

I類 北壁に位置するもの ()内は磁北に対するカマドの主軸の振れ(第144図)

- 1 北(10°以内)………JG27, JJ24(旧・新), JG06, BF21, CE68,
- 2 北西(20°以内)………CJ18, BH56(旧),
- 3 北東(20°以内)………JG27(新), JF15, KA06,
- 4 北北東(30°以上)…CF56.



第144図 カマドの主軸方向分布図

II類 東壁に位置するもの

- 1 東北東(70°)…………BF50.
- 2 東(90°～110°)…………JG27(新), CF24, CB03, BH12.
- 3 南東(110°以上)…………DC12, BG59, DA24.

III類 南壁に位置するもの

- 1 南(180°～190°)…………BD62, BH56(新), CE12(新).
- 2 南東(140°前後)…………DB09, CI53.
- 3 南南西(190°以上)…………CE12(旧).

カマドが当初北壁に付設されたものが全体の約48%, 東壁が33%、南壁19%であり北壁付設の住居が過半を占めている。又、西壁付設の住居が1棟もない。更にその位置関係についてみた場合、北壁の場合は、CF56を除いては北壁中央に位置しているものがほとんどである。南東壁の場合には、東壁中央というものはCF24のみで他はいずれも北に寄った位置に付設され、南壁の場合は中央に位置するもののがなく東或いは西に寄っているという傾向性が認められる。又、住居内における新旧関係からみたカマドの移動状況をみると、傾向としては付設位置より右廻りの位置即ち、北→東→南というような位置移動関係が認められるようである。又、集落間のカマド位置の変化をみると、大きくは時期により北壁→南壁→東壁という変遷をたどることがみうけられる。

(2) カマドの構造

検出されたカマドの残存状態から推測すると3つのタイプが認められる。

A. シルトで構築し両側壁の先端には立石が存在し、かけ口の石として長楕円の川原石をのせて門状に焚口を構築していたと推測されるもの。燃焼部内に支脚石が2個存在するが、石のかわりに土器の底部を伏せた形にした支脚が存在するものもある。…JG27, JJ24, KA06, JG06, JF15, DB09.

B. 両側壁をシルトで構築し、芯材として川原石或いは土器を使用している。…CE68, BH56, BG59, CJ18, CI53. この場合川原石は両側壁の下の床面に埋め込み立石させて芯としている。

C. シルトで構築されているもの…BF21, CF56, DA24, BD62, CE12, CB03, BF50, BG59. A, Bタイプのカマドは、上部削平などにより明確でないものも存在するが、煙道部はいずれも壁をくりぬきトンネル状、或いは半地下式の溝状を呈し規模は150cm前後のものが大半である。

Cタイプは半地下式のものや煙道部の短いものが増加する傾向があるようである。

AタイプはDB09を除きJ区自然堤防上に位置する住居に普遍的にみられる構築方法でありその時期におけるカマド構築の1つのパターンを示しているものである。又、両側壁の構築に

あたってはJG27のように版築状の構築が認められたり壁の保護に土器片を使用したり、かなり構築にあたり手を加えている様子が認められる。

Bタイプにおいては、いずれもAタイプを有する住居よりは新しい時期の住居に多く、特に割合からみると自然堤防上の住居に後続する時期と思われるものに比較的多いことは、カマド構築法の変化が時の変化とも一応対応していることを示すものと思われる。それがCタイプになるとより、新しい時期のものに多くみられ、燃焼部が壁外に一部張り出す形のものもみられるなど、時と共にカマド構築法が変化している様子が認められる。即ち、猫谷地遺跡においてはA-B-Cのカマド構築法の変化が大きな流れとしてとらえることができるものである。最後になったがカマドをもたない住居の中で特にCH74、DA62、CJ50のこれらの住居においては、床面中央近く或いは、南辺、東辺近くに人頭大の川原石が数個かたまって存在しており、その位置や周辺に小さなピットが存在する（石を据えた後とも推定できる。）こと等から床面の焼け面の存在など多少不明確な点も認められるが炉跡が存在したことも考えられる。

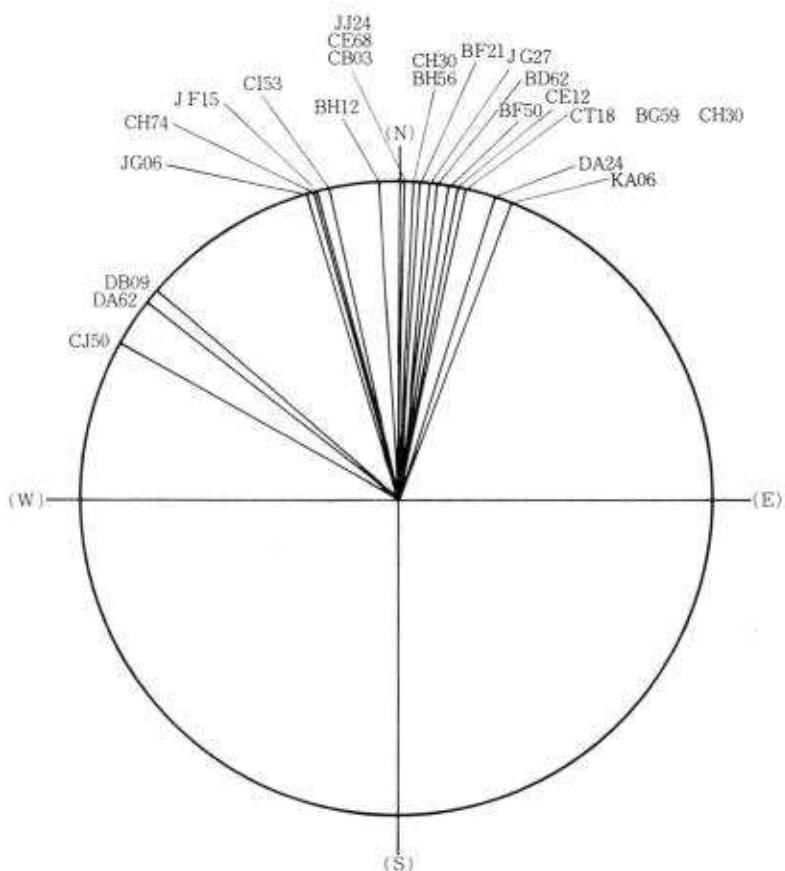
(f) その他

住居内の施設としてその他に認められるものに一般に貯蔵穴状ピットといわれる皿状或いは深鉢状のピットが存在するが、本遺跡の住居についてみると、明確に貯蔵穴状ピットといわれ「何らかの物の貯蔵に使用された」とみられるピットはほとんどない。ただ、その位置や、形態から、それと類似のものであろうと思われるものが2、3存在する。その1つはCI53住居跡のカマド右側の径70×60cm、最大の深さ約30cmの深鉢状ピットで、この中からは外面に他に比べてススの付着が多い甕が3個体出土している。又、CB03住居跡のカマドの右脇に径60×34cm、深さ約20cmの深皿状のピットがある。その他には、BH56住居跡の旧カマドの左側に存在する深皿状のピット、CE68住居跡の旧カマドの右側に存在する袋状のピット等がそれに該当するものと思われる。これらは、一部土器片の出土はあるにしても何を貯蔵したかを証明するものは出土しておらず、貯蔵穴状ピットについての性格、位置づけは資料の増加に待つばかりと思われる。

この他に、特殊なピットとしては、ピット中央に一段低い小ピットがある「ロクロピット」といわれるピットに類似するものがDC12住居跡の床面より検出されている。この住居は削平のため全体が明確にできなかったものであるが、カマドのつくりが他に比べて特殊な面もみうけられ、あるいは、他の住居と異った性格の住居とも考えられるが推定の域をでない。

おわりになったが、カマドの位置とは関係なく南北壁の中点を通る軸線が磁北からどの程度の振れを示しているか計測しそれをまとめてみたのが第145図である。これによると本遺跡の住居は2つの方向にまとまっていることがいえる。1つは磁北を基準としてそれぞれ西、東へ約20°の偏りを示す20棟の住居群と、西へ50°～62°の偏りを示す3棟の住居群である。このこと

は、約9割にあたる住居がほぼ南→北方向を向いているということを示しており、地形の立地状況により違いはあるとは思われるが、日照や風向など気候条件を考慮した場合、現代における家屋の配置条件と類似した面をもっていることは興味深いことであると考える。又、ほぼ北西→南東を向く3棟のうち2棟は最も古い時期に属する住居であることは、このことからすぐには時期差やその時期の家屋の配置の特色としては片づけられないものとは思われるが、カマドをもたない住居の立地の一面を表わしているものかもしれない。



第145図 住居跡主軸方位分布図

2 出土遺物

A. 出土土器の分類

本遺跡の調査では、縄文土器をはじめとして土師器、須恵器等多量の遺物が完形あるいは復元可能な形で多量に出土した。その中で、縄文時代に関係するものは既述してあるので、ここでは、土師器、須恵器を中心に述べることにする。

なお、分類にあたっては、器種ごとに、その成形や焼成技法、再調整技法や器形上の特徴などから細分している。

本遺跡で出土した土器の器種には、環、高环、甕、壺、長頸壺、甑、鉢、土鍋、片口土器、手捏ね土器、蓋、などがある。これらのうち出土量の少ない鉢、長頸壺、土鍋、蓋、片口土器、手捏ね土器、等は特に分類を行わない。

[**环**] 环は製作の際のロクロ使用の有無及び焼成方法の違いによって大別される。

环A類 ロクロ未使用のもので酸化炎焼成のもの

B類 ロクロ使用のもので酸化炎焼成のもの

C類 ロクロ使用のもので還元炎焼成のもの

[**环A類**] 环については、口縁部、底部の形態の違い、体部と底部との境の段の有無等いろいろな要素の組合せによる分類(記号化)が可能であるが、ここでは、それらの諸要素の組み合せ関係を考慮しながら特徴をまとめて分類すると次のようになる。

A₁類 口縁部が外反或いは外傾気味に立ち上り底部との境に段を有し、対応する内面にくびれの認められる丸底 (1) 丸底のもの (2) 平底風のもの

A₂類 口縁部が外傾気味に立ち上り底部との境に変換点(棱)を有し内面にくびれの認められる丸底

A₃類 口縁部が内湾気味に立ち上り底部との境に沈線状の段を有する丸底

A₄類 口縁部が内湾気味に直立する丸底

a. 段を有するもの b. 無段のもの

A₅類 口縁部が開き気味に外傾し、底部との境にわずかに変換点が認められ内面にくびれのある丸底

A₆類 口縁部は外反するが体部は変化なく内湾して底部に至る丸底

A₇類 口縁部が内湾気味に立ち上る丸底

a. 形式的な段が認められる b. 無段のもの

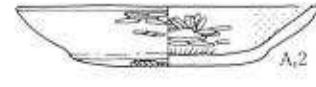
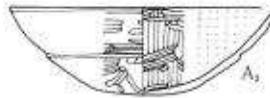
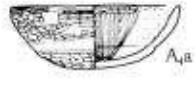
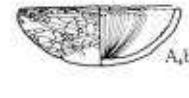
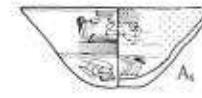
A₈類 口縁部が強く内湾して立ち上る平底風の丸底

a. 形式的な段の認められるもの b. 無段のもの

{ ①口径に比して器高の浅いもの
②口径に比して器高の深いもの

A₉類 口縁部が外傾気味に立ち上る平底のもの

坏(A類)分類基準表

	口縁部の形態	段の有無	内面のくびれの有無	底部形態	調整技法
口 ク ロ 未 使 用	A ₁ 外反、外傾気味	有	有	1. 丸 底 2. 平 底 層	口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ、又は、ヘラミガキ、ヘラミガキのもの。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。
	A ₂ 外傾気味	変換点(棱)	有	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内面は黒色処理されている。
	A ₃ 内湾気味	沈線状	無	丸 底	内外面ともにヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。
	A ₄ 内湾気味に直立	a. 有 b. 無	無	丸 底	外面はナデ後ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。
	A ₅ 開き気味に外傾	変換点(棱)	有	丸 底	外面は、ナデ一部ミガキ、又はハケメをそのまま残すものもある。内面はナデ又はヘラミガキ、内黒、非内黒の両者あり。
	A ₆ 外 反	無	無	丸 底	外面ナデ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。
	A ₇ 内湾気味	a. 形式的 b. 無 段	無	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理されている。
	A ₈ 強く内湾	a. 形式的 b. 無 段	有	丸 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理されている。
	A ₉ 外傾気味	無	無	平 底	内外面ともにヘラミガキ、内黒処理されている。
  					
   					
   					
  					

坏(B類)分類基準表					
	器面調整技法	底部の切り離し調整の有無	器高と底径の関係	体部～口縁部形態	
口 使 用	B ₁ 内面ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り 底部周辺及び底部手持ちヘラケズリ	I 器高低く、底径大 (5cm以下) (5.5cm以上)	a. 直線的に外傾	
	B ₂ 内面ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り 底部周辺及び底部回転ヘラケズリ			
	B ₃ 内面ヘラミガキ・黒色処理	回転糸切り・無調整	II 器高低く、底径小 (5cm以下) (5.5cm以下)	b. 下半にふくらみを持ち 内済気味に立ち上る	
	B ₄ 内面ヘラミガキ・黒色処理	切り離し技法不明			
	B ₅ 無調整	回転糸切り・無調整	III 器高高く、底径大 (5cm以上) (6cm以上)	(赤焼き土器)	

[坏B類] 器面の調整技法、底部の切り離し技法等の違いにより細分することができる。

B₁類 内面ヘラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りのもので、底部周辺及び底部が手持ちヘラケズリされているもの

B₂類 内面ヘラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りのもので、底部周辺及び底部が回転ヘラケズリされているもの

B₃類 内面ヘラミガキ、黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りで再調整のないもの

B₄類 内面ヘラミガキ、黒色処理されているが、底部の切り離し状態が不明のもの

B₅類 内外面調整なく、黒色処理のない、底部の切り離しが回転糸切りのもの(赤焼き土器)
これらは、更に、器高と底径の関係から3類に分類することができる。

I類 器高が低く、底径が大きいもの(器高5cm以下のもの・底径5.5cm以上のもの)

Ⅱ類 器高が低く、底径も小さいもの（器高5cm以下のもの・底径5cm以下のもの）

Ⅲ類 器高が高く、底径も大きいもの（器高5cm以上のもの・底径6cm以上のもの）

又、底部から口縁部にかけての形態から（a）直線的に外傾するもの（b）下半にふくらみをもち内湾氣味に立ち上るもの2つに細分することができる。

〔坏C類〕 器形の特徴、底部の切り離し技法や再調整の有無等から細分することができる。

まず、底部の切り離し技法と再調整の有無から3つに分類することができる。

C₁類 回転ヘラ切り後手持ちヘラケズリされているもの

C₂類 回転ヘラ切りにより切り離され再調整のないもの

C₃類 回転糸切りにより切り離され再調整のないもの

更に、底部の特徴から①平底のもの②やや丸底風のもの、の二つに細分され、器形の特徴からは、底部から口縁部にかけて（a）直線的に外傾するもの（b）下半にふくらみをもち内湾的に立ち上るもの（c）下半がわずかにふくらみ直線的に立ち上り口唇部が外反するものの3類に分けられる。

坏(C類)分類基準表			
類	底部の切り離し技法と再調整	底 部 形 態	体部一口縁部形態
C ₁	回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリ	I 平 底	a. 直線的に外傾する
C ₂	回転ヘラ切り後、再調整なし		b. 下半にふくらみをもち、内湾氣味に立ち上る
C ₃	回転糸切り、再調整なし		c. 下半がふくらみをもち、直線的に立ち上り口唇部が外反する

The diagram illustrates seven types of vessel bases, each labeled with a code: C1-Ia, C1-Ia, C1-Ib, C1-Ic, C2-IIa, C1-Ia, and C1-Ib. The first four are from the first row under category I (平底), and the last three are from the second row under category II (やや丸底風). The bases show various profiles, some with straight outer slopes and others with inward-curving or flared shapes at the bottom.

〔壺〕 壺は製作の際のロクロ使用の有無及び焼成のちがいにより大別される。

壺A類 製作に際しロクロ未使用的もので酸化炎焼成のもの

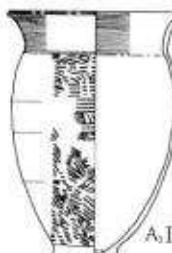
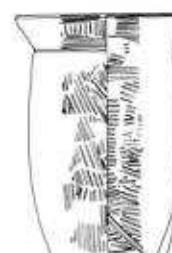
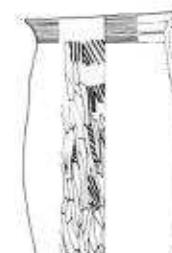
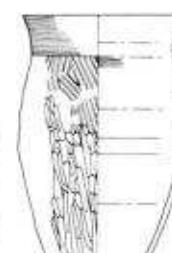
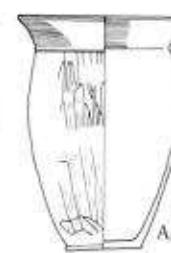
壺B類 製作に際しロクロ使用のもので酸化炎焼成のもの

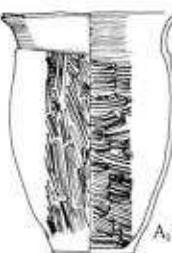
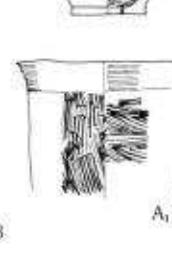
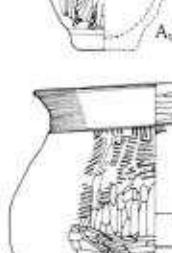
壺C類 製作に際しロクロ使用のもので還元炎焼成のもの

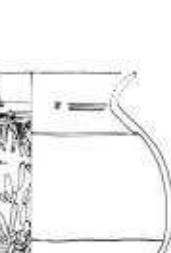
〔壺A類〕 器高からその分布をみた場合最大35cm～最小11.5cmまで広範囲に分布することから、まず器高により三大別した。その結果は次の通りである。

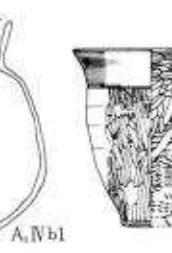
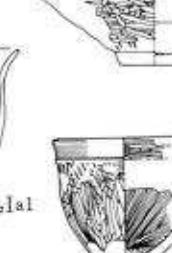
図(A類)分類基準表

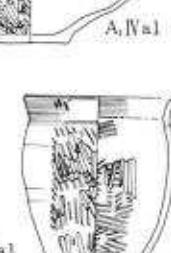
口 クロ 未 使 用	全 体 的 な 特 徴	口縁部の特徴	口 唇 部 の 形 態
			1. 単純にまるめ特に変化のないもの 2. 口唇部が上方へつまみ出され、内側に棱のあるもの 3. 上方へつまみ出され、口唇部がうすくなっているもの
大 A ₁	I 長胴で肩部に段を有するもの 口径=体部径 II 長胴で肩部に段の無いもの 口径>体部径 III 球胴で肩部に段を有するもの 口径=体部径 IV 球胴で肩部に段の無いもの 口径>体部径	a. 大きく外反する	1. 単純にまるめ特に変化のないもの 2. 口唇部が上方へつまみ出され、内側に棱のあるもの 3. 上方へつまみ出され、口唇部がうすくなっているもの
中 A ₂	I 同上 II 同上	b. 直立気味 ゆるく外反する	
小 A ₃			











A₁類 大形で器高が25cm以上のもの（大甕）

A₂類 中形で器高が15～25cm以内のもの（中甕）

A₃類 小形で器高が15cm以下のもの（小甕）

これらの甕について形態の上からみると口縁部≥体部最大径、口縁部<体部最大径の2種に分けることができ、前者は、おおむね長胴であり、後者は球胴のものといえる。又、これらは肩部に段を有するものと段の無いものとがあり、これらの要素を組み合せると4類に細分できる。但し、中・小甕においては絶体数が少ないと上記の組み合せの無いものも多く、又、小甕においてはc、d類は皆無である。

I類 長胴で肩部に段を有するもの

III類 球胴で肩部に段を有するもの

II類 長胴で肩部に段の無いもの

IV類 球胴で肩部に段の無いもの

更に、口唇部の形態から (a) 口縁部が大きく外反、外傾するもの (b) 口縁部が直立気味にゆるく外反、外傾するものとに分けられ、口唇部の特徴を加味すると、(1)単純にまるめて特に変化のないもの、(2)口唇部が上方へつまみ出されていて内面に稜を有するもの、(3)単に上方へ薄くつまみ出されているものに細分できる。

器面調整は、外面がヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面は、ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ミガキと、ともに多くの手法を組み合せているものが多い。その中でもハケメの技法のものが多いのが目立つ。底部は木葉痕そのままのものが多いが、中央部がへこみ、周辺のみヘラケズリしているものや、全体をヘラケズリしているもの等も存在する。

〔甕B類〕 器高の関係から、A類と同じく3大別した。但し、A類に比べて復元資料が少なく、口径との関係から器高を類推したものもあり多少難点があることはいなめない。

B₁類 大形で器高が35cm以上のもの（大甕）

B₂類 中形で器高が15～25cmのもの（中甕）

B₃類 小形で器高が15cm以下のもの（小甕）

口縁部と体部最大径の関係からみると口縁部<体部最大径のもの、即ち、球胴スタイルのものは認められず、いずれも長胴スタイルのものだけである。そこで、口縁部や口唇部の形態から次のように細分される。

I類 「く」の字状に長く外反する。

II類 「く」の字状に短く外反する

III類 単純に短く外反する

これらは、口唇部の形態から、(a) 上方へつまみ出しているもの (b) 上下につまみ出しているもの、(c) 下方へつまみ出しているもの、(d) 単純にまるめているものに分けられる。

器面調整は、内外面ともにロクロナデが主体であるが、外面には、叩き目が認められるもの、

縹(日類)分類基準表		
	口縁や口縁部の形態	口唇部の形態
口大 クロ中 使用小	I 「く」の字状に長く外反する II 「く」の字状に短く外反する。 III 単純に極端に短く外反する	a. 上方へつまみ出している b. 上、下につまみ出している。 c. 下方へ強くつまみ出している。 d. 単純にまるめている。
	B ₁ Ia B ₁ Ib B ₁ Id	
	B ₁ IIa B ₁ IIb B ₁ IIc	
	B ₁ IIIa B ₁ IIIb B ₁ IIIc B ₁ IIIe	
	B ₂ IIa B ₂ IIb B ₂ IIc B ₂ IIe	

叩き後ロクロナデの認められるもの等がある。又、内外面ともに、ロクロナデより多少目の粗いハケメ状のものによるとみられるナデも認められる。底部の調整は判然としないものが多い中で、ヘラケズリにより調整されているものが目立つ程度である。

〔縹C類〕 復元資料も少なく細分するだけの点数もないのに特に分類は行わない。復元できたものはそのほとんどが器高20~25cm前後のもので、それ以上大きなものと推定されるものは1点のみで、他は破片だけである。

〔高坏〕 高坏は脚部のみのものを含めて12点出土したが、器形の特徴から3類に分けけることができる。

A類 坏部は、体部が強く外傾し口縁部も直線的に外傾しているもので、体部と口縁部の変換点に角がつくものである。脚部は中空で円錐台状を呈し、坏部に比べて高い器高を有し、裾部は更に外方に開いているものである。

B類 坏部は、体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上るもので外面に段を有し対応する内面にはくびれのみられるものである。脚部は、坏部に比べて低く、坏部底面より直接そり気味に外方に開くものである。全体的器形が「X」字状のものである。

C類 坏部は、体部から口縁にかけて内湾気味に立ち上るもので外方に軽い段を有するものと、みられないものがある。脚部は、いずれも坏部底面より外方に開くものであるが脚部の特徴より2つに細分できる。

I 脚部がそり気味に開くもの II 脚部が内湾気味に開くもの

〔高坏の製作技法〕 A類の高坏の製作技法を剥離面等から観察すると、当初、円錐台状の脚部を作成し、それに坏の体部を取り付け、更に、外傾する口縁部分を付着させ成形したものようである。

器面調整技法は、坏部外面はハケメ後にヘラミガキがなされ、内面はハケメ、ナデ後やはりヘラミガキがなされている。脚部外面は縱方向のヘラミガキがなされ、裾部分はハケメ後ヘラ

高坏分類基準表			
類	坏部の特徴	脚部の特徴	器面調整
口 ク ロ 未 使 用	A 体部～口縁部 直線的に強く外傾 変換点に角がつく	中空で円錐台状、裾部は外方へ開く、脚高は高い	朱塗あり ハケメ後ヘラミガキ ハケメ後ヘラケズリ
	B 体部～口縁部 外傾気味 有段	脚高低く、坏部底面より直接外方へ開く	内面黒色処理 ヘラミガキ ヨコナデ
	C 体部～口縁部 内湾直立気味 有段・無段あり	I 脚高低く、外方へそり気味 II 脚高極端に低く「八の字状」	内面黒色処理 処理なし ヘラミガキ、ヨコナデ

The figure consists of six detailed line drawings. At the top left is a side view of a shallow bowl labeled 'A'. To its right is a base section labeled 'CI' showing a wide, flared foot. Below 'A' is a more complex drawing of a tall, slender vessel with a flared base, also labeled 'A'. To its right is a base section labeled 'CII' showing a narrow, deep foot. In the center is a base section labeled 'B' showing a wide, shallow foot. The drawings illustrate the structural differences between the three categories defined in the table.

ミガキが施されている。又、内面は棒状のものでおさえたシボリメのような痕がみられる。环部と脚部の接合部分はハケメ後ヘラケズリがなされている。1点は环部内面に朱塗りが施されていたものと思われるものである。

B、C類についてみると底部を高台状に引き出した环部と、脚部とを別個に作成し、それらを接合し内外面よりナデて成形している。時として脚部内面に粘土塊を加え押圧して接合している場合もみられる。なお、極端に脚部の低いものは直接环部より引き出しているものもある。器面調整技法は、环部は内外面ともにいねいなヘラミガキがなされ黒色処理しているのが一般的である。又、环部と脚部の接合点は縦方向のヘラミガキやヨコナデが認められる。脚部はヨコナデでととのえられているものが多く、中にはヘラミガキがなされているものも認められる。

[壺] 11点出土している。完形或いは復元可能なものは3点と非常に少ない。ロクロ未使用のものとロクロ使用のものがあるが、ロクロ使用の長頸壺は完形もなく個体数も少ないので特に分類は行わない。ロクロ未使用のものは、口縁部や体部の特徴から3類に分けられる。

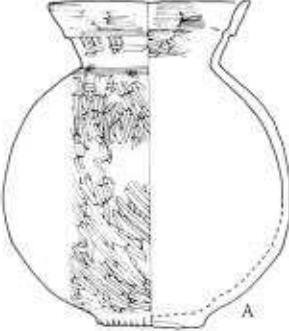
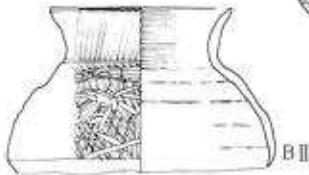
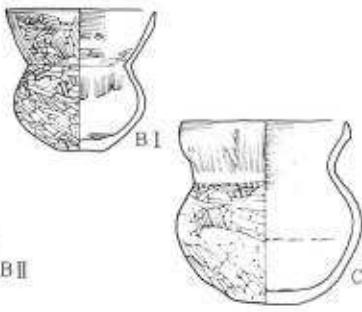
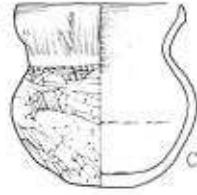
A類 複合口縁を有するもので体部が球状のもの

B類 単純口縁を有するもの

C類 外反直立するもので体部が球状のもの

これらの中でB類は、口縁部が外傾気味で体部が算盤球状のもの(I)と外反気味のもので体部

壺 分 類 基 準 表				
		口 縁 部 の 特 徴	大 き き	器 面 調 整
ロ ク ロ 未 使 用	A	複 合 口 縁 体 部 球 状	大 形	外面ヨコナデ・ハケメ後・ミガキ内面・ナデ
	B	單 純 口 縁 I 体部算盤玉状 II 体部球状	小 形 中 形	外面ハケメ後ミガキ、内面ナデ一部ミガキ
	C	外 反 直 立 体 部 球 状	中 形	外面ハケメ後一部ミガキ・内面ナデ

が球状に近いもの〔II〕とに分けられる。

器面調整は、外面はハケメ後ヘラミガキが主体をなし、内面はナデが主体的である。底部は上げ底状のもの、丸底状のものとがある。

〔瓶〕 8点出土しているが、底部の破片のみで器形の不明なものが3点存在する。底部の特徴から2類に分けることができる。

A類 底部に6~7穴の孔を穿っている多孔式のものである。器形は、口縁部が外傾し体部もほぼ直線的に外傾している逆台形に近い器形のものと、口縁部が外反し体部から底部にかけて丸味を持つものがありいずれも最大径が口縁部にあるものである。

B類 無底式のものである。底部の特徴から2類に細分することができる。

I類 底部横に細孔を有するもので、口縁部が外反し体部がわずかに膨む長胴形である。

II類 底部に細孔等のないもので、口縁部が緩かに外反し体部に段を有する深壺形、同じく口縁部が外反し体部から底部にかけて直線状に底部に至る壺形のものがある。

〔瓶の技法〕 A類の底部は外部より棒状のもので内面に向けて穿孔したもので、底部は後で接合した可能性がある。一方、B類のものは器形が特殊で当初より瓶としてつくられたものではなく再利用されたと考えた方がよさそうなものである。

器面調整は、それぞれ多少の差はあるが外面はハケメ後ミガキ或はヘラミガキ、内面はナデヘラミガキが一般的である。

瓶 分 類 基 準 表				
	底 部 の 特 徴	口縁部~体部の特徴	調 整 技 法	
ロ ク ロ 未 使 用	A 多孔式	外 傾 外 反	直 線 的 内 凹 的	ヨコナデ・ヘラケズリ ヨコナデ・ハケメ
	B 無底式 I 横に細孔あり II 細孔なし	外 反	長 艇 特 殊	ヨコナデ・ケズリ ハケメ後ケズリ

〔手捏ね土器〕 4点出土している。小量の粘土塊を指で圧して丸底の小形の環状につくったもので部分的に指によるナデがみられる。

〔片口土器〕 2点出土している。ロクロ未使用のもので体部から口縁部にかけて内湾する最大径が体部上半に位置する鉢形で、口縁部の一部を両側から内側に圧して注口部をつくり出しているものと、小形の環形の口縁の一部にやはり注口部をつくり出しているものとがある。器面調整は、前者はハケメ後ヘラミガキが主であり、後者はナデである。

〔筒形土器〕 1点出土している。口縁部を指で圧した痕のある平縁の円筒状のもので、巻き上げ痕が明瞭に残っている。外面に、わずかにケズリ痕が、内面にナデが認められる。焼成つくりともに粗雑である。

〔鉢〕 6点出土している。製作に際し、ロクロ未使用のものとロクロ使用のものとがある。ロクロ未使用のものは、体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上り口縁部がわずかに外傾する小形甕類似のものと、甕の下半部と同じ器形で椀形に近いもので、ロクロ使用のものは、口縁部が短く外反し、口唇部が上下に引き出されており最大径が体部中半～上半にある口径に比べて器高の低いものである。いずれも完全なものはない。

〔土堀〕 2点出土している。ロクロ使用のもので口唇部が上下に引き出され、口縁部が短く外反する口径の大きい堀状のもので器形の判明する1点は、底部が上げ底状になっている。

器面調整は外面下半を雑なケズリ、内面はナデで仕上げている。

〔高台付壺〕 2点出土している。製作に際しロクロ使用のもので、1点は、内面をヘラミガキ、黒色処理しており、底部を回転糸切り後、高台付着の際菊花状に底部をナデツケている。高台部の一部が欠失している。器形は内湾気味に口縁に立ち上り、口縁部がわずかに外反する。他は、須恵器で高台部の剥離痕を有する底部である。

〔長頸壺〕 ほぼ器形の判明するもの2点である。口縁部が頸部に比べてやや開き、肩部の張りが強く底部にかけてややすぼまる器形と推定される。底部のある1点は、完全な上げ底のものであり、外面に自然釉がみられる。いずれも須恵器である。

〔蓋〕 1点出土している。皿状につくり口唇部を内側に曲げのはして縁辺部をつくり出したもので、回転糸切り痕がつまみ部分になるところに認められる。つまみ部は不明である。調整技法はつまみ部にあたる周辺にわずかにケズリが施されているのみである。須恵器である。

B. 土器以外の出土遺物

〔和銅開珎〕 4枚出土している。完全なもの、完全に近いものが各1枚、他は破片で、いずれも銅錢である。これは、奈良時代に政府が鋳造したわが国最初の貨幣で、銀錢、銅錢の2種類存在する。初鋳年代は一般的には和銅元年(708年)とされ、当初銀錢が鋳造され、少しあいて銅錢が鋳造された。養老4年(720年)に鋳造技術の改良をはかり、新しい型の和銅開珎が造ら

れるようになった。その中で、銀銭は、鋳造後1年余りで鋳造廃止となり、そのために期間としても、量的にも少ないといわれる。それに比べて銅銭は、万年通宝、開基勝宝、大平元宝等の鋳造される天平宝字4年(760年)まで50数年間にわたって造られ、その鋳造量も多いものである。奈良時代の銭貨は、その後延暦15年(796年)に平安時代の通貨隆平永宝の鋳造まで他には加わるものはなかった。そして、これらの通貨の流通は延暦19年(800年)とし、それ以後廃止された。しかし、実際には、それ以後も通用したものとみられる。

次に、和銅開珎の流通面からみると、政府は銭貨の流通を盛んにするために、銭貨に有利な交換価値を与えた、官人の季祿の大半を銭貨に切りかえたり、蓄銭により官位の昇任を行うなど、その価値を認めさせるための諸政策を実施した。しかし、これが奈良時代になると、官吏の蓄銭という悪幣につながり流通が妨げられることになった。これらは、当時の主として中央における様相であり、地方においては、一部の中央からの官吏や地方の有力者が叙位の目的で蓄財したり、授位、賜物とし中央より銭貨を得ていることなども考えられ、およそ、流通とは程遠いものであったと思われる。

〔土錘〕 37点出土している。いずれも、中央部に最大径を有する紡錘形を呈するもので長さ5.2cm~4.1cm、孔径は0.3~0.4cm、最大径1.8~2.2cmのものである。重量は12.9g~17.9gである。

〔砥石〕 9点出土している。平面形は、矩形、バチ形、棒状、板状と数の割には多様である。多くは、断面形が長方形を呈しているが、2点だけ円形のものが存在する。これらは、面の両端あるいは一端のみが使用されている10cm内外の小形のものである。

〔紡錘車〕 9点出土しており、内2点は石製品であり他は土製品である。断面形は、台形、又は半円形状を呈しているものである。

〔鉄製品〕 鉄斧1点、刀子の一部と推定されるもの4点、鎌の一部と推定されるもの2点、他は釘の一部とみられるもの1点である。

C. 堆積土中の粉状バミス(火山灰)

検出された住居跡の堆積土中には部分的ではあるが粉状バミスの堆積が認められたものが存在する。この場合、上部の削平状況によって同じ1層とした場合でも堆積水準が異なることがあるが、ここでは、住居の堆積状況をそのまま記すこととする。

CH74住居跡……1層上部に小ブロック状 KA06住居跡……1層の中央付近

CE12住居跡……2層中にサンドイッチ状 BD62住居跡……1層、2層の間に小ブロック状

DC12住居跡……1層中に小ブロック状 BH12住居跡……1層中に小ブロック状

CI53住居跡……住居の中央やや西よりにレンズ状に床面近くまで堆積

以上のうち、DC12住居跡の粉状バミスについては、後章の「東北地方における奈良~平安時代遺跡埋土中の粉状バミスについて」(井上克弘、山田一郎)を参照されたい。

B 遺構出土土器の共伴関係（第14～16表）

前項においては本遺跡出土土器を中心に分類し、あわせて堆積土出土土器についても可能なかぎり分類した。第16表は、図示遺物の個体数を表わしたものであり、分類の結果から各住居跡の共伴関係と遺構間の組み合わせについて表わしたのが第14表である。この場合少し繁雑になったが堆積土出土遺物の様子についても表わしている。

以上の結果をもとに、各遺構間の土器の共伴関係や遺構内における土器の類似性等についてみていくこととする。この場合、より遺構の構築時期や使用時期の下限を示すものと考えられる床面およびカマド内、ピット内等遺構に密着した形で出土したものを中心と考え、堆積土出土遺物については、補足的なものとして考えることにする。

そこで、共伴関係組み合わせ表より住居跡間の出土土器の組み合せを比較検討してみると、次のようないくつかのグループに分けることが可能である。

〔第Ⅰ群〕 ロクロ未使用土器の壺が全く見られず、このグループのみに見られる高壺A類、壺A類や甕A_{IV}類、壺B I類よりなる一群で、住居によっては鉢が加わるもので、全体として器種、数量ともに少ない。これらに該当するのはCH74、DA62、CJ50の各住居跡である。

〔第Ⅱ群〕 ロクロ未使用土器だけで構成され、勿論須恵器も共伴しないもので、壺A₁、A₂類、甕A₁Ia、A₁Ib類、A₁IIb類、A₁IIa類、甕A・B類を主体とし、壺A₃、A₄、A₅、A₆類や甕A₁IIa、A₁IIIa、A₁IVa類等の大~小の甕や、住居によっては高壺B、C I類、壺B II、C類、片口土器等を有する一群である。このような構成をもつ住居跡は、J G 06、J F 15、J G 27、K A 06、J J 24住居跡であり、この中でもJ J 24住居跡は器種、量とも豊富で、この一群の中核をなしているものである。

〔第Ⅲ群〕 ロクロ未使用土器を中心とし、まだロクロ使用土器B類の共伴のないことはⅡ群と同じである。しかし壺や甕の構成の面でⅡ群とは大きく異なる。即ち、壺A₁類、甕A₁Ia類を主体に構成され、住居によっては壺A₃類、甕A₁IIa、A₃IIIb類の他、高壺C類、甕B II類や手捏ね土器を含み、まれに須恵器の大甕が共伴する一群である。特に甕の場合は口唇部の成形にⅡ群と比較して異なりが認められ、2・3群のものが多くなるのが特徴である。^(注1)

これらに該当する住居跡としては、B F 21、C E 68、C F 24住居跡があり、遺構出土土器としては小甕(A₃類)の他、甕の底部だけの出土であるが、堆積土中より壺A₁、A₄、A₅類、甕A₁Ia、A₁IIa、A₁IIIa類等の出土しているC J 18住居跡も、遺構内よりロクロ使用土器の出土していないことや堆積土中の出土土器の型式等を考慮に入れると、このグループに該当するものと考えてよさそうである。

〔第Ⅳ群〕 ロクロ未使用土器A類の共伴が少なくなり、ロクロ使用土器B類および須恵器C類が主体をなす一群である。主として壺B₁、B₂類、甕B₁I、B₁II類、壺C₁、C₂類等で構成され

ており、それに少ないながらも甕A₁ Ia, A₁ IIa, b, A₂ IIb, A₃ IIa類等のロクロ未使用の甕や、住居によっては环A₁類が含まれ、又、环B₁類等もみられる一群である。これらは环の構成関係に多少異なりが認められるので2群に分けた。

IV-a群 环B₁, B₂類、环C₁類が主体をなす。 IV-b群 环B₂類、环C₂類が主体をなす。

IV-a群に該当する住居跡は、CE12、BD62住居跡であり、IV-b群に該当する住居跡としてはBH56、CF56、CI53住居跡とCH30竪穴状遺構をあげることができる。なお遺構出土遺物が少なく、判然としないが、ロクロ未使用土器の甕A₂ IIa類やロクロ使用土器の甕B₁ I類、須恵器C₁類を共伴しているCD09住居跡は、まだロクロ未使用土器が共伴しているということでIV-b群に該当させてよいものだろう。

〔第V群〕 遺構出土土器としては、ロクロ未使用のA類土器が全く含まれない一群である。即ち环B₁類、甕B₁ II類が主体をなし、住居によっては环B₂類や鉢、土壙、須恵器の甕が僅かに共伴し、环C₁類は堆積土中より出土しているが、遺構関連の遺物としては出土していない。

これらに該当する住居は、BF50、BG59、CB03、DA24、DC12、BH12の各住居跡であり、BH12住居跡には环B₂類が共伴している。なおCG12竪穴状からは甕B₂類のみの出土であるが、堆積土中の遺物等の関係から一応このグループに入れてもよいものであろう。

以上、共伴関係を中心として本遺跡の出土土器を5群に分類し、その結果をまとめたものが第15表である。

C 出土土器の問題点と位置づけ

〔第I群土器〕

この群の土器は、ロクロ未使用のA類のみで、器種は球胴甕、壺（ヰ）、高环、鉢の4種である。环が共伴していないこと（堆積土中からはそれらしい破片の出土はあるが）と器種、出土量ともに少ないとことなど共通する点が多く、これは土器セット関係云々というよりは、遺構の遺存状況の悪さに起因するところが大であり、本来的には环をも含めて一つのセット関係を構成する一群であろう。

土器の特徴をみると甕の場合、口縁部の直立する下膨れ気味の球胴、壺は複合口縁の球胴のもの、口縁部が体部に比べて長く外傾し、体部が算盤玉状を呈するもの等がある。高环は环部口縁部と底部との境に角がつき、口縁部が強く外傾している。脚部は环部に比べて高く、下方に円錐台状に開き、裾部が外反気味に開くものである。

このような特徴をもった土器の一群としては、東北南半における土師器の第II型式（南小泉式）^(注2)をあげることができるが、南小泉式の一括資料を出土した岩切鴻巣遺跡第II群土器と強い類似性を有しているものが多い。その中でも壺E II類、高环C類等に共通する面が認められ、球胴の甕としたものは壺C類に類似しているといえる。^(注3)又、清水遺跡における第II群土器高环

^(注4)

第14表 出土遺物組み合せ

○ 遺構出土 ◎ 遺構堆積土出土
 ● 堆積土出土 △▲ 遺構・堆積土（破片）

Detailed description of the scatter plot:

- X-axis:** Labeled B_1/B_2 , representing the ratio of B1 to B2.
- Y-axis:** Labeled C_1/C_2 , representing the ratio of C1 to C2.
- Legend:**
 - Symbol Legend:** Circle (○), Circle with dot (●), Triangle (▲).
 - Color Legend:** White (white), Light Gray (light gray), Dark Gray (dark gray).
- Grid:** A grid is present on the plot area.

分類	環 B					變 B					土壤 種類	環 C					大 變 長 精 土 磁 鐵 古 塵 量 鑑 單 鍾 石 品 質				
	B_1	B_2	B_3	B_4	B_5	B_6	B_7	B_8	B_9	C_1		C_2	C_3	I	II	III	I	II			
	Ia	IIa	IIb	Ia	Ib	IIa	IIb	IIc	IId	a		b	c	a	b	c	a	b			
① CH74住居跡																					
② DA62住居跡																					
③ CJ 50住居跡																					
④ J G06住居跡																					
⑤ J F15住居跡																					
⑥ J G27住居跡																					
⑦ KA06住居跡																					
⑧ JJ 24住居跡																					
⑨ BF21住居跡																					
⑩ CE68住居跡																					
⑪ CF24住居跡																					
⑫ CI 18住居跡																					
⑬ BD62住居跡	○	○	○	○	○																
⑭ BH56住居跡			○	○	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	●	○	●				
⑮ CF56住居跡			○												▲	▲	▲				
⑯ CI 53住居跡				○																	
⑰ CE12住居跡	○			○	○	●	○	○													
⑱ BF50住居跡			●	○	●	●	●														
⑲ CB03住居跡																					
⑳ DA24住居跡	○	○	●	●			○	△	○	●	●	●			▲	▲	●				
㉑ DC12住居跡	●																				
㉒ BG59住居跡		●	○	○	○																
㉓ BH12住居跡				○			△		○						●	▲	●				
㉔ DB09住居跡															○						
㉕ CH30整穴狀			●							▲		○			○	○	○				
㉖ CG12整穴狀										△											

第15表 〈出土土器の組合せ〉

	土器	使用				器	須恵器				赤堀土器	
		(口) タ	(口) ロ	使用	用		(口) タ	(口) ロ	使	用		
第I群	壺	縹	長脚	球脚	高脚	蓋	瓶	鉢	土鍋	壺		
	A,1-A ₃ -A ₆ A ₈ -A ₉ (A ₁₂)(A ₁₃)	A,1a1 A ₃ 1a1 A ₃ 1b1 A ₃ 1b2 A ₃ 1b3 A ₃ 1b4 A ₃ 1b5 A ₃ 1b6 A ₃ 1b7 A ₃ 1b8 A ₃ 1b9 A ₃ 1b10	A,1b1 A ₃ 1b1 A ₃ 1b2 A ₃ 1b3 A ₃ 1b4 A ₃ 1b5 A ₃ 1b6 A ₃ 1b7 A ₃ 1b8 A ₃ 1b9 A ₃ 1b10	A,1b1 A ₃ 1b1 A ₃ 1b2 A ₃ 1b3 A ₃ 1b4 A ₃ 1b5 A ₃ 1b6 A ₃ 1b7 A ₃ 1b8 A ₃ 1b9 A ₃ 1b10	A	A+B1	○					
第II群					B+C1	B+○+C	A+B1+○	○				
											▲	
第III群	A _{1a} A _{1b} A _{2a} A _{2b} A ₃ (A ₁)(A _{2a}) (A ₁)(A _{2b})	A ₁ a1 A ₁ a2 A ₁ a3 A ₁ b1 (A ₁ b1) (A ₁ b2) (A ₁ b3) (A ₁ b4) (A ₁ b5) (A ₁ b6)	(A ₁ b1) (A ₁ b2) (A ₁ b3) (A ₁ b4) (A ₁ b5) (A ₁ b6)	(A ₁ b1) (A ₁ b2) (A ₁ b3) (A ₁ b4) (A ₁ b5) (A ₁ b6)	C1+H	B+○	○					
											○	
第IV群	A _{1b}	A ₁ a3 A ₁ b2 A ₁ b3 A ₂ b1 A ₂ b2 A ₂ b3	A ₁ a3 A ₁ b2 A ₁ b3 A ₂ b1 A ₂ b2 A ₂ b3	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	B ₁ a B ₁ b B ₁ c B ₂ a B ₂ b B ₂ c	△
第V群												

(〇〇〇)推積土 ●...底片)

第16表 圖示圖體個物遺示數

Ⅱの中にも一部類似性の認められるものが存在する。ただいずれの場合にも、本遺跡で鉢とした小型の土師器が存在していない点で多少の異なりがみられる。しかし大勢としては、器種、器形、技法等の点からみて、これらは南小泉式併行のものとみてよいものであり、編年表における第Ⅱ群に位置するものである。^(注5)

〔第Ⅱ群土器〕

この群の土器もロクロ未使用A類の土器群で、器種としては壺、高壺、甕、壺（増）、瓶、片口土器からなるものである。特徴をまとめると、壺は20cm前後の比較的大型である。丸底で底部との境に段を有するものが主体で、ほかに、これより多少小型の口縁部が外傾、外反する丸底等がある。調整技法は段から上がヨコナデ、底部ケズリ、同じくヨコナデとミガキ、ミガキとミガキ等のものが存在する。

甕は、長胴で大～小の各種存在するが比較的中型が少ないので目につく。器形的には大型ほど肩部有段のものが多い。体部最大径は口縁部にあるものが多いが、中位、下位にあり下ぶくれのものも二・三見うけられる。調整技法は口縁部はヨコナデ、体部はハケメのものが最も多く、ハケメ後ケズリや雑なミガキのもの等も散見され一様ではない。球胴のものは口縁部が外反する大型のみで、中・小型はみられない。肩部に段を有するものが多い。調整技法は口縁部はヨコナデ、体部はハケメ後ミガキのものが多い。

高壺は、壺部が外傾し、比較的浅く底部との境に明瞭な段を有し、脚部は低く外方に広がり全体的に「X」字状を呈すものと、壺部が椀状でやはり低い脚部のものとがある。いずれも口径が20cm前後と大型であり口径に比べて器高の低いのが特徴である。

壺は、口縁部が外反直立し、体部が球胴を呈するもので頸部のすぼまりが弱いものである。器面調整は口縁部ヨコナデハケメ、体部はヘラミガキ、内面はナデである。瓶は多孔、無底のもので外面有段、無段のものが共伴する。

以上のような特徴をもった第Ⅱ群土器と類似した内容を有するものとして、県内においては水沢市今泉遺跡、膳性遺跡、金ヶ崎町上餅田遺跡、のそれをあげることができる。第Ⅱ群土器とこれらの遺跡出土の土器と比較すると次のようなことがいえる。まず今泉遺跡の土器と比較すると、壺は、A₁、A₂類が「AⅡ、AⅢ類」に、A₃類は「AⅠ類」に類似しているが、体部の調整技法の点で本遺跡においては、ヘラケズリも多少認められるがヘラミガキが主体的なものに対して、ヘラケズリが主体である点で異なっている。又、器形の上でA₅、A₆類に類似するものが今泉遺跡では認められない。高壺は、B、CⅠ類と「Ⅱb、ⅠA類」に共通点が認められるが、「ⅡC類」のような小型のものは本遺跡では認められない。壺はC類と「Ⅱ—b類」に共通点が認められ、瓶は無底式のものは器形、器種とも非常に類似性が強く、ただ多孔式のものがみられない点で多少異なる。

甕は、器種、器形ともにいずれも類似性が認められる。

又、上解田遺跡におけるそれについても、土器組成の点で多少異なりは認められるものの、器種、技法等の点で共通した特徴をもっているといふことがいえる。

以上、土器組成や技法等の上で多少の異なりは認められるとしても、大筋としてはほぼ共通した内容を有する一群ということができると思う。これらの特徴をもった一群は東北南半における栗圓式に最も類似した内容を有するもので編年表ではⅣ群土器に該当するものである。

ただ、本遺跡における坏A₆、A₆類についてみた場合、口縁部との境に稜を有し、外傾気味に開くことや、口縁部が強く外反し無段であること等栗圓式の前の時期に位置づけられている住社遺跡出土の坏に類似した要素を強くもっているようにみうけられる。^(注9) 又、壺等の場合も比較的古い要素が残っている面もみられ、これらを考慮に入れると、この第Ⅱ群土器は少なくとも2つに細分できる可能性もあり得る。

〔第Ⅲ群土器〕

クロロ未使用土師器A類を中心として構成され、まれに須恵器C類が共伴する程度である。器種としては坏、甕（長胴、球胴）、高坏、甑、手捏ね土器等で構成されている。特徴としては、坏の場合小型化（口径10~15cm）の傾向がみられ、丸底の他平底風のものもあり、段についても一般に形式的になり、無段のものも出てくる。又、技法的にはミガキが主体をなす。次に甕は、全般的に体部の膨みが大きく、口径に比べて底径の大きいことが特徴である。又、頸部の段も形式的になり、不明瞭なものが増えてくる。口唇部も単にまるめているものではなく、上方へ引き出されて内面に稜を形成したり、薄くなっているものが多い。球胴のものは大型のものが認められない。更に壺（罐）、高坏、甑等小型化、あるいは消滅（？）する傾向がみられるのもこの群の特徴である。

以上のような土器と共に通する内容をもつ遺跡としては、水沢市石田遺跡、北上市尻引遺跡、^(注10) 藤沢Ic・Id遺跡、江釣子村鳩岡崎遺跡等をあげることができる。^(注11) ここでは石田遺跡を比較の対象にしてみることとする。石田遺跡では遺構区分におけるⅡ-(2)期に該当するD d03住やB e 50住、B i 53住等を中心とする住居群出土の土器で国分寺下層式に相当するものが存在する。これらは、坏の小型化、段の形式化、平底風のものの出現にあわせて、技法的にはヘラミガキが盛行しているものである。甕についてみると頸部の段の形式化や底部の大型化、等の特徴がみられ、これらは第Ⅳ群土器のそれと非常に類似しているものである。ただし、本遺跡の坏が、口径に比べて浅いものが多いのに対して、深かめのものが多いとか、朱塗りの球胴の甕がみられない点など多少の異なりは認められる。しかし、大筋としては、特徴的に類似のものとみてよいものだろう。以上のようなことからこのような内容をもつ土器群は、東北南半における国分寺下層式といわれるものと併行するもので編年表の第Ⅷb群に相当する。^(注12) ^(注13)

〔第Ⅳ群土器〕

ロクロ使用の土師器(B類)及び須恵器(C類)が主体を占め、ロクロ未使用の甕(A₁類)がわずかに共伴し、坏類は全く認められなくなり、器種、量ともに乏しいものになってきており、ロクロ未使用土器の末期的段階であると共にロクロ技術導入の初期的段階であるといえよう。器種としては土師器坏、甕(長胴、大、中)、鉢、須恵器坏、甕、長頸壺、赤焼き坏である。これらの特徴をまとめてみると、Ⅳa群のB、C類の坏は手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリのものが中心をなしているのに対してb群のそれは、回転糸切り無調整のものが多いことがいえる。甕は、A₁類のものは頸部の段が形式化され器形においてもⅢ群のそれとほとんど変化のないものがわずかに共伴し、甕B₁～B₃類においてはまだ口唇部を上方へ引き出し、ロクロ未使用の甕の口唇部のつくりの形態をそのまま残しているものもある。又、技法的にはタタキメ技法やロクロナデの技法を用いたものが主体をなしている。須恵器では、口唇部を上下に引き出し、体部上半に最大径のある甕や口唇部を上方に引き出している長頸壺などが存在する。このような土器内容を有する遺跡としては、江刺市宮地遺跡、水沢市石田遺跡、北上市尻引遺跡等がある。
(注14)

第Ⅳ群と同じような特徴をもつ土器群としては、宮地遺跡の第Ⅱ群土器の内容が最も類似したものといえる。ここで少し微視的にみるとロクロ未使用土器及びロクロ使用土器の坏、甕、特にその中でも須恵器の再調整のある坏の占める割合に相違が認められる。即ち本遺跡のそれはロクロ未使用土師器とロクロ使用土師器の占める割合の点からみると、ロクロ使用土器の占める割合の増加してきたⅡ-a₂群と類似する。しかし須恵器坏は無調整のもの及び再調整のものが混在しているのに対して、無調整のものだけに限られているという点で異っており、このことは、逆に本遺跡の特徴ともいえる。そして再調整の須恵器が混在しているという点では石田遺跡におけるⅢ期の土器群により近いものともいえる。このような内容の土器群は編年表における第Ⅴ群に相当するものである。

〔第Ⅴ群土器〕

ロクロ使用土器B、C類のみで構成されているもので、器種としては土師器坏、甕(長胴)鉢、土堀、須恵器坏、甕、蓋、赤焼き坏がある。土師器は回転糸切り無調整のものが主体をなし再調整のあるものがわずかに共伴する。器形的には口径に比較して底径の小さいものが増加する。又、甕は口縁部が短く外反し、口唇部を上方あるいは下方へ引き出しているものが多く、技法的には雑なヘラケズリが目立つ。特殊なものとしては土堀が存在する。須恵器は、体部が内湾的にゆるく立ち上る回転糸切り無調整のものが主体である。甕は体部上半に最大径を有する器形のもので、前群と器形的にはかわりないが調整は雑である。その他、口径に比較して底径の極端に小さく器高の割合高い赤焼き坏がある。

このような土器群は、ロクロ技術の本格化した時期における一群として把えることができる

もので、同じような内容をもった遺跡としては宮地遺跡、石田遺跡、相去遺跡等があげられる。編年表における第Ⅸ群に相当するものである。

- (注1) 猫谷地遺跡における出土土器のうち、第Ⅲ群～第V群にあたる部分については既に佐久間が各器種の型式分類と変遷に関する仮説のもとに第1様式～第3様式に分けており本稿においても大筋としてそれにそつたものである。「奈良平安期土器の型式分析—岩手県猫谷地遺跡出土土器の分析を通して」佐久間豊 考古学研究25-4 1978, 9
- (注2) 「東北土師器の型式分類とその編年」氏家和典 歴史-14 1957, 3
- (注3) 「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書-1- 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局 昭和49年3月
- (注4) 「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集 東北新幹線関係遺跡調査報告書-Ⅴ- 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局 昭和56年3月
- (注5) 「岩手県南部における古代土器群の編年試案」岩手県文化財調査報告書第59集～61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-Ⅹ-Ⅺ-（参考資料） 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- (注6) 「今泉遺跡」岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-Ⅺ- 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- (注7) 膳性遺跡現地説明会資料（昭和54年5月）及び高橋与門氏（県立埋分センター）の教示による。
- (注8) 「上餅田遺跡」岩手県文化財調査報告書第59集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-Ⅹ- 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- (注9) 「宮城県角田町住社発見の豊穴住居跡とその考察」考古学雑誌43-4 日本考古学会1958, 3
- (注10) 「石田遺跡」岩手県文化財調査報告書第61集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-Ⅺ- 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- (注11) 「尻引遺跡調査報告書」文化財報告書第17集 北上市教育委員会 昭和52年3月
- (注12) 「藤沢Ic・Id遺跡」現地説明会資料 岩手県埋蔵文化財センター 岩手開発 昭和52年6月3日
- (注13) 「鳴洞崎遺跡」岩手県文化財調査報告書第70集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-Ⅺ- 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- (注14) (注2)と同じ、及び「陸奥国分寺跡出土の丸底环をめぐって」柏倉亮吉教授 還歴記念論文集P77-氏家和典「観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集 東北新幹線関係遺跡調査報告書-Ⅳ- 宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台工事局 昭和55年9月
- (注15) 「宮地遺跡」岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係遺跡調査報告書-Ⅳ- 岩手県教育委員会 日本国有鉄道盛岡工事局 昭和55年3月
- (注16) 現地説明会資料 岩手県教育委員会 北上市教育委員会 1973年 1974年

3 遺構の構成と年代（第146図1・2）

前項では土器の特徴などを中心に土器群を5群に分類し、合せてその土器群の時期的な位置づけをした。こゝでは、その土器群とそれを伴う住居の前後関係や住居群の構成状況についてふれてみたい。住居の新旧関係を知るための一つの手がかりとして、重複関係とそれに伴う土器等から検討するのが一般的であるが、本遺跡においては、「B G 59住居跡がB D 62住居跡の東壁の一部を切って構築している。」という一例のみであり、これらの新旧関係は知りうるが、他の住居についてはそれができない。従って、ここでは、土器群との関係から検討することにする。

前項で分類した土器群は、そのまま、第Ⅰ期→第1群、第Ⅱ期→第2群、第Ⅲ期→第3群、というように以下第Ⅴ期、第5群までそのまま時間差におきかえることができる。それらをもとにして住居の構成と年代について検討することとする。

〔第1期〕

第1期を構成する住居は、C H 74、D A 62、C J 50の3棟で、北側段丘の南縁部にはばかたまつて位置する。規模はいずれも一辺が4~5.5mの3類に属する住居群で差があまり認められない。カマドを有していないこと、柱穴の認められないこと、鉄器、砥石が出土していないこと等が特色である。構築年代は第1群（南小泉式期）、古墳時代中期頃と推定される。

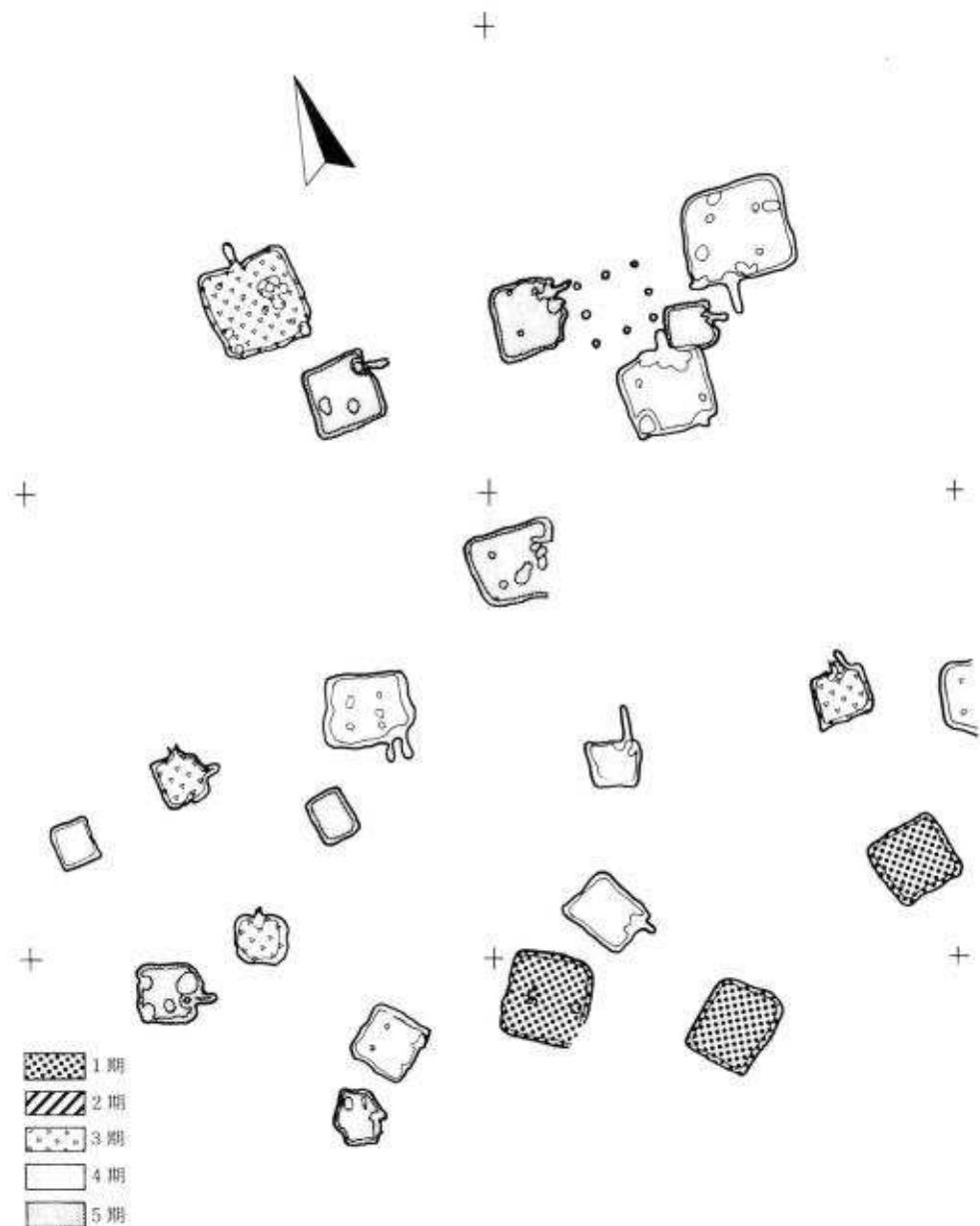
〔第2期〕

第2期を構成する住居は、J J 24、K A 06、J G 06、J G 27、J F 15の5棟で、最も規模の大きいJ J 24を核として、その周辺にその他の大中規模（3・4類）の住居がとりまくような形で南側の自然堤防上に立地する。基本的にはシルト、川原石を使ったカマドが北壁に付設され床面は貼床され柱穴が対角線上に4個配列されていること等が特徴である。鉄製品、鉄滓（分析結果参照）はJ G 27、砥石はK A 06、J J 24の各住居跡から出土している。

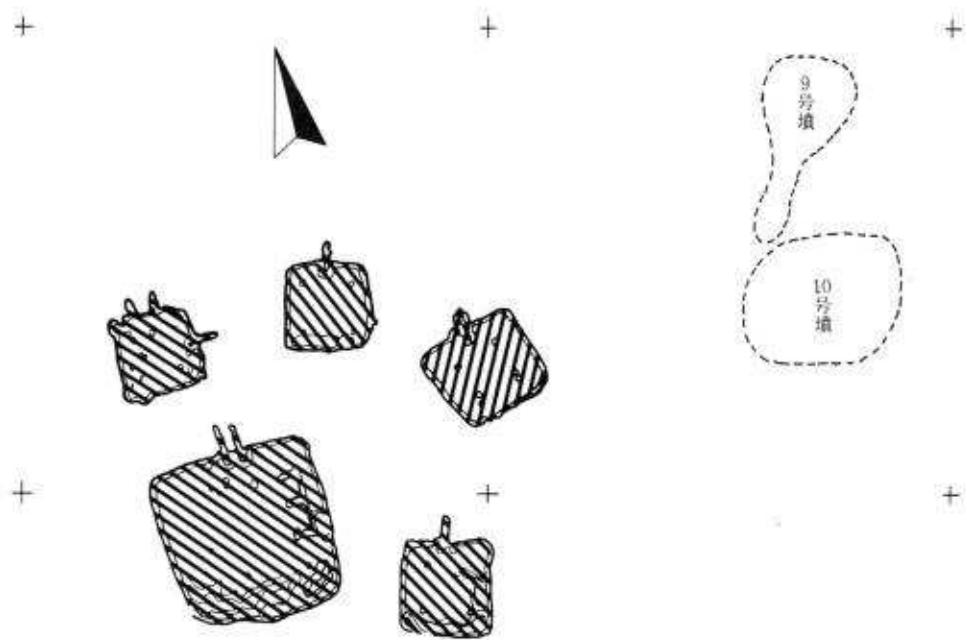
両者を合せた所有率は6割である。これらの構築年代は第Ⅱ群（栗園式期）古墳時代後期後半頃と推定される。ただ、既述したようにその中でも、J J 24住居跡は古い要素を有しており時間的に周辺の住居群の中で最も長期にわたって存在していたということも考えられる。その他、位置的にみてJ J 24住居跡の南に位置するK A 15ピット群の中に住居跡の存在した可能性も考えられ、この一群は6棟で構成されていた可能性もありうるだろう。

〔第3期〕

第3期を構成する住居はB F 21、C E 68、C J 18、C F 24の4棟であり、南側の段丘上に4類の規模のB F 21住居跡を北端に、南側に広い空間地帯を構成し、一見、円状に、1・2類の小規模住居が点在している一群である。カマドはシルトと芯材を使用したもの、シルトのみのもの等、多少構築法に差が認められる。付設位置は北壁が一般的であるが一部東壁に付設されるものもでてくる。柱穴は、大規模のB F 21住居跡のみで他には認められない。床面の構築に



第146図-1 遺構時期区分



第146図-2 遺構時期区分

もそのままのもの、貼床のもの等変化がでてくる。鉄器はB F 21・C F 24、堆積土からではあるが鉄滓がB F 21の住居跡から出土している。所有率は4割である。なお、この住居群で特筆されるのは「和銅開珎」を出土した、CE 68住居跡の存在である。この銭貨が古墳から出土している例は数例あるが床面から出土したのは県内では最初であり遺構の性格や年代を考える上で貴重な資料である。「和銅開珎」を使用して遺構の年代を決定しようと試みた論考には伊藤(注1)（1970）がある。又、佐久間(注2)（1978）は本遺跡のそれについて下限を限定するための危険性を除去するために胆沢城の設置年代等の他の要素を組み入れる必要性を述べ、その中において8世紀中頃の年代観を与えている。

以上のような結果を考慮に入れて土器群との共伴関係から第Ⅲ期の遺構の構築は第Ⅲ群（国分寺下層式期）奈良時代後半期と推定される。

〔第4期〕

第4期を構成する住居はB D 62・B H 56・C E 12・C F 56・C I 53・C B 09の6棟とC H 30竪穴状遺構である。これらの住居群の中ではB D 62住居跡が規模が大きく（4類）、他は、中小規模（1・2類）で、これらは北側段丘上にⅢ期の住居群をきけて点在する。カマドは、北壁に位置するものが減少し、東壁及び南壁に付設されるものが多くなるが、特に、南壁に付設されるものが増加する。カマドの側壁の構築はⅢ期のそれとあまり変わらないがカマドの断面形

態からみると焚口部で一端煙道が上に上がり、次は次第に下降して煙出部に接続するものが多い。柱穴は1辺4m以上の規模のものにのみ認められ、それが対角線上より一方向の壁面に寄るという特徴をもつ。鉄製品はB H56住居跡のみで出土数が少ない。

これらの住居群の構築年代は第IV群に併行するものである。しかし、年代については、明確な根拠になる資料という点では不足しており、県内における類似土器群出土の他遺跡の例などを参考にするならば、平安時代前半期頃ということが考えられる。

[第5期]

第5期を構成する住居はB F50・B G59・C B03・D A24・D C12・B H12の6棟の住居群とD C12竪穴状遺構である。この期の住居は、小形化が目立ち、1・2類に属する小規模のものになる。これらのうち、B G59住居跡は、4期のB H56住居跡と南壁が一部重複して構築されているが、他は、いずれの住居跡もさけて点在している。カマドは東壁に付設され中でも中央より北に寄った位置に存在するものが多い。又、側壁は、シルトのみで構築されるようになる。柱穴は1辺4m以上のものには認められるのは第4期のものと同じであるが、あまりはつきりしない例が多い。

鉄製品の出土はB F50・C B03・B G59、砥石はB F50・C B03の各住居から出土しており所有率は約5割である。これらの構築年代は、第V群に併行する時期と考えられるが、4期と同じように県内の類似の土器群出土の遺跡の例などから平安時代後半期頃と推定される。

(注1・2)「未期古墳の年代について—東北地方未期古墳出土遺物を通して—」伊藤亥三「古代学」14の3・4 1968年。岩手県内からは「花巻市熊堂古墳」「金ヶ崎町西根縦街道南15」の古墳関連の遺構からの出土例が述べられている。又「陸奥北半における未期群集墳の性格」沼山源喜治「北奥古代文化」第8号 昭和51年5月の中に「岩手郡上太田蛭夷森古墳群」から出土していることが述べられている。

(注3)「奈良、平安期土器の型式学的分析」—岩手県猫谷地遺跡出土器の分析を通して—佐久間豊「考古学研究」25-2 1978, 9

4 まとめ

以上、本遺跡における古代の集落跡についてまとめるところとなる。

1. 集落は古墳時代後半期に低位段丘縁辺に最初に形成され途中多少の断続はあるが奈良～平安時代にわたってその消長がくりかえされてきた。
2. 立地は、低位段丘上から自然堤防上へ、そして、又、低位段丘上へと変化が認められた。
3. 集落の構成は調査範囲という規制はあるが、3～6棟が一つの集落を形成し、各期における差異が比較的少ない。規模は、古墳時代中期頃においては差がほとんどないのに対して、後期後半～奈良時代にかけては、中核となる大形住居を中心として集落を形成する傾向にあり、これらの集落の形態は当地域における一つのパターンとも考えられる。

4. 住居の形態をみると、棟方向はほぼ南北指向であり、それが古期に属するものほど強い傾向がある。カマドについても北壁中心から南壁、東壁への移動やカマドの構築上の変化がみられ、柱穴の位置の変化や有無などそれぞれ時期的な傾向性が認められた。

5. 出土遺物についてみると、大形住居における出土量が特に多く器種的にも豊富である。このことは、その集落間における有力者の存在をも考えられ、人々の間に何等かの差の表われてきていることを示唆しているものであろう。又、各期における日常汁器を中心としたセット関係がある程度把握された。

6. C E 68住居跡より出土した「和銅開跡」は、遺跡の年代、性格等を考える上での貴重な資料である。

おわりに、本遺跡の東隣及び西方に位置する猫谷地古墳群、五条丸古墳群等の関係についてはふれなかつたが今後両古墳群の出土遺物の検討や未期古墳の性格、当時の集落と墓域との関係及び、当遺跡や周辺の遺跡における出土資料等をも合わせて多方面から検討することがこれから課題である。

〔参考文献〕

- ・江釣子村史 江釣子村教育委員会
- ・「江釣子遺跡群—昭和54年度発掘調査報告書」 江釣子村教育委員会 昭和55年3月
- ・「江釣子遺跡群—昭和55年度発掘調査報告書」 江釣子村教育委員会 昭和56年3月
- ・「五条丸古墳群—和賀郡江釣子村所在」 伊東信雄 板橋源 岩手県教育委員会 昭和38年
- ・「猫谷地・五条丸古墳群（増補再刊）」 江釣子村教育委員会 昭和53年
- ・「五条丸古墳群の被葬者たち」 林謙作 考古学研究25-3 昭和53年12月
- ・「整穴住居の分類と系譜」 橋本正 考古学研究23-3 昭和51年12月
- ・「七世紀初頭における集落構成の変質」 山田猛 考古学研究28-3 昭和56年12月
- ・「胆沢城と古代村落—自然村落と計画村落—」 伊藤博幸 日本書研究215 昭和55年7月
- ・日本の考古学—古墳時代一 河出書房新社 昭和53年
- ・「和銅開跡をめぐる諸問題」 佐藤虎雄 古代学11-4 昭和39年
- ・「出土資料によるわが国貨幣の考察」 矢島恭介 古代学11-4 昭和39年
- ・「五輪C遺跡」 宮城県文化財調査報告書第61集
宮城県教育委員会 東北地方建設局仙台工事局 昭和54年8月
- ・「親音沢遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集 東北新幹線関係遺跡調査報告書—I
宮城県教育委員会 日本国有鉄道仙台新幹線工事局
- ・「棘塚遺跡」 宮城県文化財調査報告書第53集 東北自動車道関係発掘調査報告書(昭和52年度分)
宮城県教育委員会 日本道路公团
- ・「舞台」 一福島県天栄村における古墳時代の集落一 福島県天栄村教育委員会 昭和56年
- ・「玉貫遺跡・西根遺跡」 金ヶ崎バイパス関係遺跡発掘調査報告書I
岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書18集 (財) 岩手県埋蔵文化財センター 建設省岩手工事局
- ・東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—I
岩手県文化財調査報告書第59集 岩手県教育委員会 日本道路公团 昭和56年3月
- ・一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書—I
一戸町教育委員会 建設省岩手工事事務所 昭和56年

表計集片破第17表

M 猫谷地遺跡出土の穀について

佐藤 敏也

I BD62住居址出土の穀（計測表、図版57）

猫谷地BD62住居址南壁のカマド煙道部内に在った広口の甕から検出されたものである。発掘時甕には土壤がぎっしり充填されていたということである。バラバラの粒は表面面白く灰におおわれているが、心の穀は黒炭化していた。ほとんどの粒の身は空洞化し、よほど留意して計測しないとつぶれてしまう。この状態は、穀が甕の中で蒸し焼きされ黒炭化したのち更に再び強い熱気を浴びて外部組織が炭化したこと示している。白い灰粉は、穀殻の炭化した組織細粉である。破碎しやすく、少しの振動で粉化する状況で、総数約千粒、大半が不完全粒である。完形530粒の中30%、160粒を計測した。計測は米粒とした後行った。

1 粒形の変異（計測表、第1・2図）

粒長の最大5.40mm(No.1)、最小3.30mm(No.160未熟粒)、平均4.18mm、 $\pm 0.38\text{mm}$ 、粒幅の最大3.50mm(No.35・67、焼け太り粒)、最小2.40mm(No.130・137・149、不稔、未熟粒)、平均2.95mm、^(注1)±0.24mm、粒厚の最大2.70mm(No.24、焼け太り)、最小1.40mm(No.147、未熟粒)、平均(m)2.06mm、±0.20mm、粒型の最大1.74mm(No.1)、最小1.12mm(No.157、未熟粒)、平均1.42、 ± 0.13 、粒の大きさの最大14.74mm(No.1)、最小8.25mm(No.160、未熟粒)、平均(m)12.40mm、 $\pm 1.70\text{mm}$ 。

2 粒型とその大きさ（第1表-1・2）

粒型をあらわすために original data から計算した粒長×粒幅比を、また粒長×粒幅積を求めて粒の大きさを表わす分類基準とした表に該当する計測値をプロット（実際には第1表のように番号を入れていく）して集計すると、計測した160粒中、粒型では短粒84(52.50%)、円粒76(47.50%)であり、粒の大きさの点では、中粒1(0.62%)、小つぶ粒101(63.13%)、極小つぶ58(36.25%)で、短粒と円粒の小つぶ粒が圧倒的に多い。

粒型とその大きさから判断される範囲では、BD62住居址出土粒、DA24住居址出土粒とともに短粒と円粒の小つぶ粒が圧倒的多数の構成をもつ粒群であるといつてできる。従ってこれら米粒群についての粒型とその大きさの構成比率は、第1表-2にみられるように、主として短粒から構成され、それに、それよりも少量の円粒を混えるといつて、東北地方で古くから栽培されていた稻の基本的パターン S, R. を示し、東北地方のプロトタイプに属するものであるといえる。

II DA24住居址出土の穀（計測表、図版58）

黒炭化した約4グラムの穀塊(70mm×60mm×35mm)で、現に二片に割れているが、もとは一個体に属していたものであろう。各面に自然面を残していくて極めて狭い空間の中で蒸し焼きされたという状態である。二側面にところどころ平滑面がみられる、その幅1cm未満、長さも最

も長いところで3cm、少々湾曲している。幅せまい長辺の一側面は平らで、焼け砂が未だ残っているところをみると、この側で住居の床面へ接していたものかもしれない。計測には脱粒の米粒によった。

1 粒形（計測表、第1・2図）

粒長の最大5.30mm(No.1)、最小4.00mm(No.22・23)、平均4.51mm、 ± 0.35 mm、粒幅の最大3.30mm(No.18・22)、平均2.88mm、 ± 0.23 mm、粒厚の最大2.30mm(No.14、焼けぶくれ粒)、最小1.60mm(No.19、未熟粒)、平均1.97mm、 ± 0.17 mm、粒型の最大1.96mm(No.1)、最小1.21mm(No.22、未熟粒)、平均1.57、 ± 0.18 、又、粒の大きさの点では最大15.50mm(No.3)、最小10.32mm(No.17)、平均12.99mm、 ± 1.33 mmである。

2 粒型とその大きさ（第1表—1・2）

粒型についていえば、23粒中20粒(86.96%)が短粒、3粒(13.04%)が円粒であり、その大きさでは、18粒(78.26%)が小つぶ粒、5粒(21.74%)が極く小つぶの粒である。これらの粒の構成のパターンはS.R.である。

III 要 約

1. BD62、DA24両住居址出土粒は短粒小つぶが主体である。
2. 粒構成のパターンは、S.R.で東北地方のプロトタイプに属する。
3. 粒型は円く有芒であり日本型を示す在来稻である。
4. BD62の粒型を示す平均値 1.42 ± 0.13 、その母集団における95%信頼限界 $1.40 < \mu < 1.44$ と、DA24の粒型を示す平均値 1.57 ± 0.18 ならびにその母集団における信頼限界 $1.49 < \mu < 1.65$ ではあまりに隔絶しているので、その差を比較検定した結果、それらの間に有意差を認められなかったので、肉眼的所見とも矛盾なく、同一品種群に属するものと解される。

(注1) 平均 \bar{X} と平均値 \bar{x} とは多くの場合一致したが、違った場合は \bar{x} を採用し(m)と表示した。

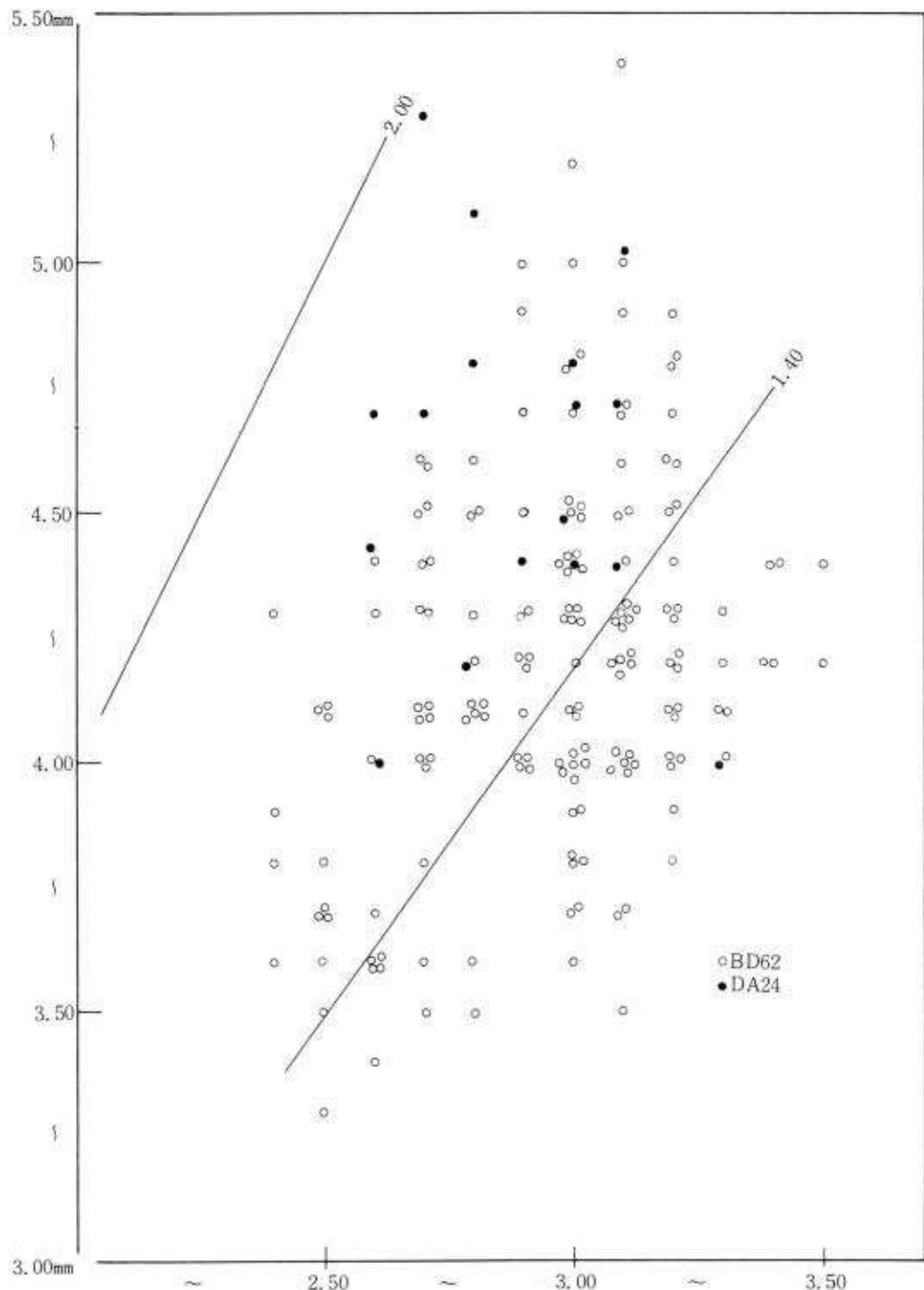
(注2) 分類基準については「東北縦貫自動車道文化財調査報告書」(1981) P.310

(注3) 東北地方の粒の構成パターンとしては、(1) S.R.；(2) L.S.R.；および(3) L.S.；の三つのパターンがある。大瀬川C遺跡、柳田館および花巻古館遺跡の出土粒にみられる。

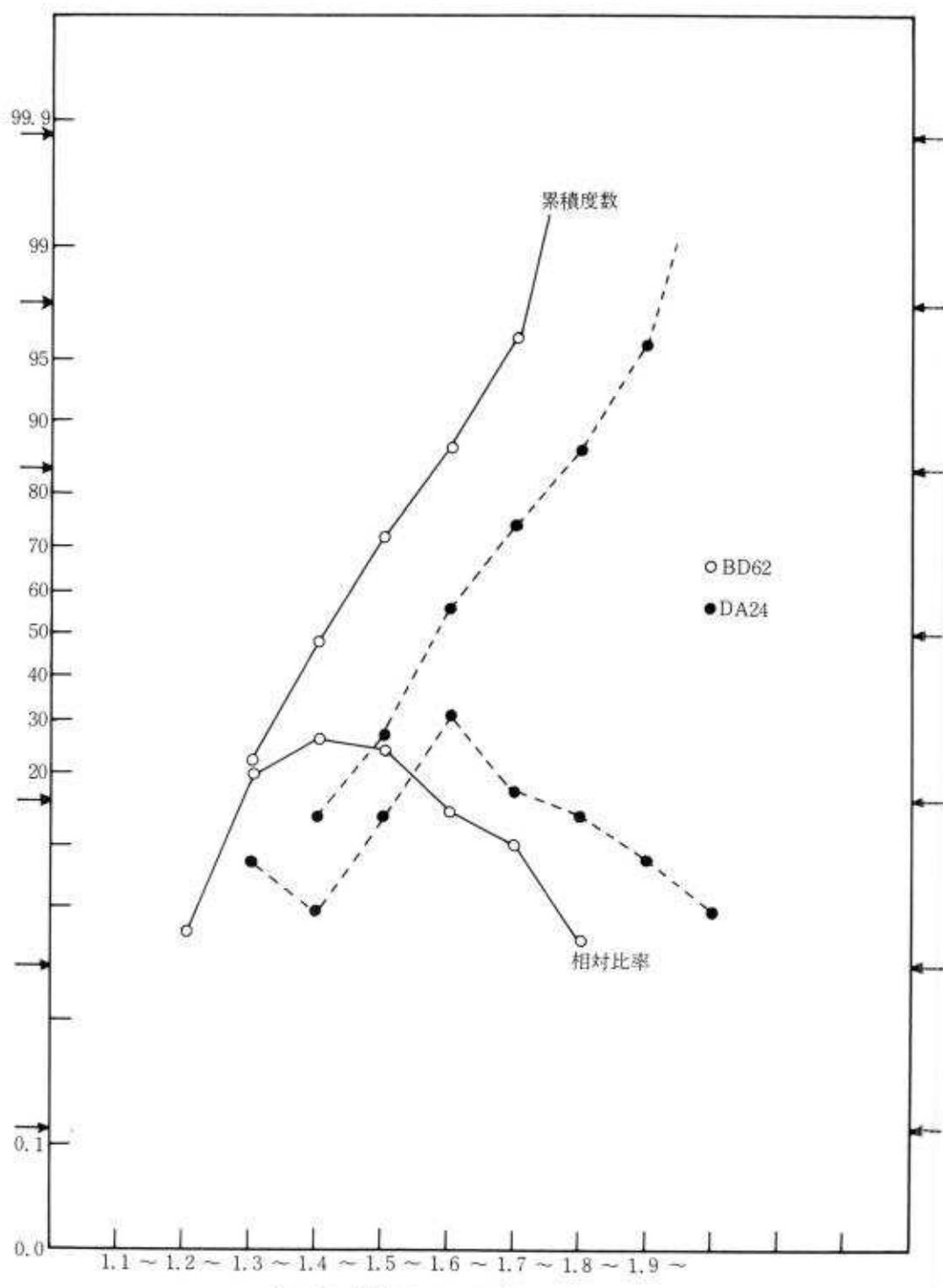
(「東北縦貫自動車道文化財調査報告書」(1981) P.310)

(注4) 平均値相互検定については下式によった。

$$t_{0.05} = \frac{|\bar{x}_1 - \bar{x}_2|}{\sqrt{\frac{Sx_1 + Sx_2}{n_1 + n_2 - 2} \left(\frac{1}{n_1} + \frac{1}{n_2} \right)}}$$



第1図 猫谷地住居跡出土米粒の変異



第2図 猫谷地BD62及びDA24粒型(L/B)

第1表-1 猫谷地遺跡出土粒の粒型とその大きさ

Shape	Size	～極々小～ 8:00				～ 極 小 ～ 12:00				～ 小 ～ 16:00				～ 中 ～				合 計
		mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm	mm		
長 粒	2.00以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
短 粒	1.80～2.00 以上 未満	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	84 (52.50%)	
	1.60～1.80 以上 未満	—	44.45.46.99.100.101 16.17	—	2.3.5.8.11.12.16.20. 22.23.31.32.33 3.4.5.8.11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	1.40～1.60 以上 未満	—	65.66.82.90.91.92.93 94.95.96.97.98.123. 124.125.126.130.135. 136.137.138.139.140. 145.147.149.155 19.20.23	—	6.7.9.10.13.14.15.17 18.19.21.24.25.26.27 28.29.30.38.39.40.41 42.43.57.58.59.60.61 62.63.64.78.79.80.81 6.7.10.12.13.14.15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20 (86.95%)	
	～1.40 未満	—	119.120.121.122.128. 129.132.133.134.141. 142.143.144.146.148. 150.151.152.153.154. 156.157.158.159.160	—	34.35.36.37.47.48.49 50.51.52.53.54.55.56 67.68.69.70.71.72.73 74.75.76.77.83.84.85 86.87.88.89.102.103. 104.105.106.107.108. 109.110.111.112.113. 114.115.116.117.118. 127.131 18.21.22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	76 (47.50%)	
合 計		—	58(36.25%)	—	101(63.13%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	160 (100%)		
		—	5(21.74)	—	18(78.26%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23 (100%)		

※グラフはDA24出土粒の番号

第1表-2 粒型の構成

出 土 区	粒 長 粒 (Long)	短 粒 (Short)				円 粒 (Round)				合 計
		中	小	極小	小計	中	小	極小	小計	
BD62	—	1	50	33	84 (52.50)	—	51	25	76 (47.50)	160 (100)
BD62 (1978年)	—	2	52	7	61 (61.00)	1	24	14	39 (39.00)	100 (100)
DA24	—	—	15	5	20 (86.95)	—	3	—	3 (13.04)	23 (100)

表1 猫谷地BD62住居址出土物

No.	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
1	5.40	3.10	2.10	1.74	16.74	着粒部残る
2	5.20	3.00	2.20	1.73	15.60	計測中破損
3	5.00	3.10	2.00	1.61	15.50	
4	5.00	3.00	2.30(2.80)	1.66	15.00	厚き焼けぶくれ
5	5.00	2.90	2.10	1.72	14.50	
6	4.90	3.20	2.30	1.53	15.68	
7	4.90	3.10	2.30	1.58	15.19	
8	4.90	2.90	2.20	1.68	14.21	
9	4.80	3.20	2.00	1.50	15.36	
10	4.80	3.20	2.40	1.50	15.36	
小計	49.90	30.70	21.90	16.25	153.14	
11	4.80	3.00	2.00	1.60	14.40	
12	4.80	3.00	2.20	1.60	14.40	
13	4.70	3.20	2.40	1.46	15.04	破損
14	4.70	3.10	2.00	1.51	14.57	
15	4.70	3.10	2.00	1.51	14.57	
16	4.70	2.90	2.00	1.62	13.63	
17	4.70	3.00	2.20	1.56	14.10	
18	4.60	3.20	2.00	1.43	14.72	⑩
19	4.60	3.20	2.10	1.43	14.72	
20	4.60	2.70	1.90	1.70	12.42	①
小計	46.90	30.40	20.80	15.42	142.57	
21	4.60	3.10	2.10	1.48	14.26	
22	4.60	2.80	2.20	1.64	12.88	
23	4.60	2.70	2.00	1.70	12.42	
24	4.50	3.20	2.70	1.40	14.40	
25	4.50	3.10	2.30	1.45	13.95	
26	4.50	3.10	2.10	1.45	13.95	
27	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
28	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
29	4.50	3.00	1.70	1.50	13.50	
30	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
小計	45.30	30.00	21.30	15.12	135.86	
31	4.50	2.80	1.70	1.60	12.60	未熟粒
32	4.50	2.80	2.30	1.60	12.60	
33	4.50	2.70	2.00	1.66	12.15	
34	4.40	3.40	2.20	1.29	14.96	焼け太り
35	4.40	3.50	2.10	1.25	15.40	焼け太り
36	4.40	3.40	2.20	1.29	14.96	焼け太り
37	4.40	3.20	2.40	1.37	14.08	焼け太り
38	4.40	3.10	2.20	1.41	13.64	焼け太り
39	4.40	3.00	2.30	1.46	13.20	焼け太り
40	4.40	3.00	1.60	1.46	13.20	
小計	44.30	30.90	21.00	14.39	136.79	

表2 猫谷地BD62住居址出土物

No.	L	B	Th	L/B	L×B	remarks
41	4.40	3.00	2.30	1.40	13.20	焼け太り
42	4.40	3.00	2.10	1.40	13.20	焼け太り
43	4.40	3.00	2.30	1.40	13.20	焼け太り
44	4.40	2.70	2.10	1.60	11.88	
45	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	焼けぶくれ ①
46	4.40	2.60	1.90	1.62	11.44	
47	4.30	3.30	2.30	1.69	14.19	
48	4.30	3.20	2.10	1.39	13.79	胴切れ ② 焼けぶくれ
49	4.30	3.20	2.40	1.34	13.76	厚さ焼けぶくれ
50	4.30	3.20	1.90	1.34	13.76	
小計	43.60	29.90	21.40	14.45	130.27	
51	4.30	3.10	2.00	1.38	13.33	
52	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
53	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
54	4.30	3.10	2.40	1.38	13.33	焼け太り
55	4.30	3.10	1.90	1.38	13.33	
56	4.30	3.10	1.90	1.38	13.33	
57	4.30	3.00	2.10	1.43	12.90	幅焼けぶくれ ③
58	4.30	3.00	2.20	1.43	12.90	
59	4.30	3.00	2.10	1.43	12.90	
60	4.30	3.00	1.90	1.43	12.90	
小計	43.00	30.60	20.90	14.00	131.58	
61	4.30	3.00	2.10	1.43	12.90	
62	4.30	2.90	2.20	1.48	12.47	
63	4.30	2.90	2.50	1.48	12.47	厚さ焼け太り
64	4.30	2.80	2.00	1.53	12.04	
65	4.30	2.70	1.90	1.59	11.61	
66	4.30	2.70	1.90	1.59	11.61	
67	4.20	3.50	2.20	1.20	14.70	
68	4.20	3.40	2.20	1.23	14.28	
69	4.20	3.40	2.50	1.23	14.28	焼け太り
70	4.20	3.20	2.30	1.31	13.44	
小計	42.60	30.50	21.80	14.07	129.80	
71	4.20	3.20	2.20	1.31	13.44	
72	4.20	3.20	2.00	1.31	13.44	
73	4.20	3.10	2.10	1.35	13.02	
74	4.20	3.10	1.80	1.35	13.02	
75	4.20	3.10	2.00	1.35	13.02	
76	4.20	3.10	2.10	1.35	13.02	
77	4.20	3.10	2.10	1.35	13.02	
78	4.20	3.00	2.10	1.40	12.60	
79	4.20	2.90	2.30	1.44	12.18	厚さ焼け太り
80	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
小計	42.00	30.70	20.70	13.65	128.94	